

保木下遺跡

HO KI NO SHITA

新名爪川小規模河川改修事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

1986.3

宮崎県教育委員会

# 保木下遺跡

新名爪川小規模河川改修事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

1986.3

宮崎県教育委員会

## 序

近年、宮崎県におきましては宮崎学園都市の建設等の大型プロジェクトをはじめとして、市街地近郊の宅地造成、農業基盤整備事業等の開発が急ピッチに進められています。宮崎県教育委員会では、関係機関と協議を行ない文化財の保存に努めています。

このたび、宮崎市に所在する新名爪川の小規模河川改修事業に先立ち記録保存のため、昭和59年度に保木下遺跡の発掘調査を行ないました。今回の調査では、近世頃と推定される水田址をはじめ、弥生中期を主体とする大量の土器を発掘し大きな成果を上げることができました。

本書が学術資料として、また社会教育、学校教育の場で活用されると共に、埋蔵文化財に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって、御協力いただいた関係諸機関をはじめ、指導助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船木哲

## 例　　言

1. 本報告書は、新名爪川小規模河川改修事業に伴う保木下（ほきのした）遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は昭和59年9月5日から昭和60年1月22日まで実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　　宮崎県教育委員会

教　育　長	後藤賢三郎（昭和59年度）船木　哲（昭和60年度）
文　化　課　長	平田　和彦（昭和59年度）永井初志（昭和60年度）
主　幹　兼　埋　藏 文　化　財　係　長	田中　茂（昭和59年・60年度）
庶　務　係　長	安部信宏（昭和59年度）日高達男（昭和60年度）
調　　査　　員	面高哲郎（県教育庁文化課主任主事） 近藤　　協（県教育庁文化課主事）

4. 本遺跡調査においては諸分析を実施した。プラントオバール分析については藤原宏志氏（宮崎大学農学部）、花粉分析については中村純氏（元高知大学教授）、土壤分析については有村玄洋氏（県総合農業試験場）にそれぞれ依頼し、御指導いただいた。また、陶磁器については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に御教示いただいた。
5. 遺物の実測・トレース・図面の作成については、面高・近藤の他、金丸琴路、川崎法子があたった。
6. 本書の執筆は、第1章第1節・第2章第2節1を面高が行い、その他は近藤が執筆した。編集は近藤が行った。
7. 遺物は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

## 本 文 目 次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 遺跡の位置と環境 .....	1
第3節 調査の概要 .....	3
第4節 層序 .....	5
第2章 遺構と遺物 .....	10
第1節 水田遺構と遺物 .....	10
1. 水田遺構 .....	10
2. 水田遺構中の遺物 .....	16
第2節 新名爪川旧河道跡からの出土遺物 .....	19
1. 弥生土器 .....	19
2. 石器及び石製品 .....	42
3. 土師器 .....	46
4. 須恵器 .....	48
5. 輸入陶磁器 .....	50
6. 中世陶器 .....	52
第3章 結語 .....	55
（付）諸分析の結果 .....	59
1. 土壌分析 .....	59
2. プラントオパール分析 .....	66
3. 花粉分析 .....	68

## 挿 図 目 次

第1図	保木下遺跡位置図	2
第2図	保木下遺跡発掘区	4
第3図	土層柱状図	6
第4図	土層断面実測図	7～8
第5図	畦畔・水路・畝状遺構図	11
第6図	畦畔断面図	12
第7図	畝状遺構図	14
第8図	水路断面図	15
第9図	水路断面図	15
第10図	水路分岐点平面・断面図	16
第11図	X層出土遺物実測図	17
第12図	II層出土遺物実測図	18
第13図	XI層出土常滑片実測図	18
第14図	廻層出土遺物実測図	18
第15図	H・I・J、K・L区遺物出土状況	20
第16図	弥生土器実測図 (1)	31
第17図	" (2)	32
第18図	" (3)	33
第19図	" (4)	34
第20図	" (5)	35
第21図	" (6)	36
第22図	" (7)	37
第23図	" (8)	38
第24図	" (9)	39
第25図	" (10)	40

第26図 弥生土器実測図 (1)	41
第27図 石器実測図 (1)	43
第28図 石器実測図 (2)	45
第29図 五輪塔・石製品・土師皿実測図	47
第30図 須恵器実測図	49
第31図 輸入陶磁器・須恵器実測図	51
第32図 中世陶器実測図	53

## 表 目 次

表-1 X層出土弥生土器観察表	19
表-2 露層出土土師皿観察表	19
表-3 弥生土器観察表	25~30
表-4 土師器観察表	48
表-5 須恵器観察表	48
表-6 中世陶器観察表	54

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経過

昭和56年より宮崎土木事務所では石崎川の支流新名爪川の河川改修工事を行っている。昭和59年1月、宮崎土木事務所より文化課へ昭和59年度以降の事業区内での文化財所在の有無について照合があり、2月分布調査を行い、事業区内及びその周辺で7ヶ所の散布地が確認された。うちの1ヶ所、保木下遺跡は昭和59年度の工事区内に含まれていたため、昭和59年6月試掘調査を実施した。調査地の層序は、表土より粘土層、流水堆積砂層、砂層に大別される。流水堆積砂層の最下層には鉄分を含む盤が形成され、その上層において弥生中期を中心とした遺物が含まれていた。また、粘土層はほぼ水平に堆積し、畦畔と思われる高まりも認められたので宮崎大学へプランクトン・オバール分析を依頼した。分析結果でもプランクトン・オバールのピークが確認されたことから時期不詳ながら水田跡の存在予想された。

宮崎土木事務所と遺跡の保存法について協議を重ねた結果、工事着手前に発掘調査を行うことになり、昭和59年9月5日から昭和60年1月22日まで発掘調査を実施した。

### 第2節 遺跡の位置と環境

保木下遺跡は宮崎市大字島之内字保木下にある。同地区は宮崎市の北端にあたり、宮崎郡佐土原町に隣接している。

遺跡は石崎川を本流とする小支流新名爪川左岸の標高5mに位置し、国道10号線から約500m西に入った県立養護学校校庭の南裏にある。本流である石崎川は佐土原町広瀬に河口をもち、日向灘に注ぐ二級河川で6本の主な支流をあつめて、上流の六ツ野原台地等を開拓しながら佐土原町南部を複雑に蛇行しつつ、東流している。小支流となる新名爪川は趨勢として北流するが、遺跡付近で向きが変わり、本流とは逆に北西に流れる。

過去において石崎川は、洪水による氾濫を繰り返し、流路を変え続けたがその豊富な水で農民に恩恵を与えることはなかった。一帯は基本的に砂地であって保水が悪く、旱害にあいやすい。

“水利ハ便ナラズ池水ヲ蓄テ灌漑ニ供スト雖トモ時々旱害ヲ免レズ”<sup>註1</sup>とあるように悉らくラグーンを利用したものが多かったろうが灌漑用のため池が数多くつくられた。例えば長池のように南北約500m、東西約100mに及ぶものなどがあり、大小あわせて57ヶ所もあったという。それら大小のため池にはまた数本の小溝が開鑿されて一帯にはり巡らされ、灌漑に供された。現在では、これらのため池はほとんど姿を消して宅地と変わっている。



- 1. 保木下遺跡
- 2. 中溝遺跡
- 3. 下那珂遺跡
- 4. 岩穴ヶ迫横穴群
- 5. 年居横穴群
- 6. 土器田横穴群
- 7. 城ヶ峰横穴群
- 8. 蓼ヶ池横穴群

第1図 保木下遺跡位置図

大淀川左岸の宮崎市から佐土原町、新富町にかけて、南北に細長く伸びる砂丘地帯は弥生時代の遺跡が多く確認されているが、保木下周辺にそれを求めるに、石崎川河口に近い一つ葉有料道路基点付近の佐土原町大字下那珂字中溝に所在した中溝遺跡がある。他に石崎川の右岸、県立盲学校から北東約500mに丹塗の袋状口縁壺形土器が出土した西片瀬原、石崎川に架る岩瀬橋付近の河底から発見された石崎川上流貝塚があり、県総合農業試験場裏の丘陵にある下那珂貝塚からは“飛鳥”的線刻が描かれた壺が出土している。

註5

上記のようにこの蛇行しながら東流する石崎川によって造られた氾濫原と砂丘上は濃密な遺跡包蔵地であることが知られる。弥生時代以降においては沖積平野や小丘陵上に高塚古墳が散在するが、むしろこの地域を代表するのは横穴古墳である。主な分布域は石崎川を眺む丘陵地にあり、総合農業試験場北には玄室内に人や鳥、連続三角文を描いた線刻画を有する土器田東1号横穴のあった土器田横穴墓群が、同じく同試験場西側の丘陵に城ヶ峰横穴墓群、さらに上流の突出丘陵南面に年居横穴墓群をみることができる。石崎川河畔から離れた北部丘陵には同じく岩穴ヶ迫横穴墓群がある。

時代は前後するが、石崎川上流にあって佐土原町の西端、西都市に隣接する船野では小型のナイフ型石器に細石刃、細石核で構成された旧石器が出土し注目された。

以上のように石崎川流域は、中下流域を中心として上流から下流域に至るまで注目に値する遺跡の集中地である。

#### 註

1. 『日向地誌』平部嶋南 昭和4年
2. 註1.に同じ
3. 『佐土原町中溝遺跡調査報告書』宮崎県道路公社 1972年
4. 「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『研究紀要』3.宮崎県総合博物館1975年
5. 『宮崎県総合博物館収蔵資料目録・考古・歴史資料編』宮崎県総合博物館、1983年、中に実測図掲載
6. 「土器田横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書第23集』1981年

#### 第3節 調査の概要

発掘調査着手前の遺跡一帯は、昨年まで稲作が行なわれていたというが、地表面を見ることができないほどに水田近辺雑草が一面に繁茂していた。聞きとり調査によれば一帯は大雨のたびに

冠水し、昨夏にも人家近くまで水位が上ったということで、複雑に蛇行する新名爪川の一端を窺わせる。遺跡近辺で稻作に従事されている方によれば一帯は昔から米の良くとれる肥沃な土地であるという。現在の水田面は県総合農業試験場による調査によれば、“乾田”である。

さて、調査にあたっては、水田址ということから湧水が懸念されたため、まず新名爪川に排水する形で調査区を「コ」の字に区切るように、幅約1.5m、深さ1.4~1.6m、延長130mの排水溝を重機によって掘削した。予想に反して湧水はなかったが、排水溝は土層の堆積状態の観察と諸分析のサンプル採集に利用した。調査は第2図のように地形に合せて10×10mグリッドを設定し、グリッドごとに掘りすめることとした。事前のプラントオバール分析の結果、第X層に稲プラントオバールのピークのひとつが認められ、また、第X層が黄色帯となって上下層との識別も容易であったので、第X層上面まで重機で全面にわたって表土を剥ぐこととした。表土下、平均40~50cmの深さで剝いでいる。

結局、水田址と考えられた第X層上面には砂層などの水田面を被覆する堆積層がなかったため、精査作業は先述の排水溝断面で土層を確認しながら、粘質土壤を数センチづつ薄く剥ぎとる根気のいる作業となり、これに終止することになった。

水田土壤である本遺跡の土質は粘土質で乾くと非常に堅く、逆に降雨にあうと泥率となる。乾燥が進むと、ヒビ破れが走り表面観察が不可能となるため、一日の作業終了間際に散水しグリッドごとにビニールシートで被覆して明日の作業に備えるのが日課となつた。

手掘りによる精査作業は、A 1、2区から順に東区画へと掘り進み、A 2区のX層上面において幅40~45cm、長さ約4.8mほどの北西に伸びる畦畔を初めて確認した。畦畔の高さは1cmあるか無しかであり、上層に圧迫されたか、あるいは人為的に削られたもののように思われた。全ゲ



第2図 保木下遺跡発掘区（1/800）

リッドを通して蛙群の高まりを確認し得たのはこの一本のみであり、残りの蛙群はただ色合の違った帶としてのみ確認できたにとどまった。また、D2、D3区では鋤ですいた跡あととみられる数条の帯がみとめられた。水田遺構確認後、A3、4区の一部、B3区、C3区を重機によって約2.5m掘り下げて弥生土器片の取り上げを行った。この部分の土層は、基本的に砂質で、部分的に帶をなした暗黒色粘土層があって、この部分に土器片が詰っていた。土器の堆積状態、土層の状態からこの部分は旧河川によって運搬堆積したものと考えられ、これらの土器は周辺の居住地域からの流れ込みであろうと考えられた。試掘調査の段階でこの流れ込みによる層は弥生時代に相当するものであろうと考えていたが、大量の弥生土器片に混じって中世の陶磁器、土師皿、五輪塔の残渣等の出土をみて、この層が中世に相当するものであることが判明した。

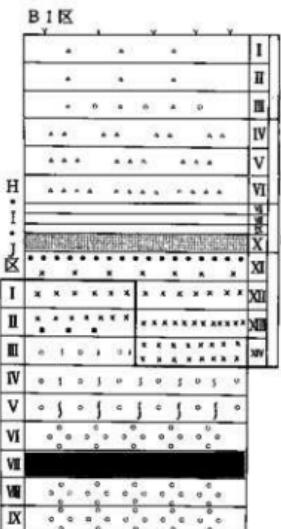
#### 第4節 層序

現地形は北東方向が幾分高く、南西、すなわち現在の新名爪川の方向に緩やかに傾斜している。水田遺構を検出した層の上下層を観ると上層はほぼ水平に堆積しているが、最下層付近では砂層が複雑に重なりあって、水田が営まれる以前においてこの周辺一帯が新名爪川の河道であったことを示している。すなわち、本遺跡の層序はほぼ水平堆積した水田面の層と、傾斜したり、断面レンズ状に砂層がはまつた旧河川の堆積作用によるものと考えられる砂土堆積層よりなっている。

水田面の層序は、各地点で多少の変化はあるものの堆積構成物の組成から基本的には1層から4層に大別でき、1～4層のそれぞれの層はまた構成物含有量の多寡による色調の相違や粒子の大小によりさらに細分される。水田土壤は通常の腐植土壤にみられるような単色とはならず、基本的には灰色の粘質土を基盤にして、その間に明褐色から暗褐色を呈する鉄分その他の輪郭のはっきりしない沈着物があり、それらが灰色粘質土中に散布する密度によって土色が規定される。

図3は比較的層序の明確なB-1区南壁面の一部を示している。1層（I、II、III層）は現耕作土層を含む灰～灰オリーブ色の環元土壤であり下層にゆくにしたがって、酸化鉄の沈着によるものと思われるオレンジ色が強くなるが、層界が明確なオレンジ色の層にはなっていない。I、II、III層ともバミスを極わずか含有している。I層は現耕作土で黄灰色を呈し、赤色と褐色の比較的大きな雲状斑をみると、雲状斑の分布は比較的疎である。II層はI層に比較してより明るいオレンジ色の雲状斑を比較的密にみることができる。III層ではI、II層に比べて雲状斑自体がひじょうに細かい。雲状斑にはオレンジ色と褐色のものがある。I、II層に比べてこの層はやや砂質である。

2層（IV、V、VI層）は1層よりやや濃い灰色を呈する基盤土壤をもち、灰白色の軽石小粒岩



△ 灰白色砾石粒 ● マンガン結核  
○ 砂 | 暗管状酸化鉄斑  
× 酸化鉄斑 ■ 黒色ブロック

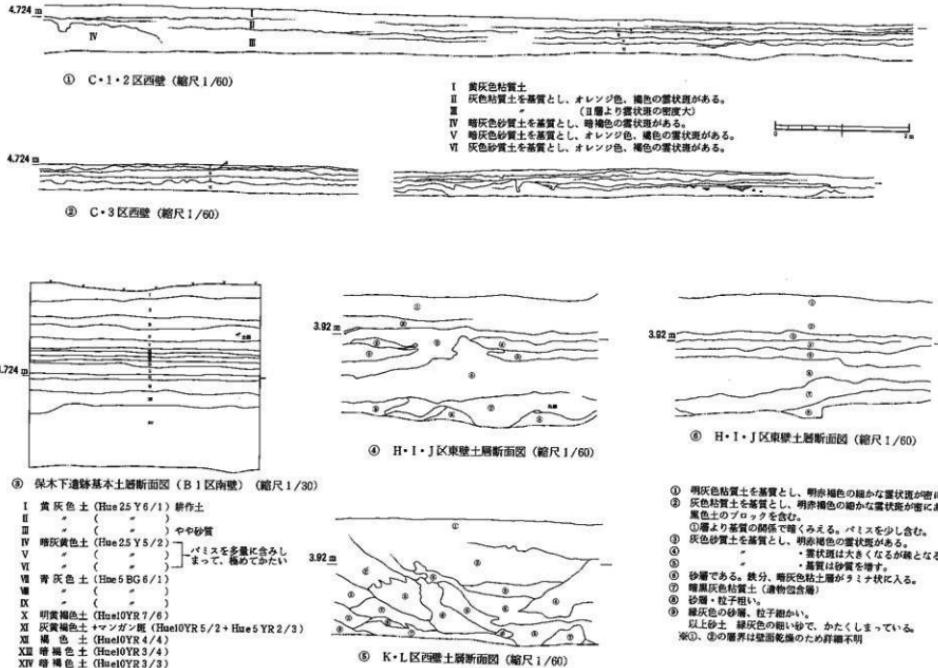
第3図 土層柱状図

片(バミス)を多量に含有する層であり、極めて堅くしまった層である。層はなしてないが、この層にも酸化鉄の沈着によると思われる不明瞭なオレンジ色雲状帯が見られた。IV、V、VI層のいずれにもオレンジ色と褐色の雲状斑が密にみられる。バミスの混入は下層ほど著しく、VI > V > IV層の順である。とくにIV層混入のバミスは粒が大きく5.0mm～8.0mmの大粒がみられ、それがために極めて堅くしまった土壌となっている。

3層(VII、VIII、IX、X層)は基本的に上層(VII、VIII、IX層)が青灰色のグライ土壌、下層(X層)は明黄褐色を呈する層であるが、地点によっては上層、下層が混ざり合って層界が不明瞭な地点や互層になる地点がある。調査区全体にこの層はみられるが、新名爪川の下流方向にゆくにしたがって層は薄くなる。また、下層の明黄褐色層は酸化鉄が極めて和水度の高い状態であったことを示している。3層は粘着性が強く、粒子は細かく均一で、バミス等をほとんど含まない。IV層との層界は極めて明瞭である。

4層(XI、XII、XIII、XIV層)は雲状斑に富む層で、層界は漸変して明瞭性を失くが、下層になるほど雲状斑の密度が高くなり、全体色も褐色が濃くなる。4層最上層のX層と接する面は水田址独特の土壌で暗赤褐色のマンガン結核が認められる層である。マンガン結核は、その集積に疎密が認められ、まったく検出しない面もある。大勢としては北東部に多く、南西部にいくにしたがって分布をみなくなる。4層はまた、下層になるにしたがって砂質度が高くなっていく。

XI層は大きめの褐色雲状斑を有し、同時に極めて特徴的な6.0～8.0mm大の暗赤褐色のマンガン結核を最上層にもつ。XII層はオレンジ色と褐色雲状斑を含む層で、オレンジ色雲状斑の比率が大きい層である。XIII層もオレンジ色雲状斑と褐色雲状斑を含むが、こちらは褐色雲状斑が多く全体としてXII層より濃い褐色となる。XIV層はオレンジ色雲状斑が極少なく、褐色雲状斑がほとんどを示め、基本土壌の灰色部分が少なく、全面褐色に近くなる。以上の層すべてに多少の差はある



第4図 土層断面実測図

がプラントオバールが検出されている。

B3.4区をさらに掘り下げた面であるH・I・J区のK・L区における土層は、一部水平堆積となつてはいるものの、異なる土質の層がレンズ状にはさまるか、あるいは傾斜した形で堆積している。(第4図4、5)

これは河川の運搬堆積作用によって比較的短期間のうちに形成されたものと思われる。ここでは比較的普遍な堆積状態を示すと思われるH・I・J区の東壁を示す。(第4図6)。

I層は明灰色粘質土を基本土壤として、明赤褐色の細かな雲状斑が密に含まれている。前述のXII層に対応する。II層は灰色粘質土を基本土壤として、明赤褐色の細かな雲状斑を密に含むが、その中に輪郭のはっきりしない暗い黒色のブロックがみられる。

III、IV、V層は灰色砂質土を基本土壤としており、明赤褐色の鉄分斑紋を顕著にみる層である。鉄分の暈管状斑はIII層からV層へと下る間に長くなつていき、V層では30mm~50mmの縦長の斑紋となる。III、IV、V層のこのよう斑文は地下水位の上下変動を示すものと考えられる。VI層は砂層そのものであり、鉄分が塊状に入ったり、オレンジ色の帯としてラミナ状にみられる。VII層は暗黒灰色の粘質層であり、遺物の多くはこの層に含まれていた。この層はグライ化が著しく、鼻をつく異臭がある。VIII層、IX層は全く遺物を包含しない砂層となり、VIII層は粒子の粗い灰色の砂層、IX層は粒子の細かい緑灰色の砂層で堅くしまっている。IX層を掘り込むと約30cm下で水が湧きはじめる。これによってII層以下はVII層を除いて基本的に砂層であって保水性が悪く水田土壤としての可能性はない。

以上、本調査区の上層は、特徴的な鉄分、マンガン集積帯がみられることから乾田性の水田であったことが窺える。

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 水田遺構と遺物

#### 1. 水田遺構

##### 微高地

A 1区、A 2区（一部）、B 1区（一部）、B 2区（一部）、C 1区（一部）には扇状に広がる微高地形が検出されている。微高地形は現新名爪川の方向にむかって緩やかに傾斜している。第X層（黄帯）とは明らかに土質が違っていたために、X層と微高地面との剥離は容易で、旧地形を比較的容易に検出することが可能であった。微高地を形成する土壤はやや砂質で硬くしまっている。A 1区とA 2区の接する微高地上に、ほぼN-S方向約8mに延びる浅い段を2本を検出したが、性格は不明である。この微高地形は北から広がってくる地山に続く部分であり、縁部は水田面に接するものと思われる。

#### A 2区

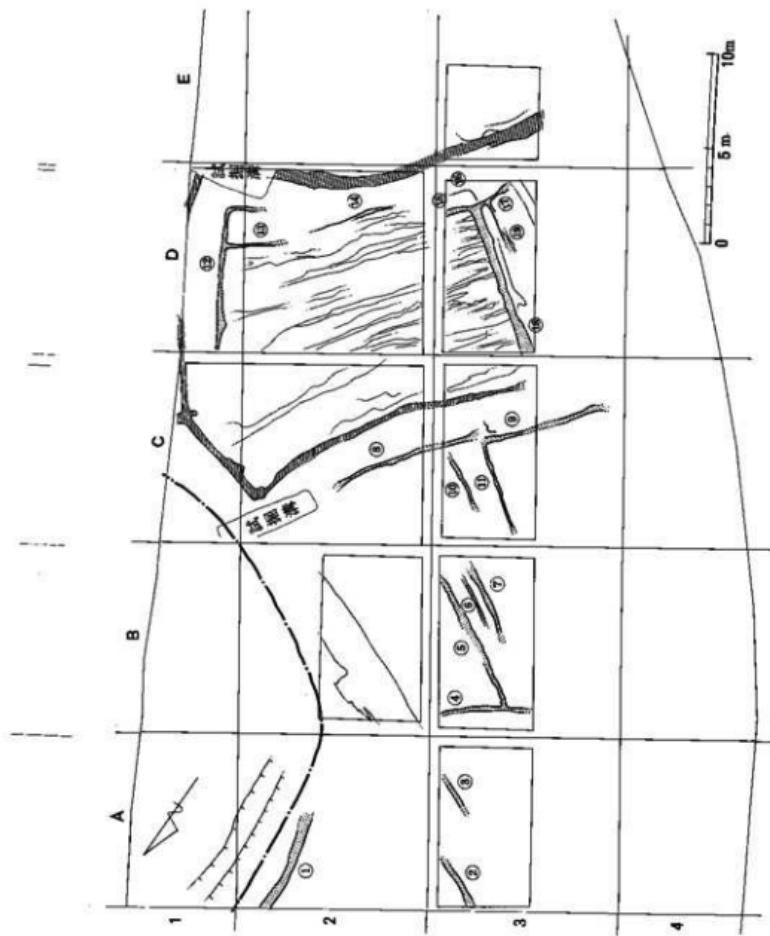
A 2区においては、NNNE-SSE方向に緩やかに屈曲しながら延びる幅40~45cm、長さ4.8mの畦畔①（N-75°-W）を検出した。この畦畔①は本遺跡において、畦畔の高まりを確認できた唯一のものである。畦畔の高まりは、水田床面より1.0cm~1.5cmを計測し、極めて低い値を示している。A 2区中ほどに設けたベルトによって断面（第6図）を観察すると、中央部がわずかに窪んでいるものの、この畦畔は台形状を呈していたことを示している。畦畔の土壤色調はHue7.5Y%の灰色を基色としHue7.5YR%の褐色雲状斑をみて、表面に極暗赤褐色を呈する6~8mmのマンガン結核を有する。畦畔土壤は、周辺の水田床面に比べて硬粘質で、おそらく踏み壓められていたものと考えられる。

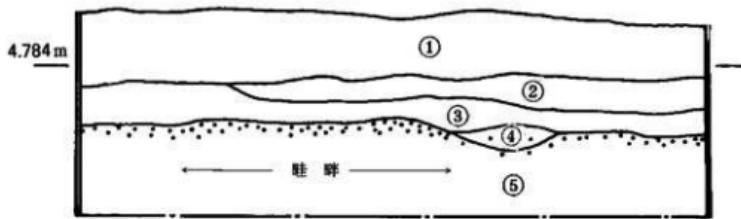
#### A 3区

A 3区では第X層（黄帯）を剥いだレベルにおいて、二本の途中絶した畦畔を検出した。しかし、畦畔の高まりは検出されず、いずれも水田床面と同レベルで土壤色調、土質の差異によってのみ畦畔と確認し得た。畦畔②はN-10°-Wに幅10.2cm、長さ2.2mにわたって延び、畦畔③はそれよりSE方向約4.5m離れた地点に幅20.2cm、長さ1.6mにわたって延びている。いずれもなおWNW-ESE方向に延びていたものと思われるが絶えている。

畦畔②は灰色Hue 5 Y%を基色とし、明褐色Hue7.5YR%と褐色Hue7.5YR%の雲状斑を

第5図 畑群・水路・軟状造構図 (1/300)





- ① 黄灰色土〔灰色軽石を含む〕(Hue 2.5 YR 6/1) ④ 青灰色土+極暗赤褐色(マンガン斑)  
 (Hue 5 BG 6/1) (Hue 5 YR 2/3)  
 ② 青灰色土(Hue 5 BG 6/1) ⑤ 灰黄褐色土+極暗赤褐色(マンガン斑)  
 ③ 明黄褐色土(Hue 10 YR 7/6) (Hue 10 YR 5/2) (Hue 5 YR 2/3)

第6図 A2区 畦畔断面図(1/10)

みるが雲状斑が細かく、かつ疊であるため全体は灰色となる。また畦畔③は基本的に先述の畦畔と色調の構成は同じであるが、雲状斑の割合がより少ないために青灰色を呈している。A2区畦畔①でみられたようなマンガン結核はこれ等にはみられない。

A3区の畦畔以外の土壤、すなわち水田床面と思われる土壤の土色は灰Hue 5 Y%を基色とし、明褐色Hue 7.5 YR %と褐色Hue 7.5 YR %の雲状斑からなるが、雲状斑の密度が高いために全体は灰褐色を呈している。しかし、畦畔②の北隅の面は色調を異にしている。この土壤面は灰Hue 7.5 Y%を基色とし、褐色Hue 7.5 YR %と明褐色Hue 7.5 YL %の雲状斑を有し、さらにマンガン沈着による極暗赤褐色Hue 5 YR %のマンガン斑を多量に含み全体に暗青灰色を示している。これはこの部分が他のA3区の土壤に比べて、強グライ環境にあったことを物語る。

### C2、3、4区

C2、3、4区においては基本的にN-62°-Eにはば直線にのびる畦畔⑥と、N-53°-Eの畦畔⑦、これら畦畔と交差する形の畦畔⑧(N-25°-W)、畦畔⑨(N-32°-W)からなる。

畦畔⑥はC2区より幅23~30cm、長さ7.7mを測るが、C3区中ほどでいったん切れて、約50cm位、WNW方向にずれて畦畔⑦となり、さらに6.6mほどSW方向に続く。

畦畔⑧は幅10~12cm、長さ4.7mをもって、先述のWNW方向にずれた畦畔⑦とほとんど垂直に接している。畦畔⑨は、畦畔の幅において畦畔⑧とはほぼ同じで、2.9mを測るが両端が切れて

検出不能であった。畦畔⑧、⑨、⑩の接点は断絶しており、明確に十字形、あるいはT字形をなしていない。畦畔⑧、⑨のように左右、あるいは前後に若干ずれが認められる例は他の遺跡でも指摘されている。

ここでは畦畔⑨と畦畔⑪、畦畔⑩と畦畔⑫によって区画される二枚の水田を想定しうるが、畦畔⑩、⑪がどのNE-SW方向にのびる畦畔と連絡しあうのかは不明である。あるいは畦畔④の継続畦畔と接するのかもしれない。畦畔⑧⑨⑩⑪の色調は明灰色Hue7.5Y%を基色とし、橙色Hue7.5YR%，明褐色Hue7.5YR%，褐色Hue7.5YR%の雲状斑が混じり全体に明灰褐色を呈している。C 2、3、4区の畦畔外の色調は、灰色Hue7.5Y%を基色とし、明褐色Hue7.5YR%，褐色Hue7.5YR%の雲状斑が混り、概して畦畔面より暗い色調であった、この区においても畦畔の高まりを検出していない。

### B 3 区

B 3 区は畦畔④（N -42° - E）、これに接してWNW - ESE方向に枝わかれする畦畔⑤（N - 25° - W）によって占められている。この二本の畦畔は直行せず、ほぼ68度で交わっている。畦畔④は幅18~27cm、長さ4.5m、畦畔⑤は幅10~30cm、長さ6.8mである。畦畔⑥にはほぼ平行して南約1.0mのところに幅10~12cm、長さ2.3mの細い畦畔⑥と、南約1.7mに幅20~31cm、長さ3.8mの畦畔⑦の2本を検出した。これらはいずれも両端が切れて、畦畔の追跡は不可能であった。これら畦畔は明灰色Hue7.5Y%を基色とし、橙色Hue7.5YR%，明褐色Hue7.5YR%，褐色Hue7.5YR%の混じった雲状斑をふくんで全体に明灰褐色を呈し、周辺の水田床面と思われる土壤より明るい色調である。

南の2本の畦畔⑥、⑦は、畦畔⑤と接近しすぎているため、同時期のものとは考えがたいが同じレベルにおいて検出されている。この区画においては先述のように畦畔を高まりとして検出していない。畦畔④と畦畔⑤によって区画される面は一枚の水田として把握できるがB 2 区においてこれら2つの畦畔の接点を検出してないので、完全な形で一枚の水田を検出し得ていない。

### D 1、2 区

D 1、D 2 区では、後述するNW - SE方向に流れる水路に平行して作られた幅16~42cm、長さ7.5mの畦畔⑬（N - 54° - W）と、それとT字形に接する畦畔⑭（N - 44° - E）、⑮（N - 55° - E）からなっている。畦畔⑬は幅10~20cm、長さ2.8m、畦畔⑭は幅20cm、長さ4.5mを測る。畦畔⑬⑭はともに端が切れているが、その方向や畦畔幅の類似性から一本に連らなってい

ものと考えることが可能である。

畦畔⑫は水路手前で屈曲してほぼ90度に向きをかえている。これもさらに続いているものと考えられるが、継続する畦畔を検出していない。

D 3 区では、畦畔⑬、⑭あるいは⑮とつながると思われる畦畔⑯ (N - 50° - E)、⑰ (N - 48° - E)、⑱ (N - 66° - E) を検出してい る。畦畔⑯からT字形にWNW-ESE方向に伸びる比較的幅の広い畦畔⑲ (N - 33° - W) がある。畦畔⑲の幅は40~41cmあり、本造跡の畦畔中で最も幅広い。畦畔⑲の南には小畦 畔⑳ (N - 20° - W) があるが判然としない。

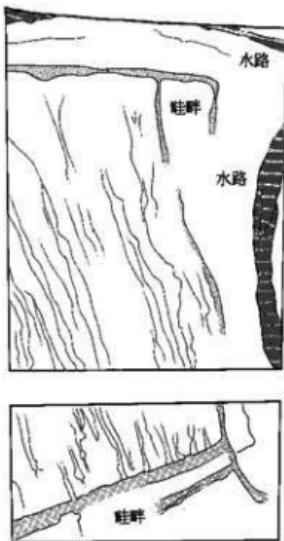
畦畔⑪⑫⑬⑭⑮で区画される範囲は一枚の水田として把握できるが、東側の畦畔部を検出していない。東側の畦畔部として想定できるD 1、D 2、D 3 区では、NE-SW方向に流れる水路と平行した形で畦畔⑬⑭⑮に対応する畦畔が見いだせるものと予想したが、検出をみていない。しかし、帯の方向は畦畔⑬⑭⑮の方向に一致し、D 3 区においては畦畔⑲を基軸として、

13~14条の不定形の帯が平行して10~20cmの幅をもって見い出された。

これらの帯は、D 1、D 2 区で検出した帶に統くものと考えられる。D 1、D 2 区の帯は10~11条みられ、D 3 区の帯よりやや幅が広く20~30cmを測る。これらの帯はこの区の畦畔同様に高まりとしては検出されていない。全て他の面と同レベルにおいて、色調の違いによってのみ確認したるものである。帯の色調は明灰色Hue7.5YR%を基色として、橙色Hue7.5YR%、褐色Hue7.5YR%の雲状斑を含んでいる。雲状斑の密度が底いので全体に白っぽい灰色となってい る。

## 水 路

C 1 区の発掘区壁ぎわから大きく二又に分岐して、新名爪川方向 (NE-SW) に緩やかに流

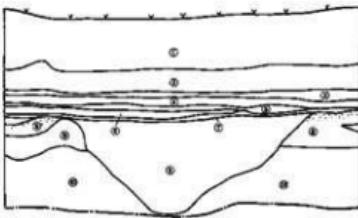


第7図 D・1・2・3区歛状遺構図  
(1/400)

れる水路を検出している。(第10図) 分岐点直前において水路は深さ約32cmを測る断面不定形となるが、北側に設けた排水溝にあらわれた断面をみると深さ48cmのU字形をしていたことがわかる。当初、この排水溝によって観察できたU字形溝がそのまま現新名爪川方向につづくものと想定していたが、先述のように急に浅くなつて2つに分岐していた。2枝に分岐した水路のうち西側に約6mのびた水路は、ほぼ直角に折れ曲って緩やかに弧を描きながらNNE-SSW方向に15mほど伸びている。水路の断面(第8・9図)は、幅の広いU字形をなしていないが、NNE-SSW方向にのびる水路は削平を大きくうけたものとみえて深さ数mmを測るのみである。

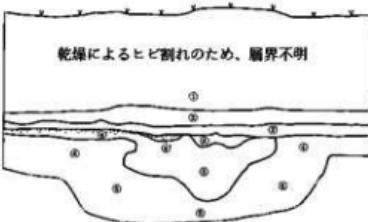
もう一本のNW-SE方向にのびる水路は、これもゆるやかな弧を描きながら約13mのびて、試掘溝にさまたげられてはいるが、おそらくゆるやかに折れ曲って、D 2区、E 3区の比較的幅の広いNNE-SSW方位の水路につづくものと考えられる。

D 1区のNW-SE方位の13m水路の断面は途中段についているが、角のはっきりした箱型に掘り込まれている。NNE-SSW方位の水路は平均60cmの幅があるが埋土色に微妙な違いがあり、水路幅を少しづつ変えながら流れていったことを示している。断面は、これも幅の広いU字形をなしているが、D 2区では深さ6cm、E 3区端では15cmを測るがこれも上面削平されたものと考えられる。



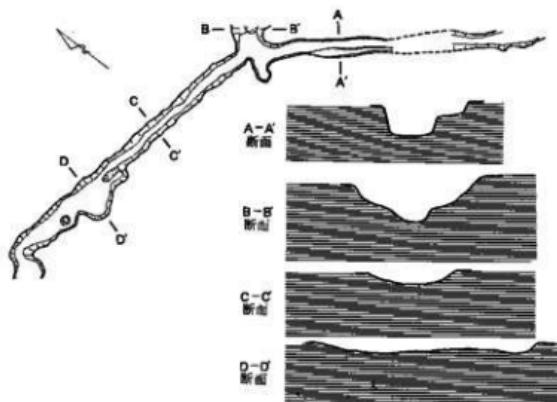
① 黄灰色土	Hue 25 Y 6 / 1
② 増灰黄色土 (灰色砾石を含む)	Hue 25 Y 5 / 2
③ 増灰黄色土 (灰色砾石を多く含む)	Hue 25 Y 5 / 2
④ 青灰色土	Hue 5 BG 6 / 1
⑤ オリーブ灰色土	Hue 10 YR 5 / 2
⑥ 青灰色土	Hue 5 BG 6 / 1
⑦ 明黄褐色土	Hue 10 YR 7 / 6
⑧ 灰黄褐色土	Hue 10 YR 5 / 2
⑨ 灰黄褐色土 + マンガン斑 (極赤褐色)	Hue 10 YR + Hue 5 YR 2 / 3
⑩ 紺色土	Hue 10 YR 4 / 4
⑪ 増紺色土	Hue 10 YR 3 / 4

第8図 水路断面図 (東西排水溝北壁面)  
(1/30)



① 増灰黄色土	Hue 25 Y 5 / 2 (灰色砾石を含む)
② 青灰色土	Hue 5 BG 6 / 1
③ 明黄褐色土	Hue 10 YR 7 / 6
④ 灰黄褐色土	Hue 10 YR 5 / 2
⑤ 灰黄褐色土 + マンガン斑 (極赤褐色)	Hue 10 YR 5 / 2, Hue 5 YR 2 / 3
⑥ 青灰色土	Hue 5 BG 6 / 1
⑦ 増紺色土	Hue 10 YR 3 / 4

第9図 C I区 水路断面図 (南壁面)  
(1/30)



第10図 C I 区 水路分岐点平面断面 (1 / 100)

## 2. 水田造構中の遺物

現水田面から第XI層までの、水田が営まれたと考えられる各層からは、弥生式土器、土師器、陶磁器、鉄滓が出土している。

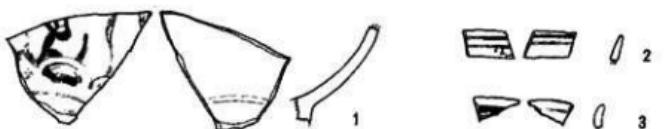
水田址ということから、出土量は僅少であり多くが小破片であった。また、弥生式土器、土師器は器面の風化磨耗が著しく実測、図化できたものは限られている。

### (1) X層出土遺物

#### 染付碗・小皿 (第11図 1、2、3)

1、2、3いずれもD 1区第X層上層より出土した明代16世紀の染付で1は碗、2・3は小皿である。

1は高台から腰部にかけての小片で、外面に青淡色の唐草文を描く。高台部と腰部の境付近に界線を有している。唐草文は繊細に注意深く描かれている。内面にも細い二重の界線をもつ。釉は乳白色でうすくかけられているが、透明度は低い。貫入はまったくみられず、胎土は灰白色を呈する。2・3は口縁部小片で別個体である。2は口唇部直下の内外に二重の界線をもち、外面下部の界線に接して花文の一部を見る。3は外反する口縁でこれにも内外面に界線を有する。釉、胎土とも1と同様である。



第11図 X層出土遺物実測図（縮尺1/2）

染付小杯（等11図4）

4はD 1・2区より出土した肥前系磁器の小杯の底部から体部にかけてのもので、口縁を欠く。器体外面に青灰色の蘭を描いている。豊付、高台内が露胎となるほかは、全体にうすい青灰色の釉がかかる。高台外面に一部釉だれを観察する。1630年代から1650年代にかけての製品である。

二彩唐津皿（第11図 5・6）

5・6はC 1・2区より出土した二彩の唐津皿である。

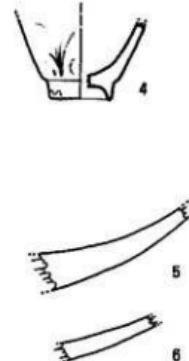
5は外面に鉄泥が横方向に薄く塗られて赤褐色を呈し、内面は銅緑釉が薄くかけられて褐色から緑褐色を呈している。6は同じく外面に鉄泥がみられるほか、内面は白化粧のあと、緑色（銅）と黄色（鉄）で描かれた絵柄の一部がみえる。5・6とも17世紀に位置づけられる。

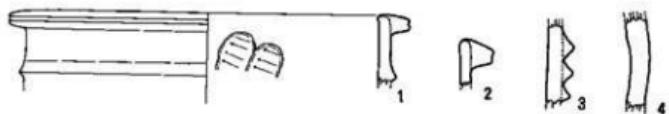
## (2) 第II層出土遺物（C 3区出土）（第12図）

第II層はH・I・J区におけるII層であり、B 1区にあてはめれば第XIII層にあたる。1・2は断面台形の貼付突帯を有する弥生式土器の口縁部である。1は突帯下1.5cmに低い突帯が一条めぐり、口径17.8cm、外面ヨコナデ調整、内面に指頭ナデ押えの調整を観察する。細砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。2は胎土に長石を多く含み、金雲母を少し含む。にぶい黄橙色をしている。3は壺形土器の突帯部分で、0.5~1.0mmの砂粒を含み淡橙色を呈する。4は備前焼きの小破片である。褐灰色を呈し、極細かい多量の長石を含んでいる。

## (3) XI層出土遺物（第13図）

C 1区の水路近くよりの出土で、常滑焼の壺破片である。表面、明褐色を呈し、深緑色の釉がたれ残る。0.1mmほどの砂粒と石英、0.1~3mmほどの長石を多く含んでいる。13世紀から14世





第12図 第II層出土遺物実測図（1/3）

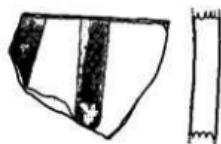
紀前半に位置づけられる。

(4) XIII層出土遺物（第14図）

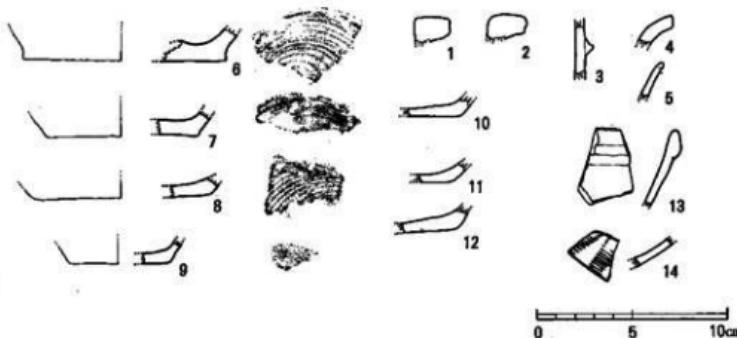
XIII層から出土した遺物は、B 1区の北面壁付近を深く下げた時に出土したものである。

弥生式土器では、壺形土器の倒L字状を呈する断面台形貼付突起部（第14図1・2）や壺形土器の口縁部（第14図4）が出上している。土師器では、杯の口縁部（第14図5）と底部（第14図6・7・8・9）があり、風化のため底部の切り離し整形不明のもの2点を除いて糸切り底のものが4点、ヘラ切り底が1点を数える。陶磁器では輸入陶磁器の青磁、白磁が出土している。第14図13は玉縁の口縁を有する白磁碗である。玉縁に稜をもち、端部は丸くおさめられる。乳白色の釉が比較的薄くかかり、内面の一部に釉のたれた跡がある。全体に貫入がみられる。乳白色の胎土でよく焼きしまっている。14世紀に位置づけられる。

第14図14は内面に櫛描文のみられる同安窯系青磁碗の体部片である。透明度の高い釉が適度にかかっている。灰色の胎土に混入粒はないが、0.1mmほどの間隙がある。その他、4点の鉄滓が出土している。合計で32.2gを量る。



第13図 XI層出土常滑片実測図（1/2）



第14図 XIII層出土遺物実測図（1/3）

表1 XIII層出土、弥生土器観察表

図/番号	器種	調整	焼成	色調	胎土	備考
14/1	壺(口縁)	風化のため不明	良好	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	1.0mmの石英 0.1mmの長石 1.0~3.0mmの砂粒	全体に風化磨耗
14/2	壺(口縁)	風化のため不明	良好	淡 橙 (5YR 8/4)	0.5mmの石英、1.0~2.0mmの砂粒 を多く含む。	全体に風化磨耗
14/3	壺(胴部)	風化のため不明	良好	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	0.1mmの石英を含む。	
14/4	壺(口縁)	ヨコナデ	良好	橙 (5YR 6/8)	1.0mmの石英、砂粒を含む。	

表2 XI層出土、土師圓観察表

図/番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整		色調	底部切り離し	備考
					内	外			
14/5	壺(口縁)	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	—	
14/6	壺(底)	—	10.6	—	ナデ	ヨコナデ	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	糸切り	
14/7	壺(底)	—	8.0	—	ナデ	ナデ	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	糸切り	あげ底である。
14/8	壺(底)	—	9.2	—	風化	ナデ (風化)	淡 黄 (2.5YR 8/3)	糸切り	
14/9	壺(底)	—	5.1	—	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	糸切り	
14/10	壺(底)	—	—	—	風化	風化	淡 黄 橙 (7.5YR 8/4)	不明	
14/11	壺(底)	—	—	—	風化	風化	淡 橙 (5YR 8/4)	ヘラ切り	
14/12	壺(底)	—	—	—	風化	風化	淡 橙 (5YR 8/4)	不明	

## 第2節 新名爪川旧河道跡からの出土遺物

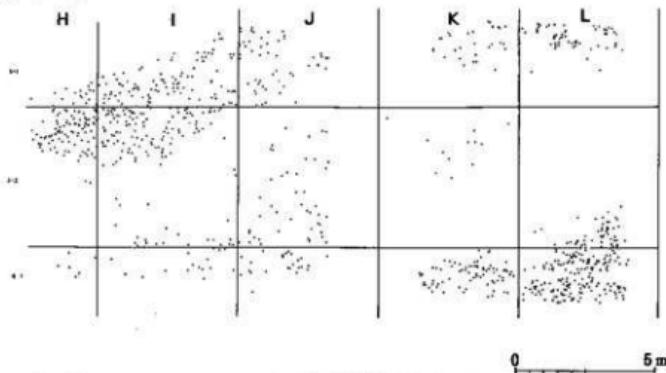
K・L区、H・I・J区の遺物は新名爪川旧河川に流れ込んだものと考えられ、出土位置は15図にみられるように流路に沿って出土している。包含層は、第XI層(H・I・J区)の下層、第XIII層(H・I・J区)のグライ層である。主要な遺物は弥生式土器が大半を占めるが、他に石器(弥生)、土師器、輸入陶磁器、中世陶器、五輪塔残欠、自然遺物が含まれる。河川に流れ込んだものであるから完形に近いものではなく、みな破片である。しかし、意外にも流れ込みの土器片にしてはハケ目などの調整が残っているものが多くあり、極めて短期間のうちに、例えば、集中豪雨のような洪水によって流れ込み埋没したのではないかと推察される。

### 1. 弥生土器

弥生土器は、壺形、甕形、鉢形、高壺形土器が出土しているが、口縁部等の形態により次のように大別される。

#### 壺形土器

- I類……頸部が内傾し、口縁部が大きく外反し内面に突帯をもつ。(1)
- II類……I類に類似するが、口縁部が湾曲し口縁端部が下方に下ったり、水平に延びる。(2  
～5)
- III類……口縁部が大きく外反し、口縁端部に沈線をもつ。(6～8)
- IV類……口縁部が外反し口縁下端が強調され、断面三角形状を呈する。(9～12)
- a……粘土のつまみ出しによるもの(9・10)
- b……粘土貼付けによるもの(11・12)
- V類……口縁端部外面に断面長方形あるいは台形状の突帯をもち、突帯上面は下方に下がる。  
(13～15) 15は、口縁頂部に刻目、突帯上面に連点文が施されている。
- VI類……頸部が内湾ぎみに立上がり、口縁端部外面に断面台形状の突帯をもち、突帯端部に沈  
線をもつ。(16～19) 19は肩部に2条の沈線をもつ。
- VII類……無頸の壺で肩部に波状の櫛描文をもつ。(22)
- VIII類……口縁端部が幅広でその部分に櫛描波状文をもつ。(23・27)
- IX類……複合口縁の壺で立上がり部に櫛描波状文をもつ。(24・25) 26はIX類の頸部と思わ  
れる。
- その他、口縁部は、口縁端部に刻目をもつもの、短く外反するもの、直立ぎみに短く立上がる  
もの、頸部に刻目突帯をもつものなどが出土している。肩部あるいは胴部に沈線文、櫛描波状文、  
連点文、重弧文などが施されたものや、断面長方形あるいは台形状の突帯をもつ壺の肩部や胴部  
片も出土している。



第15図 H・I・J・K・L区遺物出土状況(1/200)

### 變形上器

I 類……如意形口縁で口縁外端に刻みをもつ。(189・190)

II 類……口縁下に突帯をもつ所謂下城式系の土器。口縁部の形態及び突帯の位置により細分される。

a ……口縁部がわずかに外反し頸部に1条の突帯をもつ。口縁外端部及び突帯上に刻目をもつものがある。(87~91・98)

b ……口縁端部がわずかに凹み、その外端部が張り出す。口縁直下に一条の突帯をもち、口縁外端部及び突帯上に刻目が施されるものが多い。口縁部は内湾するものやわずかに外反するものがある。(92~97、99~104)

c ……直立する口縁部で口縁端部より1~1.5cm程の位置に1条の突帯をもつ。口縁外端及び突帯上あるいは突帯上のみに刻目が施されるものやないものもある。(106~119)

d ……Cに類似するが、突帯の位置が2~3cm程のもの。(120~128)

e ……bに類似するが、突帯が2条のもの。(129、131)

f ……直口する口縁で2条の突帯をもつ。(130、132)

g ……口縁外端部が張り出し、その部分に刻目をもつ。(133~135) 47は内端にも刻目をもつ。

III 類……口縁端部外面に突帯をもち、逆L字状を口縁をなす。

a ……口縁端部外面及び口縁直下に突帯をもち、口縁端部の突帯に刻みが施される。(139~141) 141は口縁部内側に張り出しがあり、突帯上の刻みは荒い。

b ……口縁部下位に沈線をもつ。(142~145)

c ……口縁端部外面に断面三角形状の突帯もち、その下位に1ないし2条の突帯をもつ。(146~156) 147~152のように突帯下部に接合線や指頭痕を残すものや153~155のように接合線を丁寧に消すものがある。前者の場合、口縁端部の突帯に刻目が施されるものが多い。

d ……C類に類似するが、突帯は水平に延びる。口縁下位に突帯は見られない。(157~159)

e ……口縁端部外面の突帯が大きいもの。(160~163)

IV 類……口縁端部外面の突帯の端部に面をもち突帯断面形が長方形ないし台形状を呈する。口縁下位に突帯があるものとないものがあり、もつの場合その数は2~3条である。(164~165、167、168)

V 類……口縁端部外面に台形ないし長方形の突帯をもち、その上面は水平あるいは外傾し、

突帯端部に一条の沈線をもつ。突帯上面に複数の沈線、突帯をもつものもある。突帯下位にも2条以上の突帯をもつ。V類には突帯が太くなり口径が35cm以上と推定されるものもある。(166、169~185)

VI類……口縁端部外面の突帯が若干凹みをもちらながら上方へ延びるもの。(186)

VII類……口縁端部外面の突帯が内傾し、突帯下面が緩やかなカーブをもつ。突帯は、粘土を口縁端部に乗せて接合されている。(187)

VIII類……口縁部が内面に稜をもってくの字形に外反する大型の甕。(188)

IX類……口縁部内外へ張り出しをもち、T字状を呈する。(191)

X類……口縁部が強く折れ、口縁上面が水平あるいは内傾するもの。口縁端部は丸く仕上げられたものが多い。(192~195)

XI類……口縁部が強く折れ、口縁端部が跳ね上げ状をなす。口縁下位に断面三角形の突帯をもつ。(197)

XII類……くの字形に外反する口縁部で端部が若干厚くなり面をもつ。内面に稜をもつもの(a)ともないもの(b)がある。(198~202)

XIII類……口縁部がくの字形に外反し、その下位に刻目突帯をもつ。内面に明瞭な稜はもない。(203~204)

XIV類……緩やかに外反する口縁で端部に面をもつ。肩部がわずかに張る。(209~210)

XV類……タキ成形された甕、口縁端部は先細りとなっている。(212~218)

その他、甕の口縁にはくの字形をなし外上方へ延びるもの、口縁端部がT字状をなすもののくの字形口縁、緩やかに外反する口縁部等がある。

#### 鉢形土器

I類……外反する口縁部で端部に刻目が施される。(137~136) 137は刻目突帯をめぐらす。

II類……鋤先状口縁をもつ。(223)

III類……ラッパ状に拡がる脚台をもつ。(219)

IV類……脚部に長方形ないし三角形状の透孔をもち、脚と体部との境に断面三角形の突帯をもつ。(220~222)

#### 高壺形土器

I類……壺部下半が内湾し、口縁部が外反する。口縁端部外面に下方へ下がる突帯をもつ。

(227)

II類……脚部がラッパ状で脚部と壺部との境に刻目突帯をもつ。壺部底に粘土が充填される。また、脚部にも粘土が充填され外見上は中実の脚部となっている。(224)

III類……脚裾部に細沈線や端部に突帯をもつ。(225~226)

IV類……円筒状の脚部(228~229)

#### 底部

平底、上げ底、脚台、充実した脚台状底部、タクキの見られる底部が出土している。230～253は壺、224～259は壺の底部である。保木下遺跡では充実した脚台状の底部等が多く出土したが、脚裾部が張るものや、脚裾部が内傾しその部分に沈線がめぐるものがある。

県内の弥生土器の研究は、石川恒太郎氏、鈴木重治氏、田中茂氏等の研究があるが、資料的に恵まれなかったこと等により全体的に低迷していた。<sup>(1)</sup>昭和50年代中ばより県内でも発掘調査が増加し、それに伴い資料も増加してきたことにより、近年、石川悦雄氏が宮崎平野における弥生土器編年試案が提示された。その後、長津宗重氏が宮崎学園都市遺跡群内の堂地東遺跡出土土器を基に弥生中期後半から後期後葉<sup>(2)</sup>、谷口武範氏が同浦田遺跡出土土器を基に弥生後期後半から終末期ないし庄内式併行期までを細分している。<sup>(3)</sup>宮崎学園都市遺跡群内では、中葉から終末期にかけて土器が熊野原遺跡B地区等で多く出土しているので、今後、この時期の研究は進展するものと期待される。中期にあっては、その初頭及び前葉のものが高鍋町持田中尾遺跡、新富町鎧遺跡等で出土しているが、中葉から後葉にかけては不明で石川氏もⅢ期として空白期をおいている。

保木下遺跡では、新名爪川旧河道で流れ込みの状態ではあったが、前期様相をもつものから後期ものが出土している。その中で多く出土したのは口縁端部外面に突帯をもち逆L字状の口縁を呈するもので、突帯の形態より壺Ⅲ類～VII類として分類を行った。Ⅲ類は突帯が断面三角形状を、IV類は突帯が長くなり断面長方形ないし台形状を呈する。V類は断面が台形状を呈し、大半は突帯端部に沈線をもつ。VI類は突帯が外上方に延び上面が内傾し、VII類はその大型である。Ⅲ類壺は、北部九州で前期末～中期前半の遺跡で出土する亀ノ甲タイプに類似するものである。逆L字状口縁の壺は、その形態の変遷をⅢ類→IV類→V→VI・VII類と追うことができ、VII類に続くものと考えられる。Ⅲ類壺は、突帯の形状、突帯直下の突帯の有無等によりa～eに細分されたが、突帯下面に接合線を残さないものがIV類、V類へと続くものと考えるなら、接合線の有無により新旧細分される可能性がある。Ⅲ類からVI・VII類への変遷の中で口縁端部突帯下位の突帯をもつ場合は、Ⅲ類では2条以内、IV類、V類では2条以上と多条化している。口径については、Ⅲ類が35cm以内が大半で、V類になると35cm以内のものと35cm以上のものに細分でき大型化を見ることができる。

亀ノ甲タイプの壺の出土例は、県内では今日の保木下遺跡の他、高崎町今村遺跡、鎧遺跡持田中尾遺跡で出土している。4遺跡ではいずれも下城式壺を共伴し、この共伴関係について石川氏は、亀ノ甲タイプの流入過程を知るうえで重要なポイントになることを指摘している。保木下遺跡出土の壺III-b類に分類した土器のうち、第22図143は、口縁端部内側が丸くなり、突帯下位に4条の沈線が確認される。142は、沈線の位置が突帯より3cmと下ぎみであるが、瀬戸内地方の前期末～中期初頭の逆L字状口縁の壺に類似している。また、壺の肩部あるいは胴部に、瀬戸内や東九州の中期初頭の備前波状文に類似するものが施文された土器片が出土していることから、亀ノ甲タイプは東からの流入である可能性が高い。

下城式系壺は、県内では前期末から後期初頭ないし前葉の遺跡から出土する。保木下遺跡では下城式系壺は7類に細分された。壺Ⅲ類を出土している遺跡のうち、今村遺跡ではⅡ-b類、壺2号住居跡ではⅡ-C類が出土している。後期初頭ないし前葉の遺跡である新富町新田原遺跡、都城市祝吉遺跡13号住居跡等ではⅡ-d類が出土しており、下城式系壺は、突帯の位置が下がるものは、新しい要素と考えられる。

保木下遺跡では壺の出土が壺に比べて少ない。VII・IX類は後期のものと思われる。壺と逆L字状口縁の壺との共伴関係については、壺遺跡2号堅穴住居跡で壺I、Ⅲ類が壺Ⅲ類と共に共伴し、壺Ⅲ・Ⅳ類を出土した溝からは壺I、Ⅱ類が出土している。VI類の突帯の形態は、壺V類の突帯に類似し、宮崎学園都市遺跡群内の前原北遺跡の堅穴住居跡から壺VI類が壺V類と共に共伴している。第Ⅲ類は、持田中尾遺跡出土土器の中に見られるが共伴関係は不明である。逆L字状口縁壺と壺との共伴関係の把握は、良好な資料が少ない現在困難で、今後に期待したい。

#### 注

1. 石川恒太郎 「宮崎県の考古学」（郷土考古学叢書4）吉川弘文館
- 鈴木 重治 「宮崎県における弥生文化の編年上の位置」『石神遺跡』（宮崎市文化財調査報告書第1集）宮崎市教育委員会 1973
- 田中 茂 「宮崎県出土の丹塗袋状口縁壺形土器について」『研究紀要』3.宮崎県総合博物館 1975
2. 石川 悅雄 「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描(MK・II)」『宮崎考古』9号、宮崎考古学会 1984
3. 長津 宗重 「堂地東遺跡の調査」（宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集）宮崎県教育委員会 1985
4. 谷口 武範 「浦田遺跡の調査」以下注3に同じ
5. 石川氏は、宮崎大学農業学部（旧農專）茶園遺跡出土遺物の紹介（「日向考古資料I」「研究紀要」10、宮崎県総合博物館 1985）の中で、第V類を石川氏編年の第Ⅲ期においている。
6. 茂山 勤 「今村遺跡」「九州統貿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3」宮崎県教育委員会 1979
7. 面高 哲郎 「蛭遺跡」（新富町文化財調査報告書第2集）新富町教育委員会 1983
8. 北郷 泰道 「持田中尾遺跡」高鍋町教育委員会 1982
9. 注2に同じ
10. 昭和60年度、調査報告書が出される予定である。
11. 面高 哲郎 「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書第2集 都城市教育委員会 1982
12. 注7に同じ
13. 昭和60年度、調査概報が出される予定である。

表3 弥生土器観察表

遺物番号	出土位置	断面	測定		地成	色調		地土	備考	
			外 面	内 面		外 面	内 面			
16 1 443	樂子テ		風化著しく調査不明		良 好	褐色 (7.5YR 4/6)	褐色 (7.5YR 4/6)	さめ細か、0.5~2mmの砂粒を含む。		
16 2 859	#	風化著しく調査不明			良 好	褐色 (7.5YR 4/6)	褐色 (7.5YR 4/6)	さめ細か、1mmの砂粒の砂粒、石英、多孔。		
16 3 758	# ナテ	山鱗部一テ 頭、尾一テニギキ			良 好	明 黄 (7.5YR 6/8)	褐 黃 (7.5YR 5/8)	1~1.5mmの砂粒を多く含む、角質石を含む。		
16 4 735	# ナテ				良 好	灰 (10YR 7/1)	白 (10YR 5/1)	0.5~1mmの砂粒を多く含む		
16 5 H11	#	風化著しく調査不明			良 好	明 黄 (7.5YR 6/8)	褐 黃 (7.5YR 5/8)	さめ細か、0.5~3mmの砂粒を含む、石英、多孔含む。		
16 6 839	# 丁草なナテ				良 好	紅 色 (5YR 4/6)	褐 色 (5YR 4/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む、石英を含む。		
18 7 478	# ヨコナテ、ヲチ方向のハケ目	ナ テ			良 好	暗 褐 (7.5YR 7/4)	褐 色 (7.5YR 6/4)	さめ細か、細砂粒を多く含む、角質石を含む。		
16 8 521	# ヨコナテ、ヲチ方向のハケ目	ナ テ			良 好	灰 色 (10YR 6/2)	褐 色 (10YR 7/2)	さめ細か、細砂粒を多く含む、石英を含む。		
16 9 12-1	# ヨコナテ				良 好	褐 色 (5YR 5/8)	褐 色 (5YR 5/8)	1~2mmの砂粒を含む		
16 10 32	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5YR 7/6)	褐 色 (5YR 7/6)	さめ細か、0.5~2mmの砂粒、瓦を含む		
16 11 839	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5YR 6/6)	褐 色 (5YR 7/4)	さめ細か、細砂粒を多く含む、瓦を含む。		
16 12 09	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5YR 7/6)	褐 色 (5YR 7/6)	さめ細か、0.5~3mmの砂粒を多く含む		
16 13 K.L.	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (7.5YR 6/6)	褐 色 (7.5YR 6/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む		
15 14 15-1	# 山鱗部一テカヘ 頭、部一テ風化著しく調査不明	ヨコ方向のハケ裏			良 好	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (10YR 6/6)	さめ細か、1mm前後の砂粒を含む		
16 15 衣 拂	#	山鱗部一テカヘ 頭、部一テ風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (10YR 6/6)	さめ細か、細砂粒、石英を多く含む	口唇上部に、半根竹骨 ふうの剥落点付近	
16 16 7.7 1.9	#	山鱗部一テカ 頭、部一テ	ヨコ方向のハケ裏		良 好	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (10YR 6/6)	さめ細か、細砂粒、石英を多く含む		
16 17 212	# 内腹部一テ 頭、部一テカヘ	ヨコ方向のハケ裏			良 好	褐 色 (7.5YR 5/6)	褐 色 (7.5YR 5/6)	さめ細か、細砂粒の砂粒、 石英、角質石を含む		
16 18 7.67	# 山鱗部一テカ 頭、部一テ	ヨコ方向のハケ裏			良 好	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (10YR 7/6)	さめ細か、細砂粒を含む	全体にスリット痕	
16 19 5.2	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (10YR 4/6)	褐 色 (10YR 4/6)	0.5~1mmの砂粒を多く含む	全体にスリット痕	
17 20 4.75	# 山鱗部一ヨコナ テ頭、部一ナテ	ヨコナテ			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (7.5YR 6/6)	1mm前後の砂粒を多く含む 石英、角質石を含む		
17 21 5.53	# 山鱗部一ヨコナ テ頭、部一ナテ	風化著しく調査不明			中 等	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (7.5YR 6/6)	さめ細か、1~3mmの砂粒 石英を含む		
17 22 3.77	# 山鱗部一ナ テ頭、部一ナテ	ナ テ			良 好	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (10YR 8/2)	1mmの砂粒を含む		
17 23 K.L.	# ナ テ	ハケの後、ヨコナテ			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (10YR 6/6)	0.2~2mmの砂粒、 石英を含む	口唇に、風致文	
17 24 日0X1	# ヨコナテ	ヨコナテ			良 好	褐 色 (7.5YR 5/6)	褐 色 (7.5YR 5/6)	さめ細か、1mmの砂粒を含む		
17 25 ?	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.2~2mmの砂粒を多 く含む、石英を含む		
17 26 H0X1	# オチ方向のハケ目	ヨコ方向のハケ裏、ナ テ			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.2~2.5mmの砂粒を多 く含む、石英を含む	充満の向島に毛虫が残 る跡	
17 27 衣 拂	# ナ テ	風化著しく調査不明			不 良	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、1mmの砂粒を多く含む	口唇に、風致文	
17 28 1.44	# 山鱗部一ヨコナ テ頭、部一ヨコナ テ頭、部一ヨコナ テ	ナ テ			良 好	褐 色 (10YR 6/6)	褐 色 (10YR 6/6)	さめ細か、0.5~3mmの砂粒を含む	外一ノ歌ヌス行春 便、風致文	
17 29 K.L.	# ナ テ	風化が善しい			不 良	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、1mmの砂粒を多く含む	便、風致文	
17 30 河 岸	# ハケの後ヨコナテ	ヨコナテ			良 好	褐 色 (5.5YR 6/6)	褐 色 (5.5YR 6/6)	さめ細か、0.5~2mmの砂粒を多 く含む、石英を含む		
17 31 H.K.	# ヨコナテ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、1mmの砂粒を含む	便、風致文	
17 32 K.4-1	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 6/6)	褐 色 (5.5YR 6/6)	さめ細か、0.5~3mmの砂粒を含 む		
17 33 1.3-1	#	風化著しく調査不明			ナ テ	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.2~1mmの砂粒を多く 含む、石英を含む		
18 34 8.77	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む		
18 35 8.35	#	風化著しく調査不明			ナ テ	良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.5~3mmの砂粒を含 む	
18 36 1.5-1	# ていねいなヘラミカ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む 角質石を含む		
18 37 5.99	#	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 6/6)	褐 色 (7.5YR 6/6)	さめ細か、0.5~2mmの砂粒を多 く含む、石英、角質石を含む		
18 38 K.L.	# ヘラミカガ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 6/6)	褐 色 (5.5YR 6/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む		
18 39 L.4-1	# ナ テ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.2~1.5mmの砂粒を多 く含む、角質石、石英を含む		
18 40 L.4-1	# オチ方向のハケ目	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む		
18 41 L.4-1	#	風化著しく調査不明			ナ テ	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.5~4mmの砂粒をわざ りに含む		
18 42 L.4-1	# ナ テ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、細砂粒を多く含む		
18 43 L.4-1	# ナ テ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 6/6)	褐 色 (5.5YR 6/6)	さめ細か、角質石を含む		
18 44 T.04	# ナ テ	風化著しく調査不明			良 好	褐 色 (5.5YR 7/6)	褐 色 (5.5YR 7/6)	さめ細か、0.1~2mmの砂粒を多く 含む、石英、角質石を含む		

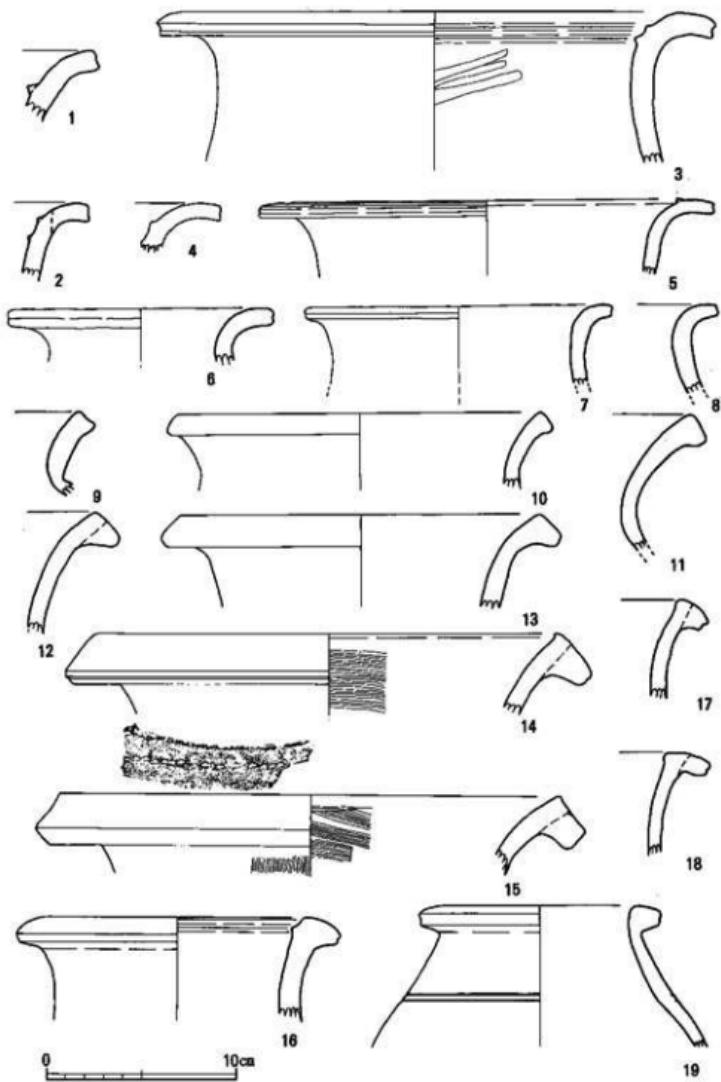
固有 番号	通号 番号	当社記載 番号	基盤	要		後成	色調		地 土	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
16	45	8.1.1	■	ヘラミガキ	風化著しく調査不明	良 好	に い よ い 黄 (30YR 6/4)	透 実 地 (30YR 6/3)	きの細か、0.5~2mmの砂粒、 底石。表面を含む	
18	46	9.0.6 2.9.4	×	ナ テ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	きの細か、1mmの砂粒、石英、 角閃石を含む		
16	47	3.3~5 3.3~2	×	タテ方向のハケ目	風化著しく調査不明	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	きの細か、1mmの砂粒を含む		
18	48	1.1~1	+	ナ テ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/4)	きの細か、0.5~2mmの砂粒を含む 底石、石英、角閃石を含む		
19	49	L.4~1	+	ヘラミガキ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	きの細か、0.1~2mmの砂粒、 角閃石を含む		
19	50	L.3~1	+	ナ テ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	きの細か、0.3~2mmの砂粒を含む 底石、石英を含む		
19	51	1.4~1	+	ヘラナテ	風化著しく調査不明	良 好	透 実 地 (30YR 6/4)	0.5~2mmの砂粒を含む		
19	52	L.3~2	+	ナ テ	ナ テ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	53	K.3~1	+	ヨコナテ	ナ テ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	54	K.4~1	+	ナ テ	ナ テ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	55	I.3~1	+	ナ テ	ナ テ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	56	I.3~2	+	風化著しく調査不明	風化著しく調査不明	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	きの細か、砂粒を多く含む		
19	57	K.3~1	+	ヨコナテ	ハケ目	品 許	に い よ い 青 (30YR 7/2)	透 実 地 (30YR 7/1)	1mmの砂粒を角閃石を含む	
19	58	I.4~1	+	ナ テ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/2)	透 実 地 (30YR 7/1)	1mmの砂粒を含む	
19	59	I.2~1	+	ていねいなナテ	ナ テ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	60	I.3~2	+	ナ テ	ナ テ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	61	I.2~1	+	ヨコナテ	ヘラミガキ	良 好	透 実 地 (30YR 7/2)	きの細か、砂粒は殆ど含まない		
19	62	H.3~1	+	タテ方向のハケ目	ハケ目	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	きの細か、1~3mmの砂粒を含む		
19	63	I.2~1	+	ヨコ方向のヘラミガキ	ヨコ方向のヘラミガキ	良 好	明 真 地 (30YR 6/3)	きの細か、1mmの砂粒をわずかに含む		
19	64	I.0.1.6	+	ヨコナテ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	1~3mmの砂粒を含む		
19	65	K.3~1	+	ハケ目	ハケ目	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	66	K.2~1	+	ヨコナテ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/2)	砂粒を含む	目録記	
19	57	I.3~2	+	ヨコナテ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/4)	1mmの砂粒を含む		
19	68	K.4~2	+	ナ テ	ハケ目	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/4)	1mmの砂粒を含む		
19	69	I.4~1	+	ナ テ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	70	K.5~0	+	ナ テ	ハケ目?	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	1mmの砂粒を含む		
19	71	2.8.4	+	ナ テ	ヨコナテ	不 良	透 実 地 (30YR 4/2)	1mmの砂粒を含む黄を多く含む		
19	72	H.3~1	+	ヘラミガキ	ヨコ方向のハケ目	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	きの細か	片鱗文	
19	73	K.1.	+	風化著しく調査不明	ヨコ方向のナテ、ミガキ	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	きの細か、砂粒を多く含む		
20	74	9.4.5	+	風化著しく調査不明	風化著しく調査不明	良 好	透 実 地 (30YR 6/4)	1mmの砂粒を含む		
20	75	5.5.0	+	ナ テ	風化著しく調査不明	良 好	に い よ い 青 (30YR 6/2)	1mmの砂粒を含む		
20	76	1.0.6.0	+	ヘラミガキ	ヘラナテ	良 好	に い よ い 青 (30YR 6/2)	1mmの砂粒を含む		
20	77	7.4.2	+	ヨコナテ	風化著しく調査不明	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	1mmの砂粒を含む		
20	78	6.5.2	+	ナ テ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 6/1)	1mmの砂粒を含む		
20	79	8.4.1	+	ヘラミガキ	ハケ(?)の模ナテ	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	0.1~1mm程度の砂粒を含む		
20	80	7.6.2	+	ヘラミガキ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/2)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	81	5.5.2	+	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	82	L.4~1	+	風化著しく調査不明	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	83	H. K	+	ヨコナテ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 4/4)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	84	7.5.5	+	ヘラミガキ	ナ テ	良 好	透 実 地 (30YR 6/2)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	85	4.5.7	+	ナ テ	ナ テ	良 好	に い よ い 青 (30YR 6/2)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	86	2.6.3	+	風化著しく調査不明	風化著しく調査不明	良 好	透 実 地 (30YR 6/3)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	87	1.3.9	+	透 雷 岩+ヨコナテ 削 削 削=ていねいなナテ	ていねいなナテ	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/3)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		
20	88	J.3~1	+	透 雷 岩-風化著しく調査不明 削 削 削=ヨコ方向のハケ目	ヨコ方向のハケ目	良 好	に い よ い 青 (30YR 7/3)	0.1~2mm程度の砂粒を含む		

回測 番号	植物 番号	出土地點	基準	測 量		地 成 色 調	地 土	備 考
				外 面	内 面			
20 89	7 3 2	葉 根-葉-ハケ日	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ年	不 良	良	黄 色	黄	開穀地。石英を含む
20 90	K L	根 根-風化層-根	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒をわずかに含む
20 91	5 3 4	根 根-風化層-根	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂礫の砂粒、角閃石を含む
20 92	1 3 1	根 根-風化層-根	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの砂粒を含み、石英を含む
20 93	2 0 0	根 根-コナデ	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒、石英を含む
20 94	8 3 3	根 根-コナデ 根-ハゲ日	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ日	ト デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの砂粒を含む
20 95	0 4	根 根-ハゲ日	山腹部-コナデ 根-根-ハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの砂粒、打光石を含む
20 96	5 5 7	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-コナデ 根-根-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	不 良	明 顯	灰 色	3~5mmの大砂粒を含む
20 97	1 0 0 6	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-コナデ 根-根-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒、石英を含む
20 98	0 8	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-コナデ 根-根-チカラ方面のハゲ日	ヨコナデ	良 好	明 顯	赤 色	石英を多く含み、角閃石を少し含む
20 99	1 3 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~1mmの砂粒を少し含む
20 100	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~2mmの大砂粒を含む
20 101	4 8 3	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~2mmの大砂粒を少し含む
20 102	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、2mmの大砂粒を含む
20 103	4 8 3	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~2mmの大砂粒を少し含む
20 104	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒を含む
20 105	8 9 4	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 106	H 2 2	根 根-ハゲ日	山腹部-コナデ 根-ハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	口器、共帶を同時に持つ
20 107	9 3	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	シガキ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒、角閃石を含む
20 108	1 8 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 109	J 3 2	根 根-ハゲ日	山腹部-コナデ 根-ハゲ日	ナ デ	ヨコナデ	良 好	明 顯	さめ細か、無砂粒を多く含む
20 110	4 7 7	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~2mmの大砂粒を含む
20 111	2 2 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 112	8 5 9	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒、角閃石を含む
20 113	H 3 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.1~1mmの大砂粒を含む
20 114	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 115	K 3 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒、角閃石を多く含む
20 116	1 7 6	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、石英を含む
20 117	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を多く含む
20 118	4 2 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	明 顯	赤 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒を含む
20 119	8 1 0	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ヨコナデ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒を少し含む
20 120	L 3 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、角閃石を含む
20 121	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒、角閃石を含む
20 122	H K	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 123	K L	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 124	3 4 6	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒、角閃石を含む
20 125	L 4 1	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を含む
20 126	3 0	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒、打光石を含む
20 127	8 4 7	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、無砂粒を多く含み、特に大粒を含む、無砂粒を少し含む
20 128	8 8	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.2~2mmの大砂粒を多く含み、石英を含む
20 129	I 3 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒を多く含む
20 130	I 3 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒を多く含む
20 131	L 3 2	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	良 好	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~2mmの大砂粒を多く含む
20 132	B 4 8	根 根-チカラ方面のハゲ日	山腹部-チカラ方面のハゲ日	ナ デ	中 良	灰 色	灰 色	さめ細か、0.5~3mmの大砂粒を多く含む

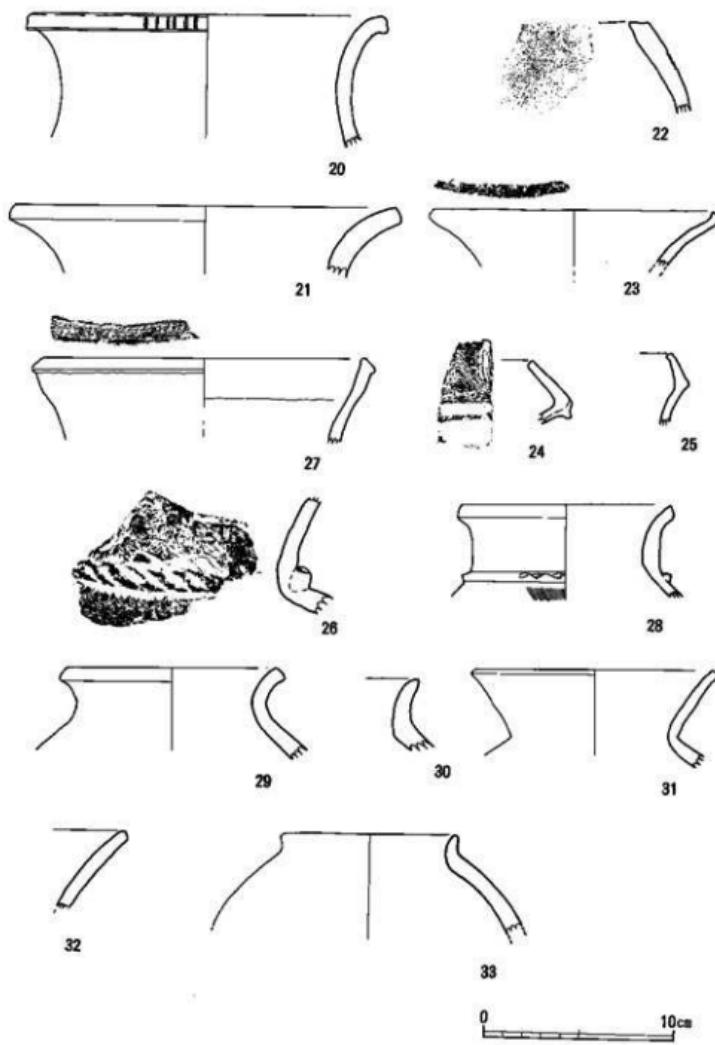
固有 名前 番号	固有 名前 番号	出土位置	器種	両 面		内 面		外 成		色 面		和 土		備 考	
				外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
22_132	II 3-2	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	十 デ	良 好	黒	に ぶ い 黒	(SYR4/6)	良 好	黒	きめ細かい、 0.2~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_134	II 3-3	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	内輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.5~1mmの砂粒。	白	良 好	黒	
22_135	L 4-1	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	十 デ	良 好	黒	に ぶ い 黒	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_136	L 4-3	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	風化著しく調査不明	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_137	K_L	脚-ヨコナデ	十 デ	良 好	黒	に ぶ い 黒	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~2mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_138	6 2 6		ナ テ	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~2mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_139	1 3 5	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.5~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_140	4 1 2	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.5~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_141	1 6 0	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	内輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.5~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	
22_142	5 9 7	口輪部-ナ テ	風化著しく調査不明	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	外一スズ行	
22_143	4 9	口輪部-ナ テ	脚-ヨコナデ	風化著しく調査不明	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	
22_144	1 0 1 4	口輪部-ナ テ	脚-ヨコナデ	ハケ目	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	
22_145	L 3-2	ヘラナ テ	ナ テ	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_146	9 0 2	口輪部-ナ テ	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	中 中良	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	
22_147	6 9 1	口輪部-ナ テ	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	黒	に ぶ い 黒	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	
22_148	3 2 6	風化著しく調査不明	ナ テ	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_149	3 3 7	風化著しく調査不明	風化著しく調査不明	ナ テ	良 好	黒	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_150	H_1	口輪部-ナ テ	脚-ヨコナデ	風化著しく調査不明	中 中良	に ぶ い 黒	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_151	J 4-1	ヨコナデ	ナ テ	中 中良	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒。	白	良 好	黒		
22_152	4 6 6	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ヨコナデ	ハケ目	良 好	黒	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_153	4 2 0	山根部-ヨコナデ	ナ テ	中 中良	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒	外一スズヌク付	
22_154	L 4-1	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	黒	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_155	2 5 4	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	内輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_156	5 1 3	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_157	6 5 0	風化著しく調査不明	風化著しく調査不明	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_158	6 7 2 6 7 3	風化著しく調査不明	風化著しく調査不明	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_159	4 4 1	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を含む	白	良 好	黒		
22_160	E 4-1	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒。角開孔を含む	白	良 好	黒		
22_161	5 0 0	ヨコナデ	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_162	2 5 7	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	脚内向ハケ目	良 好	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	黒	細かい、0.1~1mm次の砂粒と少量の内向岩を含む	白	良 好	黒		
22_163	1 0 0 0	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒。	白	良 好	黒		
22_164	2 0 5	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒。	白	良 好	黒		
22_165	4 4 7	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_166	6 5 7	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_167	6 0 8	口輪部-ナ テ	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_168	3 6 6	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_169	6 7 1	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_170	8 6 3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_171	2 3 8	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_172	L 4-1	ナ テ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_173	5 0 5	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_174	1 3 3	ヨコナデ	風化著しく調査不明	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_175	7 7 3	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ハケ目	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒		
22_176	8 2 0	口輪部-ヨコナデ 脚-ヨコナデ	ヨコナデ	ナ テ	良 好	良 好	(SYR4/6)	良 好	良 好	細かい、0.1~1mm次の砂粒を多く含む。	白	良 好	黒	外一スズ付	

因黄 番号	植物 番号	出土位置	種類	調 査 表				地 成 色 調	土	備 考	
				外 部	内 部	外 部	内 部				
23	277	K 3-1	葉	ヨコナデ	ナ デ	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	小の細か、相鉛粒を含む の鉛粒。石英を含む	外ースス付帯
22	178	6 1 3	x	ヨコナデ	ナ デ	不 良	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	同前。0.5~1mmの大鉛粒を多く 含む。石英を含む	
23	179	1 0 0 7	x	口輪型-ナデ 根-ヨコナデ	ナ デ	良 好	(6 YR 7/6)	褐 黄	褐色	同前。1~2mmの大鉛粒。石英。 金管物を多く含む	
22	180	6 3 3	x	ヨコナデ	ナ デ	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。0.1~2mmの大鉛粒を多 く含む。金管物を多く含む	
23	181	6 2 0	x	口輪型-ヨコナデ 根-ヨコナデ	ヨコナデ	不 良	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	1~2mmの大鉛粒。石英を多く含み。 閃開石を含む	
23	182	9 7 8	x	ヨコナデ	ナ デ	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	同前。0.5~2mmの大鉛粒。 閃開石を含む	
22	183	H K	x	ナデ?	ナ デ	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.1~2mmの大鉛粒。 閃開石を含む	
24	184	3 8 7	x	ヨコナデ	ナ デ	良 好	(3.5 YR 6/6)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を含む の鉛粒。	外ースス付帯
24	185	6 5 8	x	口輪型-ヨコナデ 根-ヨコナデ	ハケの葉ナデ	良 好	(2.5 YR 6/4)	褐 黄	褐色	さの細か。鉛粒を多く含む	
24	186	I 3-1	x	口輪型-ヨコナデ 根-ヨコナデ	ナ デ	良 好	(10 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む の鉛粒。無鉛粒を含む	
24	187	2 5 8	x	氯化著しく調節不明	氯化著しく調節不明	良 好	(10 YR 6/2)	褐 黄	褐色	0.5~2mmの大鉛粒を多く含む	
24	188	3 2	x	氯化著しく調節不明	ナデ。ハケ目	不 良	(2.5 YR 6/6)	褐 黄	褐色	さの細か。1~2mmの大鉛粒を多く含む の鉛粒。閃開石を含む	
24	189	L 4-1	x	ナ デ	ナ デ	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。1~2mmの大鉛粒を含む	
24	190	H 3-1	x	ハケ目	ミガキ	良 好	(10 YR 6/5)	褐 黄	褐色	1~2mmの大鉛粒を含む。 閃開石を含む	
24	191	2 0 0	x	ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む	
24	192	8 6 2	x	氯化著しく調節不明	氯化著しく調節不明	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	0.5~2mmの大鉛粒を多く含む	
24	193	5 8 7	x	氯化著しく調節不明	氯化著しく調節不明	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む の鉛粒。無鉛粒を含む	
24	194	J 2-1	x	氯化著しく調節不明	氯化著しく調節不明	良 好	(10 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を少し含む の鉛粒。	
24	195	H 3-2	x	氯化著しく調節不明	氯化著しく調節不明	良 好	(2.5 YR 6/1)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む の鉛粒。閃開石を含む	
24	196	H K	x	ヨコナデ ナ デ	ナ デ	良 好	(10 YR 6/6)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を含む	
24	197	9 0 3	x	口輪型-ヨコナデ 根-ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	(10 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒を多 く含む	
24	198	2 9 3	x	ヨコナデ	ナ デ	良 好	(10 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む の鉛粒。	外ースス付帯
24	199	3 2 1	x	ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	(10 YR 6/4)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒を多 く含む	
24	200	6 1 7	x	ナ デ	ナ デ	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。0.2~2mmの大鉛粒を多 く含む	
24	201	L 4-1	x	口輪型-氯化 根-ハケ目	氯化著しく調節不明	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.2mmの大鉛粒を少し含 む	
24	202	2 0 4	x	ヨコナデ-ナーナ 制-ハケ目	ヨコナデ	良 好	(2.5 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒。 石英を含む	外一一部スス付帯
24	203	HOKI	x	山根-ヨコナデ 制-ハケ目	でいねいなヨコナデ ヨコナデのハケ目	良 好	(5 YR 6/4)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒をほとんど 含まない。	
24	204	1 4 1	x	ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	(10 YR 6/3)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む の鉛粒。	
24	205	1 4	x	口輪型-ナデ 根-ハケ目	ヨコナデ ハケ目	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を含む	外一一部スス付帯
24	206	8 2 1	x	口輪型-ヨコナデ 根-ハケ目?	ヨコナデ	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.2~2mmの大鉛粒。 石英を多く含む	外一一部スス付帯
24	207	6 8 7	x	口輪型-ナーナ 制-ナーナ?	ヨコナデ	良 好	(10 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む	外一一部スス付帯
24	208	1 3 - 2 2 2 7	x	氯化著しく調節不明	氯化著しく調節不明	良 好	(5 YR 6/4)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む	
24	209	7 5 9	x	ヨコナデ	ヨコナデ	良 好	(10 YR 6/4)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒を含 む	
24	210	7 7 5	x	ナ デ	ナ デ	良 好	(10 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。相鉛粒を多く含む の鉛粒。	一部又付帯
24	211	L 3 2	x	許同のハケ目 一緒にナタリが残る	氯化著しく調節不明	不 良	(2.5 YR 6/5)	褐 黄	褐色	さの細か。砂粒を少し含む	
24	212	K 4 - 1	x	タキソ、ハナナデ	氯化著しく調節不明	良 好	(2.5 YR 6/6)	褐 黄	褐色	さの細か。0.2~2mmの大鉛粒。 石英を多く含む	
24	213	6 1 8	x	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ハケ目	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒。 石英を含む	
25	214	S 9 7	x	タキソ	新同のハケ目	良 好	(2.5 YR 6/4)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~3mmの大鉛粒を含 む	
25	215	1 4 1	x	タキソ	ナ デ、ハケ目	良 好	(10 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒。 石英を含む	
25	216	H K	x	タキソ	ヨコナデ、ハケ目	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~3mmの大鉛粒を含む	
25	217	7 3 9	x	タキソ	ハケ目	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。0.5~2mmの大鉛粒を含む	
25	218	L 4 - 1	x	タキソ	氯化著しく調節不明	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	0.5~2mmの大鉛粒を含む	
25	219	7 3 5	x	新同-ハケ目、根 葉-ハナナデ	新同-ハナナデ 根-ハナナデ	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	0.5~1mmの大鉛粒を含む	
25	220	7 9 8	x	ヨコナデ-ハナ 根-ハナナデ	ヨコナデ	良 好	(2.5 YR 6/2)	褐 黄	褐色	さの細か。石英、辰石、閃開石、 相鉛粒を含む	

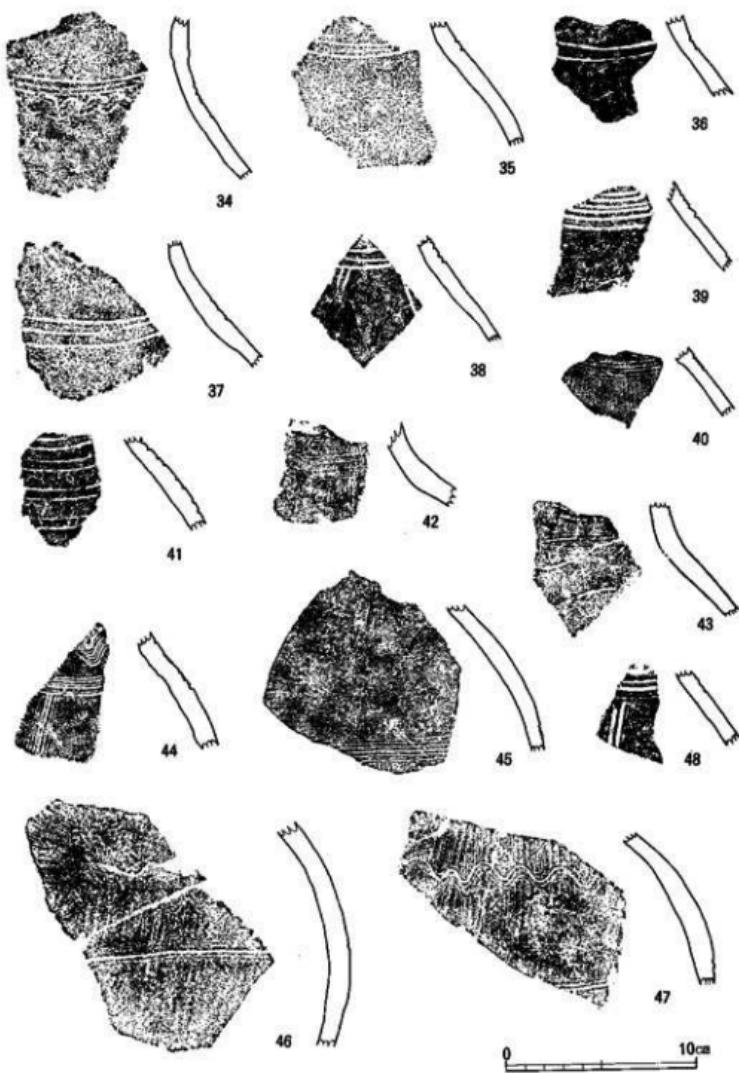
回収番号	遺物番号	出土位置	種類	測定		地成	色調		地土	備考
				外表面	内表面		外表面	内表面		
24	221	H-1-1	断片	口縁部-ココナデ 脚-直角化し筒状不規則	ココナデ	良 好	にじい 黄褐色 (5.5YR 7/3)	にじい 黄褐色 (5.5YR 7/3)	砂	細かな、網状紋、角閃石を含む
24	222	730	x	ココナデ	脚-ナナデ 脚-ココナデ	良 好	淡 水 緑	淡 灰 綠	砂	1mmの大砂粒と角閃石を含む
24	223	832	x	風化著しく調節不明	風化著しく調節不明	良 好	浅 黄 色	浅 黄 色	砂	0.1-2mmの大砂粒を含む、中に4mm
24	224	872	x	环 壁-ヘラミガキ 脚-ヘラミガキ	环 壁-ミガキ 脚-ナナデ	良 好	褐	褐	砂	細かな、網状紋が多く含み、 石英、角閃石を含む
24	225	I-3-0	x	ナ ナ デ	ナ ナ デ	良 好	(7.5YR 6/8)	(7.5YR 6/8)	砂	1mmの大砂粒を含む
24	226	H-1-J	x	ていねいなナナデ	風化著しく調節不明	良 好	暗 黄 色	暗 黄 色	砂	細かな、網状紋をわずかに含む
24	227	47	x	口縁部-ココナデ 脚-脚-ココナデ	ココナデ	良 好	淡 黄 紫	淡 黄 紫	砂	細かな、網状紋を少し含む
24	228	512	x	風化著しく調節不明	环 壁-ナナデ	良 好	にじい 黄	にじい 黄	砂	0.5-2mm人の砂粒を含む
24	229	K-L	x	环 壁-脚-直角化し筒状不規則 脚部内面-ココナデ	脚部内面-ココナデ	良 好	赤	赤	砂	0.1-1mmの大砂粒、黄泥、瓦灰、 角閃石を含む
24	230	834	x	ヘラナナデ	ナ ナ デ	良 好	赤	赤	砂	0.5-3mm人の砂粒と角閃石を含む
24	231	215	x	ナ ナ デ	ナ ナ デ	良 好	(5YR 4/6)	(5YR 4/6)	砂	0.5-3mm人の砂粒を含む
24	232	612	x	ハケ目	ナ ナ デ	良 好	暗 黄 色	暗 黄 色	砂	0.1-3mm人の砂粒を含む
24	233	763	x	風化著しく調節不明	風化著しく調節不明	不 良	明 黄 色	明 黄 色	砂	細かな、1mmの大砂粒を多く含む 石英、角閃石を含む
24	234	371	x	テテ方向のハケ目↑	風化著しく調節不明	五 面	暗 黄 色	暗 黄 色	砂	0.5-1mm人の砂粒と角閃石を含む
24	235	655	x	テテ方向のハケ目↑	ナ ナ デ	良 好	淡 黄 紫	淡 黄 紫	砂	0.5-1mm人の砂粒、黄泥、角閃石 を含む
24	236	526	x	テテ方向のハケ目↑	風化著しく調節不明	良 好	理	理	砂	細かな、網状紋を含む 1mmの大砂粒を多く含む
24	237	588	x	テテ方向のハケ目↑	風化著しく調節不明	良 好	明 黄 色	明 黄 色	砂	細かな、網状紋を含む 1mmの大砂粒を多く含む
24	238	211	x	風化著しく調節不明	風化著しく調節不明	不 良	赤	赤	砂	細かな、網状紋、石英を含む 内部-無実
24	239	527	x	テテ方向のハケ目	ナ ナ デ	良 好	にじい 黄褐色	暗 黄 色	砂	細かな、やや緑い、1mmの大砂粒を含む 石英を含む
24	240	857	x	ハケ目	ハケ目	良 好	暗	にじい 黄	砂	細かな、網状紋、石英を含む 内部-スス付帯
24	241	286	x	ナ ナ デ	ナ ナ デ	良 好	理	理	砂	0.5-2mmの大砂粒と角閃石を含む
24	242	646	x	風化著しく調節不明	不明	良 好	にじい 黄褐色	暗 黄 色	砂	細かな、網状紋、石英、金雲母 を含む
24	243	690	x	テテ方向のハケ目	ナ ナ デ	良 好	(5YR 4/6)	(5YR 4/6)	砂	細かな、1mmの大砂粒と、金雲母 を含む
24	244	H-K	x	ハケ目	風化著しく調節不明	不 良	赤	赤	砂	細かな、やや緑い、1mmの大砂粒を含む 石英を含む
24	245	541	x	風化著しく調節不明	風化著しく調節不明	良 好	にじい 黄	にじい 黄	砂	細かな、1mmの大砂粒を多く含む 石英、角閃石を含む
24	246	K-L	x	ハケ目↑	ナ ナ デ	良 好	にじい 黄	にじい 黄	砂	細かな、0.5-1mmの大砂粒、 石英、角閃石を含む
24	247	870	x	ハケ目	ハケ目	良 好	にじい 黄褐色	にじい 黄褐色	砂	細かな、網状紋を多く含む 角閃石、長石を含む
24	248	856	x	ココナデ	ハケ目	良 好	にじい 黄褐色	暗 黄 色	砂	細かな、網状紋を含む
24	249	HOKI	x	テテ方向のハケ目	ハケ目	良 好	明 黄 色	明 黄 色	砂	0.5-1mmの大砂粒、 石英を含む
24	250	914	x	テテキ	ココナデ	良 好	にじい 黄	暗 黄 色	砂	0.5-1mmの大砂粒と角閃石を含む
24	251	1041	x	テテキ	ココナデ	良 好	淡 黄 色	暗 黄 色	砂	0.5-1mmの大砂粒、角閃石を含む
24	252	937	x	テテキ	ナ ナ デ	良 好	(5YR 4/6)	(5YR 4/6)	砂	0.5-2mmの大砂粒、角閃石、 長石を含む
24	253	J-3-2	x	脚-ナナデ 脚-ココナデ	脚-ナナデ 脚-ココナデ	良 好	(5.5YR 7/4)	(5.5YR 7/4)	砂	細かな、0.5-2mmの大砂粒を含む
24	254	454	x	風化著しく調節不明	ナ ナ デ	良 好	暗	暗	砂	細かな、0.5-2mmの大砂粒 を含む
24	255	428	x	風化著しく調節不明	風化著しく調節不明	良 好	にじい 黄褐色	暗 黄 色	砂	細かな、0.5-3mmの大砂粒を含む
24	256	108	x	風化著しく調節不明	風化著しく調節不明	良 好	暗	にじい 黄	砂	細かな、0.5-4mmの大砂粒を含む 角閃石、石英を含む
24	257	480	x	ミガキ	ナ ナ デ	不 良	明 黄 色	暗 黄 色	砂	細かな、網状紋を多く含む 石英、角閃石を含む
24	258	398	x	ヘラナナデ	風化著しく調節不明	良 好	淡 黄 色	明 黄 色	砂	細かな、2mmの大砂粒を含む、 角閃石、石英を含む
24	259	723	x	ナ ナ デ	ナ ナ デ	良 好	(7.5YR 6/8)	(5.5YR 6/1)	砂	0.5-2mmの大砂粒を含む



第16図 弥生土器実測図（1）（1/3）



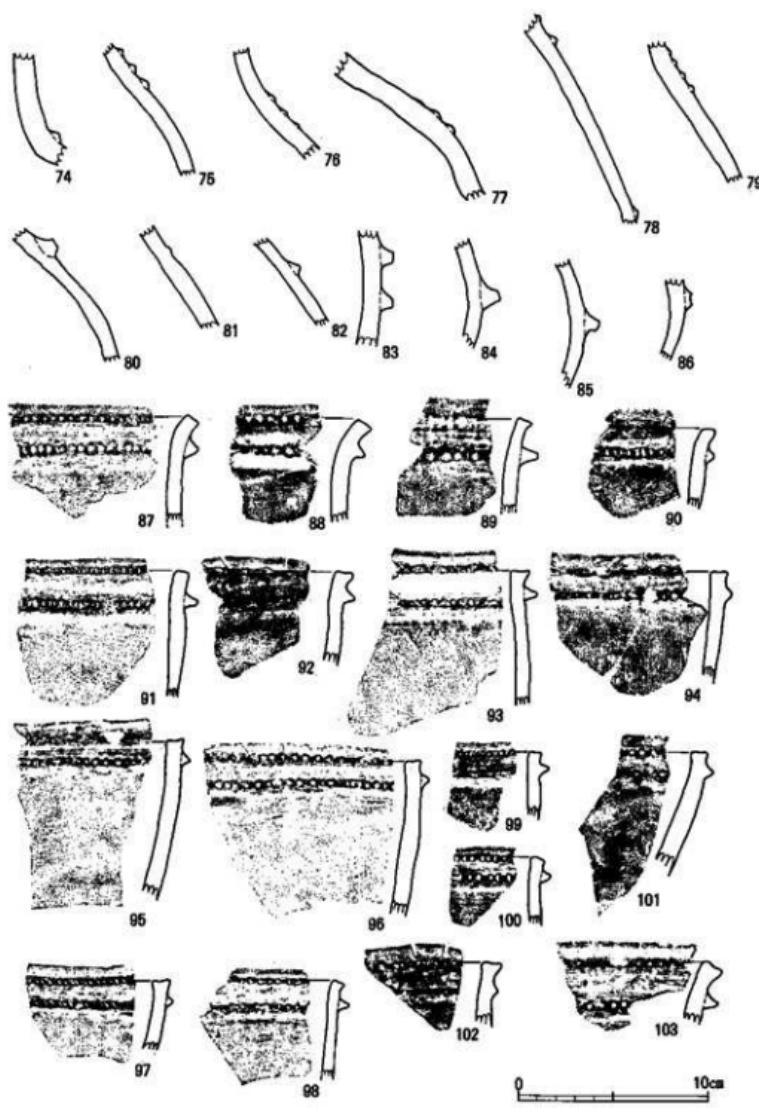
第17図 弥生土器実測図（2）（1/3）



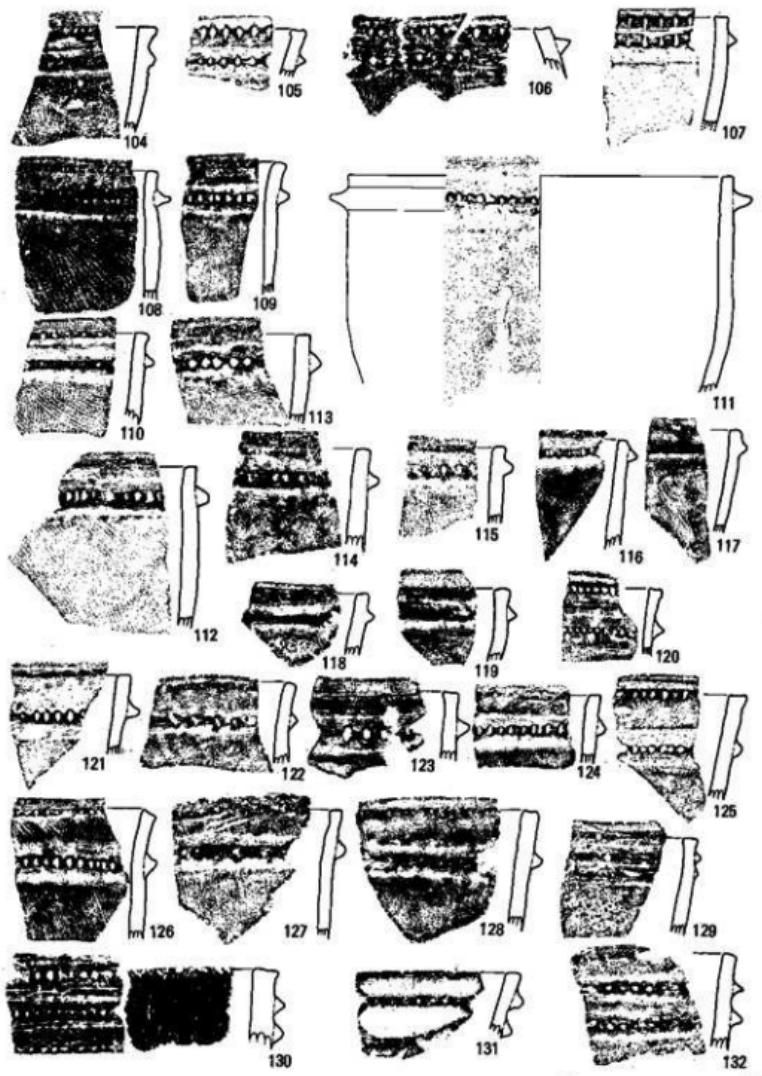
第18図 弥生土器実測図（3）（1/3）



第19図 弥生土器実測図(4) (1/3)



第20図 弥生土器実測図（5）（1/3）

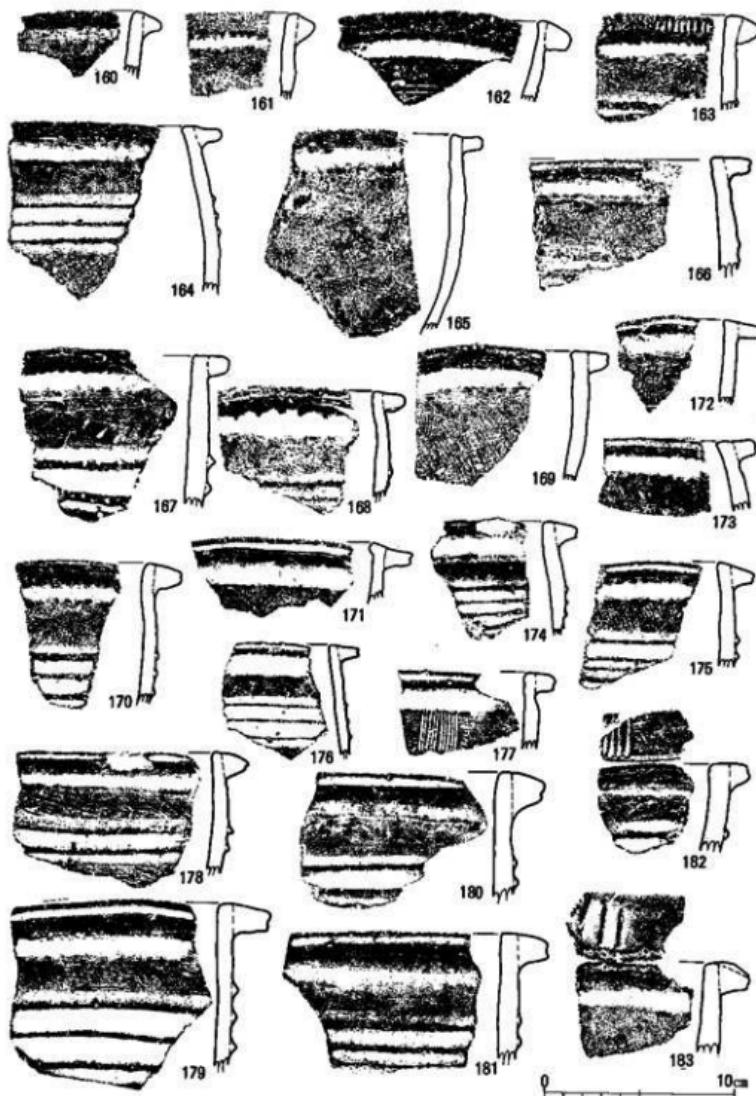


第21図 弥生土器実測図(6) (1/3)

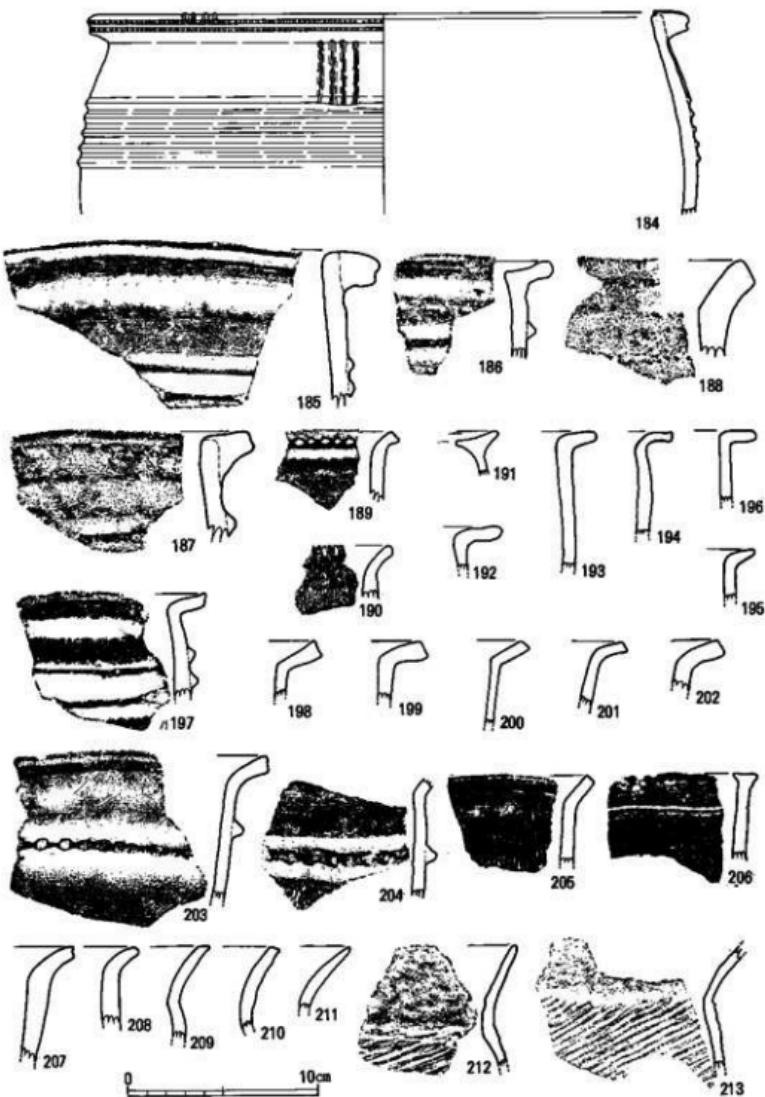
0 10cm



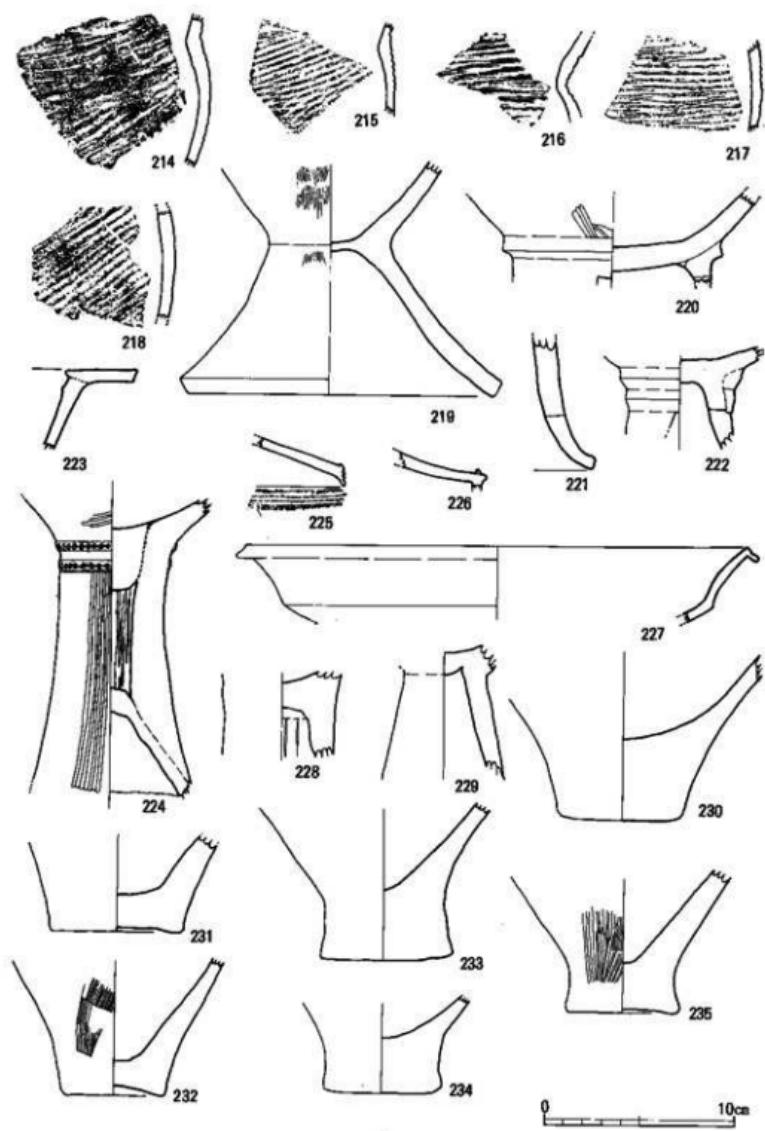
第22図 弥生土器実測図(7) (1/3)



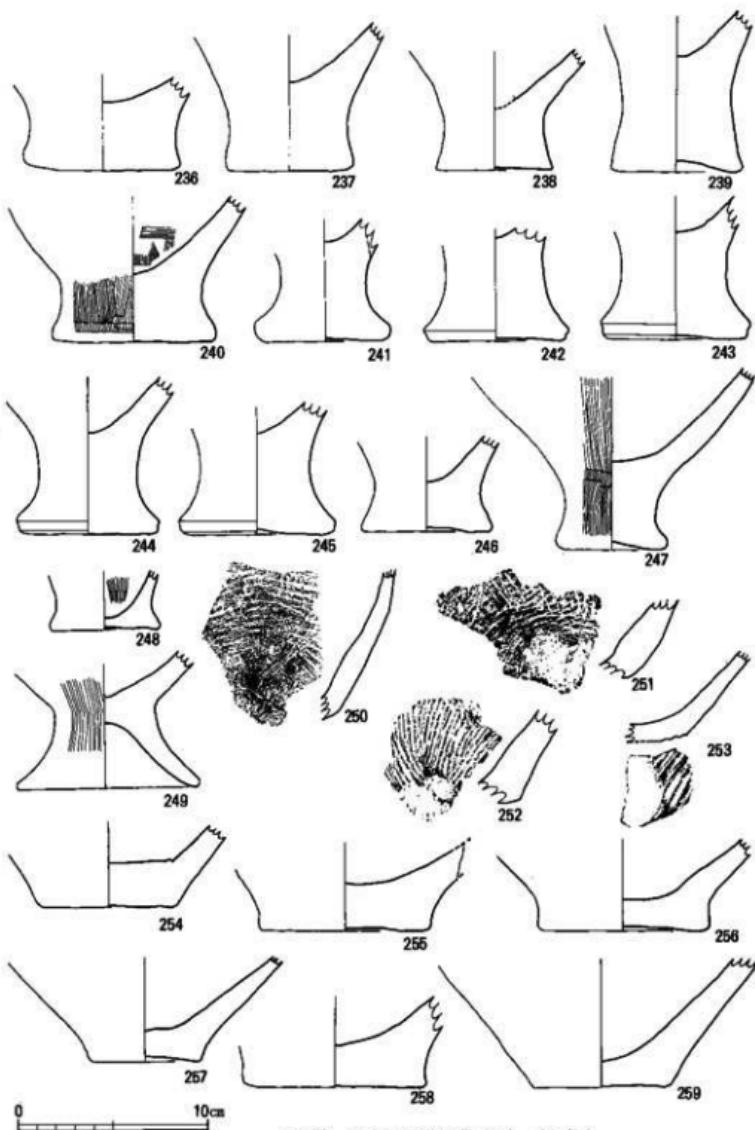
第23図 弥生土器実測図(8) (1/3)



第24図 弥生土器実測図(9) (1/3 184のみ1/4)



第25図 弥生土器実測図(10) (1/3)



第26図 弥生土器実測図(11) (1/3)

## 2. 石器及び石製品

H・I・J区およびK・L区からは、大型始刃石斧、石庖丁等の弥生時代を代表する石器の他、中世の石製品が大量の土器片と混在する状態で出土している。

### (1) 石斧(第27図)

1・2は大型始刃石斧の基部、刃部が欠損したもの。3は完形である。1は硬質粗粒砂岩製で現存長15.1cm、最大幅8.4cm、厚さ5.0cmを計測する。所々に細かい潰痕を有する。河床より出土したため、全面に銹色（暗オレンジ色）を呈している。2は現存長10.4cm、最大幅7.3cm、厚さ4.9cmを測る硬質粗粒砂岩製の石斧で、一部に丁寧によく磨かれた面を残している。両側面に多くの細かい潰痕を残すほか中央部に小さな凹みをみる。欠損部は断面からみて使用中に欠損したものと考えられる。両側面が銹色をしている。3は1、2より断面やや扁平な短冊形を呈して、長14.8cm最大幅6.8cm、厚さ3.8cmを計測する。刃縁に使用痕と思われる歯こぼれが全線にわたってみられる。片面に使用時のものと考えられる縦方向の大きな剥離がみられ、全体に細かな潰痕をみる。硬質粗粒砂岩製である。

### (2) 環状石斧(第27図)

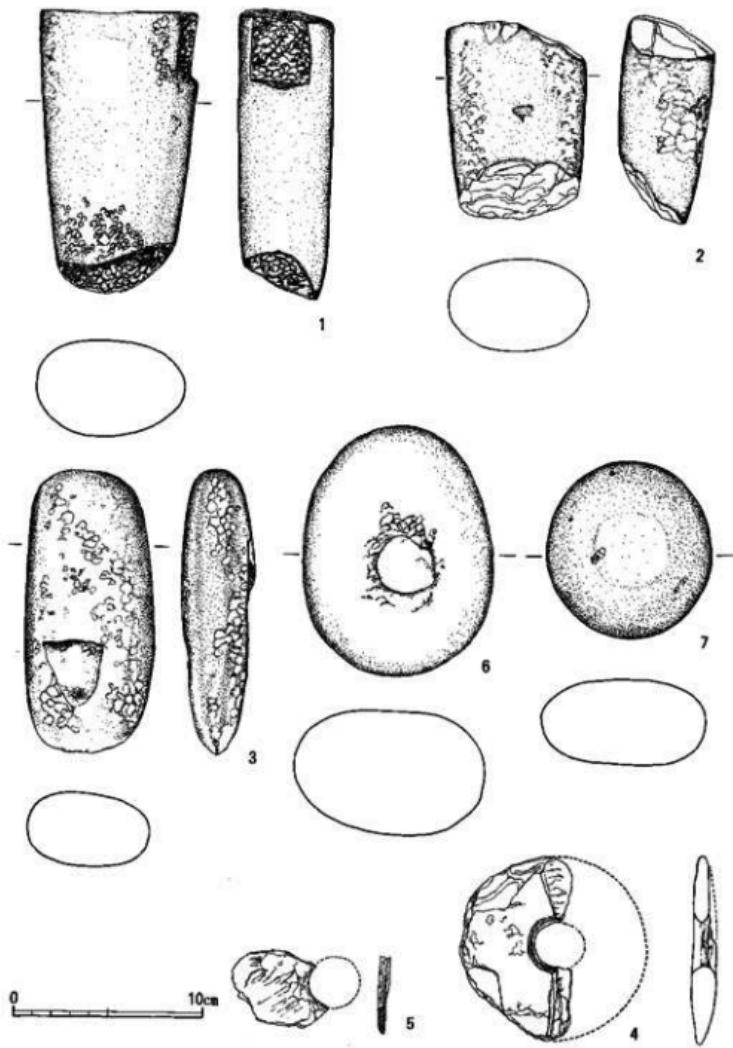
4・5は打製の環状石斧である。いずれも粘板岩製で4は半折損、片面は剥離が激しい。5は孔付近の剥離したものである。4の復元径は10.3cm、外孔径2.3cm、内孔径2.2cm、最大厚1.3cmを測る。片面は平面にちかい。孔は両方向から穿孔されて、断面形は珠玉状【><】を呈している。孔内は磨耗している。刃部の調整は粗く鈍角である。これも全面に銹色を呈している。4の内孔径は復元値2.1cmをしめし、5とほぼ同じ値をもっていることから、全径も10cm内外であつたろうと思われる。孔内は磨耗して滑らかである。

### (3) 扁平片刃石斧(第28図)

6は現存長5.7cm、幅3.7cm、厚さ1.5cmを計測する扁平片刃石斧で、全面平滑によく磨かれている。刃部には、歯こぼれ、擦痕、磨耗痕を観察する。石質はこの種の石斧に多用される明緑灰色の硬質の水成岩で、縦方向に縞模様が入る。

### (4) 石庖丁(第28図)

7は中央よりやや上部両端に切込みをもつ方形石庖丁である。長7.2cm、身幅4.35cm、厚さ0.79cmを計測し、掌中に収まる程度の大きさを持つ。左右の切込みはややずれている。刃部に



第27図 石器実測図1 (縮尺1/3)

水平方向の擦痕が顕著に認められ、刃先は磨耗している。やや軟質の粘板岩製で裏面はうすく剝がれている。8は半折損した半月形の石庖丁で、硬質の粘板岩である。刃部は鋭角な刃先が端部付近に一部残るのみで、中央部は欠損している。両面のほぼ全面に斜方向の研磨痕をみる。現存長7.1cm、身幅5.1cm、厚さ1.1cmである。9は背部が平坦でよく磨かれてつやがあり全体にゆるやかに湾曲している。刃先は鋭い。全面に水平方向の研磨痕をもち、刃部付近では斜方向の擦痕を観察する。うすく剝がれ易いや軟質の粘板岩製である。10は刃部付近で身部、背部の形状は不明である。刃部はよく磨かれて鋭く、刃先に歯こぼれを見るかなり硬質の粘板岩製である。

#### (5) 穿孔具（第28図11）

11はやや硬質の中粒砂岩製穿孔具である。両端共に穿孔に供されたと思われ、磨耗してくびれている。直径10~13mmの孔がうがたれたものと推定される。

#### (6) 石製品（第28図、第29図）

第29図15は用途不明石製品片。全面にわたり、先の鋭った金属製工具、例えばタガネのようなもので丁寧に加工した痕をのこしている。全体形は復元直径41.2cmほどの円盤状になるものと思われ、何かの蓋として使用されたものと推測される。中世のものであろう。

第28図の12は全長5.1cm、横幅3.95cm、厚さ0.8cmを計測する小形の硯様の石製品である。四隅は面どられ、墨だまりと思われるくぼみは深さ1.8mmを計る。斜めに走る研磨痕を観察する。

#### (7) 石匙（第28図12）

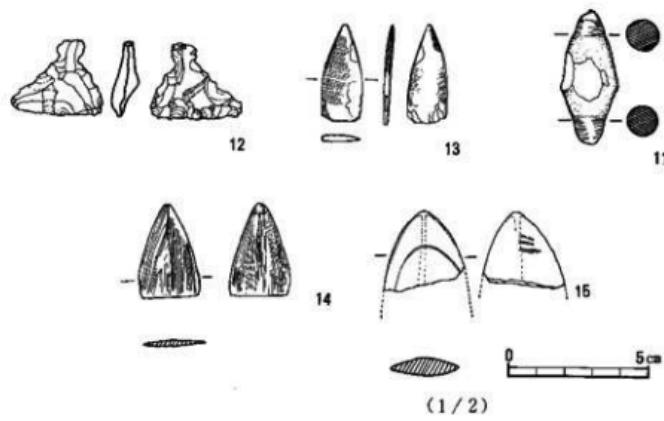
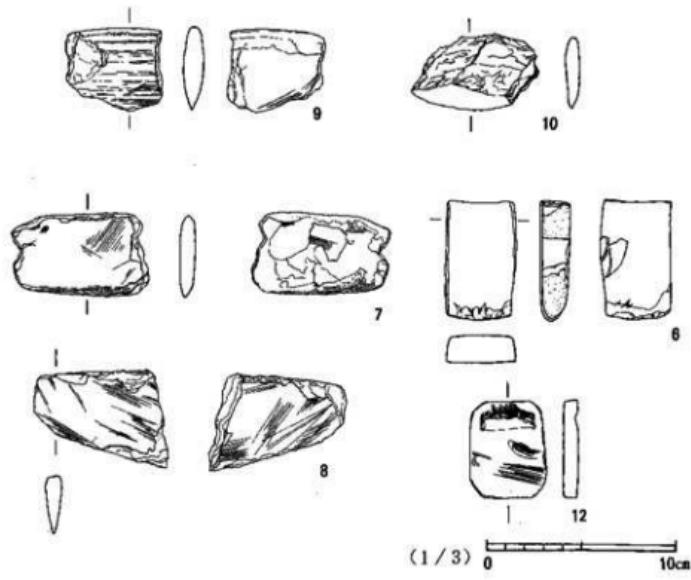
長2.65cm、幅3.3cm、最大厚9.9mmを計測する横形の石匙で、チャート製である。

#### (8) 磨製石鎌（第28図13、14）

13は粘板岩製の磨製石鎌で、中央に稜がみられず、扁平で、断面菱形を呈さない。長3.45cm、幅1.48cm、厚2.7mmを計る。14は緑泥岩製の磨製石鎌で、表・裏面に研磨痕を残す。中央に稜をもつが、直線とならずやや曲がっている。

#### (9) 石劍（第28図15）

15は石劍の先端部である。刃部に平行するように極浅い凹線が入っている。裏面にはみられない。断面は菱形状を呈しており、やや鋭いが稜を観察することができる。細粒砂岩製と思われる。



第28図 石器実測図2

#### ⑩ 五輪塔（第29図12・13・14）

13・14は五輪塔火輪の軒隅部である。13はゆるやかな反りがみられる。14は反りがほとんどみられない。二点とも軟質の凝灰岩である。12は水輪の下端部で、下端直径26.5cm、現存上端直径36.0cmを計る。これも明灰色の軟質凝灰岩製である。

なお、28図14の磨製石鎌、28図15の石劍は、発掘調査終了後、新名川開さく工事後の現場において表採され、県総合博物館にとどけられたものである。

#### 3. 土師器（第30図）

土師器としてはヘラ切り底、糸切り底を有する壺と皿が出土している。出土点数は極めて少量であり破片が多いため、推定口径、底径によらざるを得ない。よって、下記のように主に体部の立ち上がりなどから分類を試みている。ヘラ切り底のものをI、糸切り底のものをIIとし、壺をA、皿をBとした。

##### 壺

I-A-1類……体部が底部から急角度で立ち上がり、器高も高い。底部と体部は明瞭にわかる。（第29図 1）

I-A-2類……体部は底部から、かなり鈍く立ち上がる。（第29図 2・3）

I-A-3類……底部は高台様となり、体部がゆるやかに立ち上がる。（第29図 4）

I-A-4類……底部が不定に分厚く、少し高台様となって、体部は丸味をおびて立ち上がる。（第29図 5）

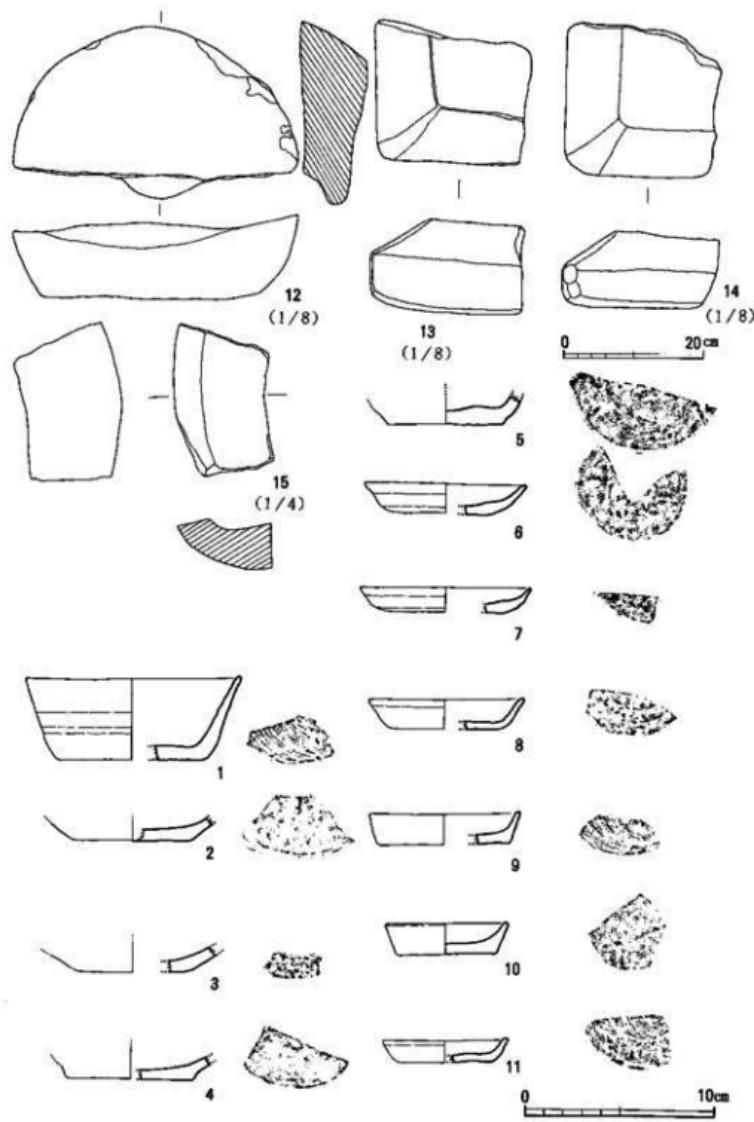
##### 皿

I-B-1類……体部が底部より角をもたずゆるやかに立ちあがり、底部と体部は不明瞭である。（第29図 6・7）

I-B-2類……体部が底部からゆるやかに立ちあがる。器厚が底、体部ともほとんど変わらない。（第29図 8）

II-B-1類……体部が底部から急角度で立ちあがり、底部と体部の境が明瞭である。（第29図 9・10）

II-B-2類……体部が底部からゆるやかに立ちあがる。底部はゆがんで、あげ底様となる。（第29図 11）



第29図 五輪塔(1/8)・石製品(1/4)・土師皿(1/3)実測図

表4 土器類(壺・皿)観察表

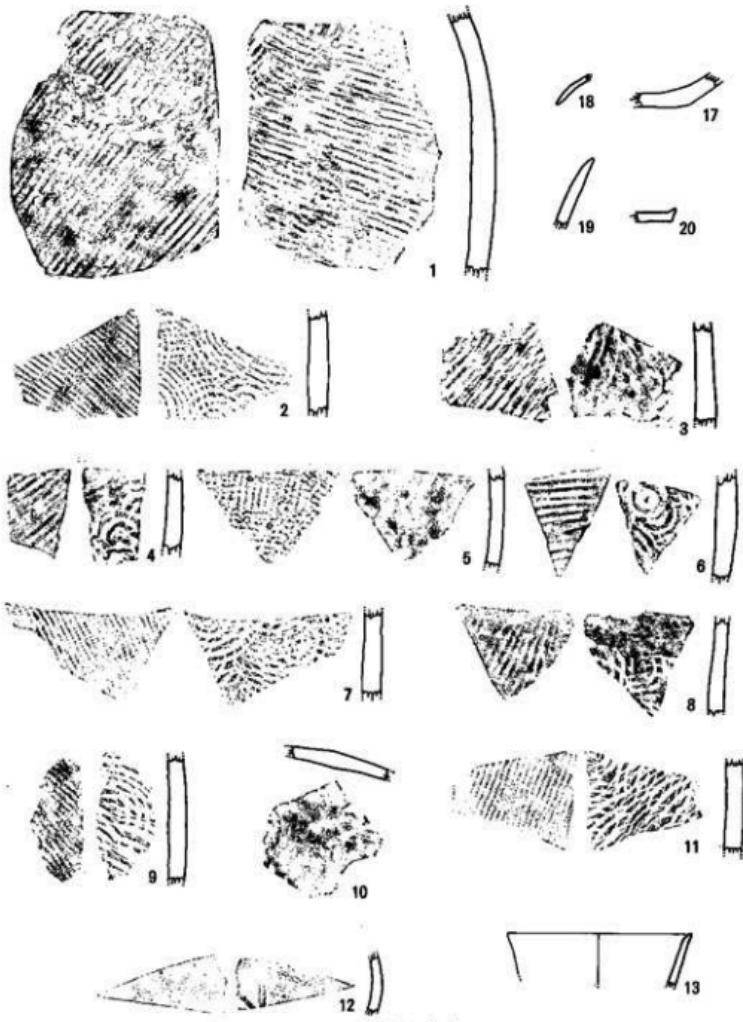
図/番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整		色調	底部切り離し	備考
					内	外			
29/1	壺	11.6	8.0	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 (Hue7.5YR8/2)	ヘラ切り	
29/2	壺	—	9.5	—	風化	ヨコナデ	明灰灰 (Hue7.5YR7/1)	ヘラ切り	
29/3	壺	—	6.0	—	(風化)	風化	にい透 (Hue7.5YR7/4)	ヘラ切り(風化)	
29/4	壺	—	6.6	—	ヨコナデ	風化	灰 (Hue 5 YR6/6)	ヘラ切り	
29/5	壺	—	8.8	—	ヘラケズリ	ヨコナデ	灰黄透 (Hue7.5YR8/4)	ヘラ切り	
29/6	皿	8.7	5.2	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	灰透 (Hue7.5YR8/6)	ヘラ切り	ヌスが付着している。
29/7	皿	9.0	6.3	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ	にい透 (Hue 5 YR7/4)	ヘラ切り	
29/8	皿	8.4	5.9	1.69	ヨコナデ	ヨコナデ	灰透 (Hue 5 YR8/4)	ヘラ切り	
29/9	皿	8.1	6.9	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	にい透 (Hue 5 YR7/4)	糸切り	
29/10	皿	6.56	5.4	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	灰透 (Hue 5 YR8/4)	糸切り(風化)	
29/11	皿	6.6	4.8	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ	灰透 (Hue 10 YR8/4)	糸切り	

## 4. 須恵器

須恵器は20点出土している。器形としては、壺・壺の他、壺、蓋、長頸壺等が考えられる。  
詳細については観察表にゆだねる。

表5 保木下遺跡出土須恵器観察表

図面 番号	構造	器形	底		色		胎土	質		備考
			内	外	内	外		内	外	
1	L3-2	須恵器 壺/漆	—	—	白	白	(Hue10Y7/1)	白	白	表面無文叩き
2	L3-1	須恵器 壺/漆	—	—	灰	灰	(Hue7.5Y5/6)	白色釉を含む	良好	良好子母叩き
3	L3-1	須恵器 壺/漆	—	—	灰	灰	(Hue7.5Y5/1)	白色釉を多量に含む	良好	白行縫文叩き
4	L3-1	須恵器 壺/漆	—	—	灰	白	(Hue10Y7/1)	白色釉を含む	良好	白行縫文叩き
5	L3-1	須恵器 壺/漆	—	—	灰	白	(Hue7.5Y6/1)	白色釉を含む	良好	子母叩き
6	L3-1	須恵器 壺/漆	—	—	白	白	(Hue10Y6/1)	白色釉(小)を含む	良好	白行縫文叩き
7	L3-1	須恵器 壺/漆	—	—	白	白	(Hue10Y7/1)	白色釉を少しきみ	不良	子母子母叩き
8	L3-1	須恵器 壺	—	—	灰	白	(Hue10Y7/1)	無理感ある	不良	同上
9	J4-1	須恵器 壺	—	—	白	白	(Hue7.5Y7/6)	白色釉を含む	良好	白行縫文叩き
10	J3-2	須恵器 壺	—	—	灰	白	(Hue7.5Y6/1)	白色釉を含む	良好	内風呂形叩き
11	J4-1	須恵器 壺	—	—	白	白	(Hue10Y6/1)	白色釉を含む	良好	子母子母叩き
12	H3-2	須恵器 袋	—	—	白	白	(Hue7.5Y5/1)	白色釉	良好	ヨコナデ
13	J2-1	須恵器 壺	19.1cm	—	白	白	(Hue10Y6/1)	(Hue10Y6/1)	ヨコナデ	ヨコナデ
14	J2-3	須恵器 壺/漆	—	—	白	白	(Hue10Y5/1)	(Hue10Y7/1)	白色釉を含む	良好
15	K3-1	須恵器 壺/漆	—	—	白	白	(Hue7.5Y6/8)	(Hue7.5Y7/2)	白色釉を含む	内風呂形叩き
16	J3-1	須恵器 壺/漆	—	—	白	白	(Hue7.5Y5/1)	(Hue10Y5/1)	白色釉を含む	ナテ
17	L4-1	須恵器 瓶	—	—	白	白	(Hue7.5Y7/2)	(Hue7.5Y7/2)	白色釉を含む	ヨコナデ
18	H5-2	須恵器 壺	—	—	白	白	(Hue6Y6/1)	(Hue6Y6/1)	良好	ヨコナデ
19	J3-1	須恵器 壺	—	—	白	白	(Hue6Y6/1)	(Hue6Y6/1)	良好	ヨコナデ
20	K5-1	須恵器 壺	—	—	白	白	(Hue6Y6/1)	(Hue6Y6/1)	良好	ヨコナデ



第30図 須恵器実測図（縮尺1/3）

0 10cm

## 5. 輸入陶磁器

### 青 磁

#### (1) 鎮蓮弁文碗（第31図1）

1は鎌蓮弁文碗の口縁で高台を欠く。内外面に明緑灰色の釉が比較的厚くかかっている。釉の透明度は低く、スリガラス状を呈している。浮彫りされた蓮弁は幅広のものであるが鎌をはじめ造りが全体に丸みを帯びている。13世紀から14世紀前半に位置づけられる。

#### (2) 稜花皿（第31図2・3）

2・3はともに青磁稜花皿の口縁部片で高台を欠いている、2は透明度の高い青緑色の釉がかかり、内外全面に貫入がみられる。周縁を稜花様に形作り、これにそって3本のしっかりした沈線を巡している。胎土に0.1mm程の白色粒、石英を含み全体に青味を帯びた灰色をしている。3は透明度の低いオリーブ色に発色した釉が薄くかけられている。外面に模様はみられない。胎土は明褐灰色で緻密であるが、4mm大の白色礫の混入もみられ精選されていない。稜花皿は15世紀後半から16世紀中葉に位置づけられる。

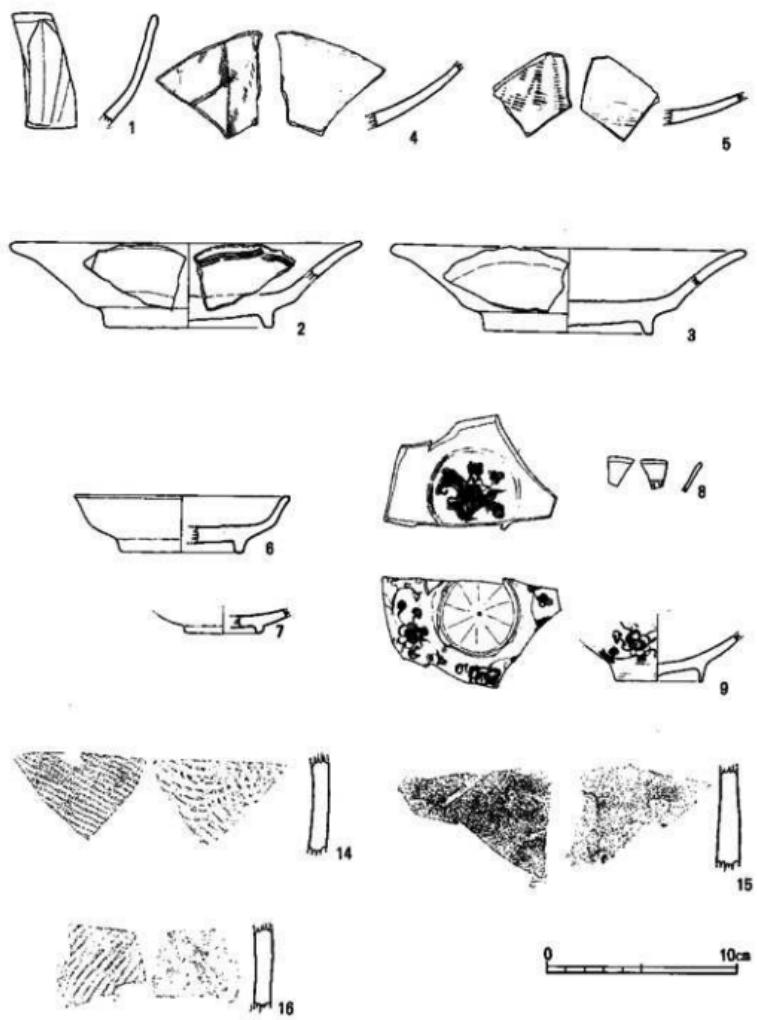
#### (3) 青磁碗（同安窯系）（第31図4、5）

4、5はいずれも同安窯系の青磁碗である。4は外面に7～8条単位の縦方向平行沈線、内面に片切彫、柳描文をもつ。高台に近い部分の体部片である。5は同じく外面に8～9条単位の縦方向平行沈線と、内面に花文の一部と思われる片切彫と羽毛状の柳描文をもつ体部片である。いずれもオリーブ色を帯びた浅黄色の釉であるが、5のほうがやや黄味がつよい。胎土はどちらも灰色で、5は緻密に焼きしまっているが、4は細かな間隙がみられる。12世紀から13世紀のものである。

#### (4) 青磁小皿（第31図6）

6は腰部から急に立ちあがり、緩やかに外反して口縁に続く器形を有する皿で、器高に比較して高台が高い。一段落ち込んでつくられた見込と高台内はともに露胎となり、高台内縁周部と置付には釉をかきとった跡を残す。置付の一部に釉がそのまま残っている。釉は透明度の低いくすんだ若草色で、厚くかかっており、内外面ともに細かな貫入がみられる。

胎土は明灰色であるが、高台内断面は乳白色を呈している。細かな間隙が所々にみられ緻密とはいえない。15世紀のものと思われる。



第31図 陶磁器・須恵器実測図（縮尺1/3）

## 白 磁

### (1) 白磁皿 (第31図 7)

7は高台のみが残る。外面は高台直前まで釉がかかり、疊付、高台ともに露胎である。内面は見込み内に釉をかけているが、見込の周縁約1cm幅で釉をかきとり露胎としている。釉は灰白色に発色、胎土は灰色で細かな間隙がある。8は口禿の小皿の口縁部である。乳白色の釉が薄くかかる。内面に白色の雷文の一部が観察できる。13世紀～14世紀にかけてのものである。

## 染 付

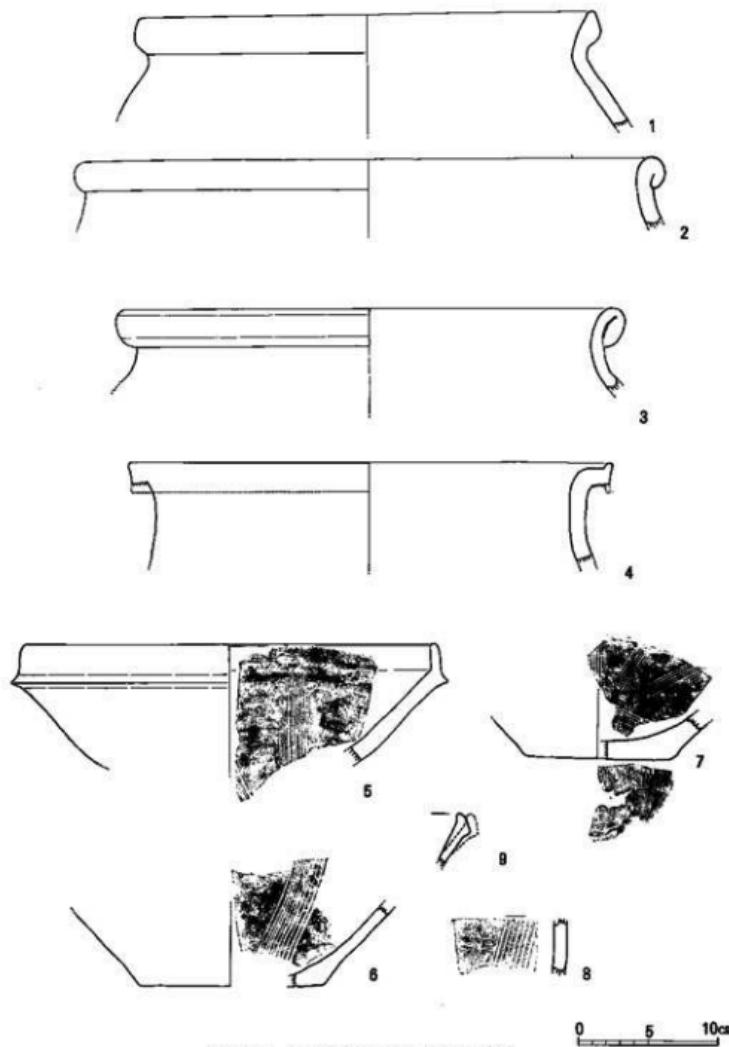
### (1) 牡丹唐草文碗 (第31図 9)

高台から腰にかけての一部で口縁を欠く。いわゆるレンツー碗の形状をしており、高台内中央に兜巾を形成する。腰から高台にかけては極めてゆるやかな曲線でつながる。疊付は薄く、一部に焼成前に折れ曲った跡を残す。外面に牡丹唐草文、内面には二重の界線を巡した見込み中に牡丹文を描いている。外面高台基部に細かい界線、高台下部に一条～二条の界線をもつ。青白灰色釉は疊付を除いて全面にほどこされ、貫入はまったくみられない。疊付は露胎となっているが、一部釉がたれ残っている。

## 6. 中世陶器 (第32図)

多量の弥生土器片に混じって、備前焼の壺・擂鉢、常滑焼、東播系のこね鉢が出土している。常滑の壺は口唇部下を欠くが、おそらく上下に突出する形状でⅢ期に属し、備前の壺は玉縁状の口縁部の形態からⅣ期に編年できる。擂鉢5は口縁の形態からⅣ期にあてられる。擂鉢7は胎土、糸切り底をもつなど、5・6とは異質なものである。詳細については観察表にゆだねる。

註1 「備前」『世界陶磁全集』3. 日本中世. 1977年. 間壁忠彦氏編年による。



第32図 中世陶器実測図（縮尺1/4）

表一六 中世陶器観察表

図/番号	器種	产地	量産	色調	胎 土	調 整	備 考
1	壺 備 前		31.2 cm	明灰白色	0.1~0.3 mmの砂粒を多く含み、3.0~6.0 mmの粗粒を少々含む。	口縁内外面はヨコナデ。肩部内面磨毛。	風化して、外面の釉が剥げている。玉縁状口縁である。
2	壺 備 前		31.8 cm	灰褐色	0.1~1.0 mmの白色粗砂を石英を含む。	口縁内外面ともヨコナデ	折り曲げて玉縁状の口縁をつくる。焼成は堅焼で丁寧につくられている。
3	壺 備 前		38.4 cm	灰褐色	1.0 mmほどの石英長石を含む。金剛石を若干含む。	口縁内外面ともヨコナデ	折り曲げて、断面円形に近い玉縁をつくる。釉につやがのこる。
4	壺 常 清		32.9 cm	暗灰色	0.1~1.0 mmの白色粒、0.1~0.3 mmの石英、2.0~6.0 mmの砂粗粒を含む。	口縁内外面ともヨコナデ	
5	壺 備 前		26.5 cm	にぶい赤褐色	0.1~5.0 mmの砂粒を含む。	内面、ヨコナデ。外面、ヨコナデのあと一部削除跡あり。	条線は7~8条単位で深く施される。
6	擂鉢 備 前		12.8 cm	にぶい赤褐色	0.1~3.0 mmの白色粗砂を石英を含む。	内面、ヨコナデのあとカキ目。外面、ヨコナデのあと削除跡。	条線は10条。焼きはややあまい。
7	擂鉢 不 明		10.0 cm	明赤褐色	ひじょうに粗粒。0.1 mmの砂粒を多く含む。	外面、滑ヨコナデ	条線は浅く、7条単位に施される。焼きはひじょうに堅焼。底は糸切りである。
8	擂鉢 備 前	二	青灰色		0.1~0.8 mmの長石粒を含む。	内面、ヨコナデ	条線は深く、7条単位で施される。
9	こね鉢 東播州	二	内面灰白色 外面青灰色		0.5~1.9 mmの砂粒を含む。	風化しており不明	風化して調整不明瞭である。

### 第3章 結語

良好な水田遺構検出の条件として、先人の足跡から学び得る事項には、次の二つがあげられる。ひとつは、水田面が濃厚な火山噴出物で覆われている場合、あるいは洪水時における多量の氾濫堆積物の被覆によるもの。<sup>註1</sup>いずれも比較的短期間のうちに水田面に堆積したものであり、それが水田の機能を奪いさり、耕作者に水田を放棄せると同時に当時の環境を凍結する役割をはたしている。遺憾ながら、本遺跡の場合、前述の二項に概当していないために当時の環境そのままに水田地形を復元することは困難であった。ほぼ同質にちかい土壤を数センチ、時には数ミリづつ削りながら面的に精査する困難さを痛感させられた。

水田土壤という特性から起因する土層の堆積状況は先に述べたとおりであるが、土層断面を観察することによって本遺跡の基本的な特質を理解することができる。本遺跡の場合、アクオリゼーションといわれる鉄・マンガンの酸化集積層を極めて明瞭に観察することができ、この土層部分が灌漑水を用いた乾田耕作であったことを物語り、<sup>註2</sup>Ⅲ層以下は葦管状の斑文を有していることなどから地下水の影響が大であったことを示している。<sup>註3</sup>Ⅲ層以下の土層は砂層となり、あるいはレンズ状に黒灰色粘土層がはまるグライ層となっており、水田耕作に適さなかったことを物語る。おそらく新名爪川は微妙に流路を変えながら流れ、耕作可能な冲積地も流路の変化にともなって推移していたものであろう。

本遺跡の土層堆積状態において考慮すべきことに、第X層と第XI層との関連がある。第X層は青灰色の比較的粘土質の強い層と、同質ではあるが、酸化鉄と和水度が高いために黄灰色を呈する層からなっている。XI層は第X層とほぼ同質の土壤にアツキ色の酸化マンガンの結核がみとめられる層で、上層すなわち第X層と接する面ほど大きな結核がみとめられ、下層にゆくにしたがって結核は粒が小さくなり密集する土層である。この土層上に畦畔の高まりが唯一みとめられたA 1区の畦畔があり、これは第XI層の土壤と同質のもので形成されていた。すなわち、畦畔面にアツキ色の酸化マンガン結核が顯著にみとめられた。一般に畦畔は水田耕作土や水田床土のように、永い間還元状態におかれることは少ないから、灌漑水による理化学的変化が異なってくる。本遺跡の畦畔が他面に比べて、白っぽい帯として検出されたのはこのためであると理解できる。これは畦畔表面が湛水されないために、酸化鉄や酸化マンガンの沈着現象がおきないのである。顯著な酸化マンガン結核のみとめられる層は、上層に水田耕作土をもち、自らは水田床土となる層であるから、畦畔上面にこれを認め得るのが一般的である。しかし、A 1区の畦畔にはこれが明らかにみとめられる。A 1区の畦畔上の酸化マンガン結核を次のように理解することが可能であ

る。過去において第XI層は表層であり、耕作土であった。当然、A 1区の畦畔はこの時に同質の土壤によって形成された。勿論、畦畔高は今回検出した1cm程というような小さなものではなかった筈である。しかし、何らかの原因で耕作者は、この水田面での耕作を断念し、畦畔を削平して水田面を水平にならして客土を行なった。畦畔は断面をみればわかるように明らかに削平されている。その後、客土された土壤を耕作土として、水田經營を継続した。水田耕作の継続によって過去表層であり、耕作土であった第XI層は水田床土となり、酸化マンガン結核が形成されたという推測が成り立つ。第XI層が過去において表層であったことは、土壤分析の結果をみても明らかである。それは他の層に比べて植物蛋白石の含有率が高く、過去の表層であったことを暗示している。

しかし、ここにおいて不可解であるのは第X層の理化学的な分析結果である。第X層が客土ではないかと疑われるのは、第X層、第XI層の接線がいかにも水平であり、明らかに第XI層上面で表面をならした跡がうかがえるからであるが、第X層は客土されるくらいであるから、当然、耕作土壤として利用された筈であるのに、土壤分析結果をみると植物蛋白石が極端に少なく耕作土とは考えにくい。しかも、花粉分析ではこの層からは全く花粉が検出されておらず、全く異質であるという結果がでている。この結果からしても耕作土とは考えがたい。してみると、畦畔①上面のマンガン結核は第X層耕作土により形成されたものではないということが導きだされ、第XI層水田面と上層水田面の間には、幾許かの断絶を考慮しなくてはならないという結論が導きださられる。

さて、今回検出した第XI層水田面は、基本的には北端部の地山周縁部から新名爪川方向にむかって營まれ、大小の水路によって灌漑されていた。水路に関しては、“堀”のような特別な水利施設といえるものはないが、C 1区北端に位置する水路が一坦水溜となって、そこから分岐する小水路からゆるやかに通水して流下灌漑し、適宜に畦畔を切って水田面に取水したものと考えられる。また、D 1・2・3区で検出した縞模様状の遺構については、高低差を検出し得なかったものの、先例からして裏作の畝軸と考えて良いと思う。

水田遺構において、水田面の時期を特定することは出土遺物が僅少であることが主たる原因で困難を極めるが、本遺跡の場合もこれにたがわず、水田面の出土遺物は弥生式土器、土師器の風化して磨耗した小破片の他に、最も新しい時期のものとして常滑の壺と思われる胴部片の一点にとどまっている。勿論、磁器の出土はみていません。その他の手掛りとしては先の裏作の畝状遺構があり、下層であるK・L区、H・I・J区出土の最も新しい遺物、糸切り底をもつ土師器の杯、備前の壺、すり鉢、五輪塔の残欠などからして、XI層水田遺構の時期を室町後期、それもか

なり近世に近い時期と考えたい。

本遺跡の場合、水田址上面に砂層が介在しないため、遺構（畦畔等）検出は容易でなかった。しかし、このことは逆に砂層等の異層がはまらない場合でも、粘土質土壤においてもある程度の水田遺構輪郭をつかめることを実証した。また乾田であったためにマンガン層といった特徴的な土層が鍵となって、水田址面の把握という点では比較的容易であった。しかし、古代水田址の多くはおそらくマンガン層をはさまない湿田、あるいは湿田に近いものだと思われ、グライ土壤環境における水田遺構の検出が今後の課題となろう。

註1. 例えば浅間山起源火山灰降下層下に埋没した群馬県下の水田址が代表的。「群馬県下における水田址の調査」、『月刊文化財』181、森田秀策、第1法規78

註2. 西日本の水田址にその例が多い。岡山市百間川遺跡などが代表的である。

註3. H・I・J区東壁面における第Ⅲ層をさす。

註4. 『那珂君休遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集、福岡市教育委員会 1984

#### 参考文献

- 『那珂深ツサ遺跡I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集 福岡市教育委員会 1981  
『那珂深ツサ遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集 福岡市教育委員会 1982  
『拾六町ツイジ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第92号 福岡市教育委員会 1983  
「水田遺構をさぐる」『地理』10 古今書院  
『古代日本の知恵と技術』朝日カルチャーブックス28 大阪書籍 1985  
『考古学調査研究ハンドブックス』野外編 雄山閣 1984  
『土壤学の基礎と応用』農文協 1984

## (付) 諸 分 析 の 結 果

# 宮崎市保木下遺跡における土壤調査成績書

宮崎県総合農業試験場化学部

宮崎市保木下遺跡における土壤断面調査および土壤の理化学性をしらべた結果は下記のとおりである。

## I 土壌断面調査結果

1. 地点 No 1 場所: 宮崎市大字島之内字保木下  
(B 1 区) 調査年月日: 昭和59年9月14日

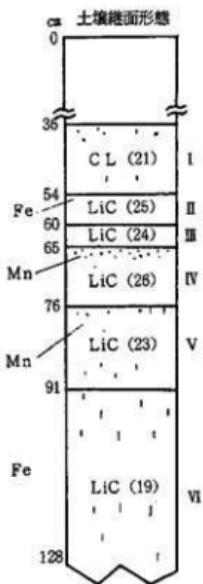


- にとむ、塊状構造炭化小粒あり、赤褐（5 YR%）糸状斑とむ、明赤褐（5 YR%）色雲状斑あり、可塑性小、粘着性小、透水性小、ち密度28をわめてかたい、層界はやゝ明瞭。
- III B<sub>1</sub>ir 52-58cm、灰（5 Y%）[全体の土色:暗灰黄（2.5Y%）] 色の埴土（L）、小礫あり、塊状構造、赤褐（5 YR%）色糸状斑にとみ、赤褐（5 YR%）色雲状斑を含む炭化小粒あり、可塑性中、粘着性中、透水性小、ち密度27できわめてかたい、層界は明瞭。
- III B<sub>2</sub>ir 58-64cm、暗灰黄（2.5Y%）[全体の土色:明黄褐（10YR%）] 色の埴土（CL）塊状構造、褐（10YR%）色の雲状斑にすこぶるとみ、赤褐（5 YR%）色糸状斑にとむ、ち密度は26でかたい、可塑性大、粘着性大、透水性小、層界は極めて明瞭。
- IV B<sub>1</sub>mi 64-74cm、灰（7.5Y%）[全体の土色:暗褐（7.5YR%）～褐（7.5YR%）] 色の軽埴土（Lic）、弱塊状構造赤黒（2.5YR%）マンガン結塊にとむ、暗褐（7.5 YR%）色雲状斑にすこぶるとむ、糸根状黒色小片、赤褐色～橙色小片ふくむ、可塑性大、粘着性大、透水性小、ち密度25でやゝかたい、層界はやゝ漸変。
- IV B<sub>2</sub>mi 74-91cm、灰（7.5Y%）[全体の土色:暗褐（7.5YR%）～褐（7.5YR%）] 色の軽埴土（Lic）弱塊状構造暗褐（7.5YR%）色雲状斑にすこぶるとむ、可塑性大、粘着性大、透水性小、ち密度は23、層界はやゝ明瞭。
- IV B<sub>3</sub>mi 91-100cm、灰（7.5Y%）[全体の土色:褐（10YR%）] 色の軽埴土（Lic）、弱塊状構造、小礫あり、暗褐（7.5YR%）雲状斑にすこぶるとむ、マンガン結核は少ない、糸根状黒色片あり、可塑性大、粘着性大、透水性小、ち密度は20、層界は明瞭。
- V B<sub>1</sub>mi 100-111cm、灰（7.5Y%）[全体の土色:暗褐（10YR%）] 色の軽埴土（Lic）弱塊状構造赤褐（5 YR%）色糸状斑および暗褐（7.5YR%）色雲状斑にとむ、礫なし、可塑性大、粘着性大、透水性小、土器片、炭化細片含む、ち密度は21、層界はやゝ明瞭。
- V B<sub>2</sub>mi 111-119cm、灰（5 Y%）[全体の土色:暗灰黄（2.5Y%）] 色の砂質埴土（SC）、弱塊状構造、暗赤褐（5 YR%）色雲状斑を含み、暗赤褐（5 YR%）色糸状斑あり、赤色小粒多し、植物黒片あり、（火山灰土片やアカホヤ小塊片？）可塑性大、粘着性大、透水性中、ち密度は17、層界はやゝ明瞭。
- V B<sub>3</sub>mi 119-136cm、灰（5 Y%）[全体の土色:暗褐（10YR%）] 色の砂質埴土（S

- CL)、弱塊状構造、暗褐(7.5YR%)～明褐(7.5YR%)色雲状斑にとむ、赤色小粒にとむ、可塑性中、粘着性中、透水性中、層界はやゝ明瞭。
- VB4mi 136-150+cm、灰(5YR%)〔全体の土色:褐(10YR%)〕色の砂土(S)、構造なし、にぶい赤褐(5YR%)～褐(10YR%)色雲状斑にとむ、ち密度は21。

2. 地点 No.2 場所: No.1 断面より約10m 東寄り断面。

(B1区)



- I 36-54cm、灰(5YR%)〔全体の土色:褐(10YR%)〕の埴壌土(CL)塊状構造、褐(10YR%)色雲状斑にとむ、腐殖なし、小礫含む、ち密度は21、可塑性中、粘着性中、透水性小、層界は明瞭、この層はNo.1断面のII B<sub>1</sub>ir層に対比される。
- II 54-60cm、灰(5YR%)〔全体の土色:褐(10YR%)〕の軽埴土(Lic)、明褐(7.5YR%)雲状斑、赤褐(5YR%)色糸状斑にとむ、暗赤褐(5YR%)マンガン斑あり、塊状構造、可塑性大、粘着性大、透水性小、ち密度は23、層界は明瞭、この層はNo.1断面のIII Blir層に対比される。
- III 60-65cm、黄灰(2.5YR%)〔全体の土色:にぶい黄褐(10YR%)〕の軽埴土(Lic)塊状構造、明褐(7.5YR%)雲状斑、赤褐(5YR%)糸状斑にとむ、暗赤褐(5YR%)マンガン斑あり、可塑性大、粘着性大、透水性小、ち密度は24、層界は極めて明瞭、この層はNo.1断面のIII B<sub>2</sub>層に対比される。
- IV 65-76cm、灰(5YR%)〔全体の土色:褐(7.5YR%)〕の軽埴土(Lic)塊状構造、褐(7.5YR%)雲状斑、褐(7.5YR%)マンガン斑、黒褐(5YR%)色マンガン結核にとむ、炭化粒あり、ち密度は26でやゝかたい、層界は、やゝ明瞭、この層はNo.1断面のIV B<sub>1</sub>層に対比される。
- V 76-91cm、灰(7.5YR%)〔全体の土色:褐(7.5YR%)〕色の軽埴土(Lic)弱塊状構造、暗褐(7.5YR%)色雲状斑にとみ、黒(10YR%)色マンガン斑、マンガン結核

あり、ち密度は23、層界は漸変、この層はNo 1断面のIVB<sub>2</sub>層に対比される。

- VI 91~128cm、灰(7.5YR 1/2) [全体の土色:暗褐(7.5YR 3/4)] の軽壊土(Lic)、弱塊状構造、暗褐(7.5YR 3/4)色雲状斑にとむ、ち密度は19、この層はNo 1断面のIVB<sub>3</sub>以下の層に対比される。

なお、0~36cm部位については盛土されていたため、採取しなかった。

以上の土壤断面観察結果より、おもにI、II、III、IV、およびV断面の重なりがみられ、数回にわたり、堆積が行なわれたものと思われる。

## II 理 化 学 性

### 1. 粒径組成(表1)

両断面とも土性は一般に軽壊土(Lic)で粘質で最下層(VB<sub>4</sub>層)だけが砂質であった。

断面No 1では、IVB<sub>1</sub>~IVB<sub>3</sub>、VB<sub>1</sub>が上下層に比べて比較的、粘土含量が多い傾向を示した。

### 2. 細砂(0.2~0.02mm大)の一次鉱物組成(表2)

細砂中の一次鉱物組成よりみて、両断面の各層とも母材(土壤が形成されている材料)は火山灰起源(単斜輝石、斜方輝石、角閃石、磁鐵鉄、長石類、火山ガラス)および宮崎層群起源(ジルコン、石英、長石類、岩片など)による材料が混在しているものと思われ、これは背後地の影響をつよくうけているものと考えられる。

また、No 1のIVB<sub>1</sub>層、VB<sub>1</sub>層およびNo 2のIV層中は植物起源による植物蛋白石が比較的多いことから、過去の表層ではなかったかと思われる。

### 3. 物理性(表3)

両断面(No 1およびNo 2)の物理性は各層とも大きな差異は認められなかった。しかし、No 1のI Apg層(現在の耕土層)、No 1のII Bzir層、III B<sub>1</sub>層、IVB<sub>1</sub>層、V層、No 2のIV層(No 1のIVB<sub>1</sub>層に対比)はいずれも容気度が上下層よりやゝ高い値を示し、土壤構造が発達し、過去の表層ではなかったかと思われる。また、No 1のVB<sub>1</sub>層、No 2のV層(No 1のIVB<sub>2</sub>層と対比)で、透水係数が $\times 10^{-7} \times 10^{-6}$ を示し、透水能が悪いことを示している。

### 4. 化学性(表4)

両断面(No 1およびNo 2)の各層位を通じて、各成分とも、類似した値を示し、大きな差異は認められなかった。しかし埋没VB<sub>1</sub>層で全炭素量(0.9%)、全窒素量(0.14%)が上下層に比べてやゝ高い値を示した、また、交換容量はNo 1のII層(7.7meq)、III層(10.6

~10.7meq)、IV層(14.7~19.5meq)、V層(11.3~16.2meq)間で、また、交換性Ca、Mg含量でも、No.1のII層(5.5meqと1.4meq)、III層(7.0~7.3meqと1.9meq)、IV層(10.1~13.1meqと2.6~4.2meq)、V層(7.2~10.8meqと2.5~3.5meq)間でわずかな差が認められ、各埋没断面のちがいを示しているものと思われる。また、磷酸含量(全磷酸量、有効態磷酸量)および、磷酸吸収係数でも同様な傾向が認められた。

## 5. まとめ

宮崎市保木下遺跡における、土壤断面調査および土壤の理化学性をしらべた結果は次のようく要約される。

- 1) 土壤断面観察結果から、5つの堆積様式が異なる断面からなっているものと思われた。すなわち、No.1のI断面(現在の断面)II断面、III断面、IV断面、およびV断面である。
- 2) これらの各断面は細砂中の一次鉱物組成、物理性および化学的性質からみて、わずかではあるが、各断面間にそれぞれ差異があることが認められた。

表1 粒径組成

(乾土当たり)

試料名	層位	深さ (cm)	砂% (2~0.2 mm)	微砂% (20~2 μ)	粘土% (<2 μ)	土性 (国際法)
保木下 No.1	I Apg	0~16	29.37	36.00	34.63	L+C
	I Bair	16~26	30.71	37.05	32.24	L+C
	I Bzim	26~44	49.12	20.20	30.68	L+C
	II Bair	44~52	45.14	26.62	28.24	L+C
	III Bair	52~58	52.65	23.03	24.32	C L
	III Bzim	58~64	45.56	26.83	27.61	L+C
	IV Bzim	64~74	43.95	19.65	36.40	L+C
	IV Bzmi	74~91	41.01	24.14	34.85	L+C
	IV Bzmi	91~100	36.70	25.72	37.58	L+C
	V Bzmi	100~111	29.90	34.08	36.02	L+C
保木下 No.2	V Bzmi	111~119	56.41	15.83	27.76	L+C
	V Bzmi	119~136	59.62	14.71	25.67	L+C
	V Bzmi	136~150 <sup>+</sup>	71.95	15.08	13.02	SL
	I	36~54	45.23	25.64	29.13	L+C
	II	54~60	45.09	26.38	28.53	L+C
	III	60~65	40.83	29.24	29.93	L+C
	IV	65~76	45.98	25.08	28.99	L+C
	V	76~91	48.67	22.18	29.15	L+C
	VI	91~128	53.54	21.87	24.59	CL

注) 保木下No.2のI層~IV層の各層は保木下No.1のII Bair~IV Bzmi以下に対比される。

表2 細砂(0.2~0.02 mm大)の一次鉱物組成

(%)

地点 No.	層 位	深 さ (cm)	同定粒 定した 数	巖 斜 鉄 斜 石	角 閃 石	磁 鐵 鉱 鉱 類	ジ ル コン	石 英	長 石 類	無 ガ ラ ス (=1.36)	植 物 白 石 (=1.45)	岩 片	被 覆 鉱 物
No.1	I Apg	0~16	212	+	+	2		41	25	8	12	8	3
	I Bair	16~26	247	1	1	1	2		37	29	5	7	13
	I Bzim	26~44	215	1	2		3		37	36	7	5	5
	II Bair	44~52	220	+	3		4		36	35	6	2	11
	III Bair	52~58	211	+	2	+	3		40	34	3	4	9
	III Bair	58~64	304	+	1		2	+	52	37	2	1	4
	IV Bzim	64~74	267	1	1	+	5		36	28	6	7	13
	IV Bzmi	74~91	232	+	1	+	3		40	34	9	3	3
	IV Bzmi	91~100	202	1	+		8		43	31	3	4	5
	V Bzmi	100~111	276	+	+		4		37	36	3	13	4
No.2	V Bzmi	111~119	207	+	1		5		46	32	4	3	5
	V Bzmi	119~136	211	+	1		6		46	36	1	2	5
	V Bzmi	136 <sup>+</sup>	209	1	1		7		42	31	2	1	11
	I	36~54	205	+	1		2		47	36	1	3	6
	II	54~60	202	+	+		2		49	37	5	2	3
	III	60~65	221	+	1		4		43	37	4	1	9
	IV	65~76	242	+	1		4		39	38	2	10	4
	V	76~91	200	1	2		2		49	31	2	2	9
	VI	91~128 <sup>+</sup>	205	+	+		4		50	30	2	1	6

+; 1%以下

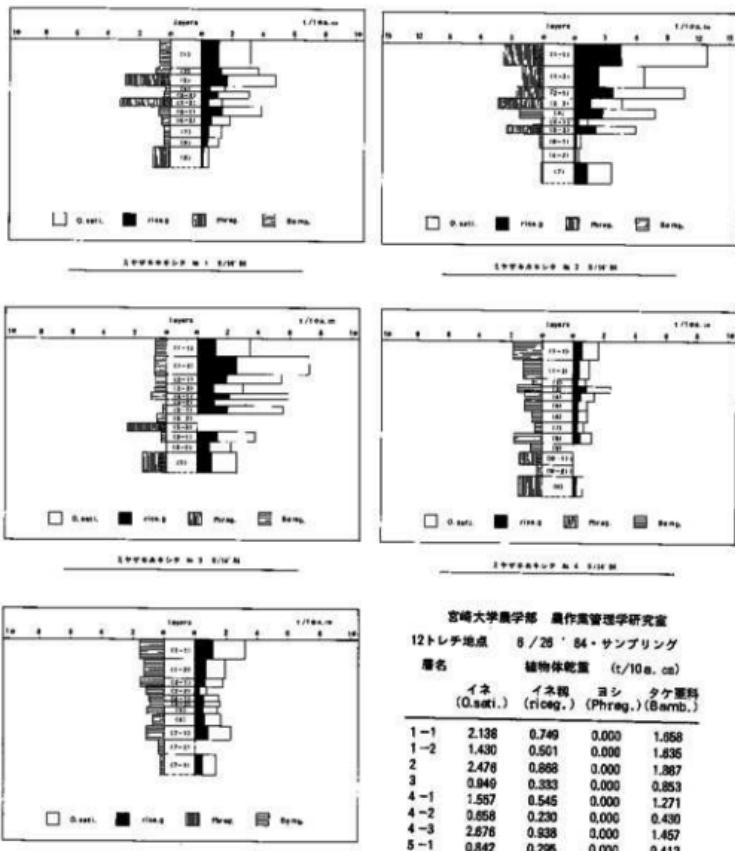
表3 物理性

地点No	層位	深さ(cm)	乾燥密度(g/cm <sup>3</sup> )	三相分布(pF1.5)%			容気度(%)	透水係数(cm/sec)
				固相	液相	気相		
No 1	I Apg	0- 16	1,080	42.4	46.9	10.7	18.6	$3.46 \times 10^{-4}$
	II Bair	16- 26	1,347	52.5	45.1	2.4	5.1	$5.26 \times 10^{-4}$
	I Bair	26- 44	1,390	54.2	43.7	2.1	4.6	$2.80 \times 10^{-4}$
	II Bair	44- 52	1,473	58.7	37.8	3.5	8.5	$2.35 \times 10^{-4}$
	III Bair	52- 58	1,466	57.1	38.9	4.0	9.3	$2.95 \times 10^{-4}$
	IV Bair	58- 64	1,463	57.1	40.9	2.0	4.7	$2.37 \times 10^{-4}$
	IV Bair	64- 74	1,418	55.0	40.7	4.3	9.6	$1.39 \times 10^{-4}$
	IV Bair	74- 91	1,347	52.2	44.1	3.7	7.7	$4.81 \times 10^{-4}$
	IV Bair	91- 100	1,358	52.9	47.0	0.1	0.2	$2.59 \times 10^{-4}$
	V Bair	100- 111	1,360	52.7	45.3	2.0	4.2	$1.49 \times 10^{-4}$
No 2	V Bair	111- 119	1,288	49.2	46.7	4.1	8.1	$3.84 \times 10^{-4}$
	VI Bair	119- 136	1,375	52.6	44.2	3.2	6.7	$1.82 \times 10^{-4}$
	V Bair	136+	1,401	53.3	41.7	5.0	10.7	$3.89 \times 10^{-4}$
	I	36- 54	1,416	55.0	41.3	3.7	8.2	$4.43 \times 10^{-4}$
	II	54- 60	1,452	56.1	40.9	3.0	7.2	$5.23 \times 10^{-4}$
	III	60- 65	1,472	56.4	41.3	2.3	5.3	$4.04 \times 10^{-4}$
No 2	IV	65- 76	1,473	56.4	39.8	3.8	8.7	$5.29 \times 10^{-4}$
	V	76- 91	1,426	55.2	42.2	2.6	5.8	$4.32 \times 10^{-4}$
	VI	91- 128	1,275	49.4	46.6	4.0	7.9	$2.88 \times 10^{-4}$

表4 化学性

地点No	層位	深さ(cm)	PH		全炭素(%)	全窒素(%)	交換容量(meq/100g)			交換性(meq/100g)			塩基飽和度(%)	全*有機酸溶物(mg/100g)	總吸率
			H <sub>2</sub> O	KCL			Ca	Mg	K						
No 1	I Apg	0- 16	5.9	4.6	2.0	0.26	14.8	7.5	1.8	0.2	66	208	8.2	787	
	II Bair	16- 26	6.4	5.0	1.3	0.18	14.4	8.8	2.3	0.1	79	151	4.9	721	
	I Bair	26- 46	7.1	5.0	0.7	0.09	17.2	11.1	3.6	0.1	87	115	3.7	787	
	II Bair	44- 52	6.5	4.9	0.6	0.07	7.7	5.5	1.4	0.1	92	80	3.4	523	
	III Bair	52- 58	6.7	4.9	0.6	0.07	10.7	7.0	1.9	0.1	85	78	3.0	572	
	IV Bair	58- 64	6.6	5.0	0.5	0.08	10.6	7.3	1.9	0.1	89	92	2.8	508	
	IV Bair	64- 74	6.4	4.9	0.6	0.08	14.7	10.1	2.6	0.1	88	95	4.0	733	
	IV Bair	74- 91	6.3	4.9	0.6	0.08	17.5	11.7	3.5	0.1	89	111	4.2	1142	
	IV Bair	91- 100	6.5	5.0	0.7	0.09	19.5	13.1	4.2	0.1	90	106	3.4	871	
	V Bair	100- 111	6.4	5.1	0.9	0.14	15.2	10.0	2.5	0.1	84	136	3.6	734	
No 2	V Bair	111- 119	6.5	5.3	0.6	0.08	15.2	10.8	3.4	0.1	90	88	4.6	787	
	VI Bair	119- 136	6.9	5.2	0.4	0.06	14.9	9.5	3.5	0.1	89	76	3.1	654	
	V Bair	136+	6.9	5.1	0.3	0.04	11.3	7.2	2.8	0.1	91	92	3.6	571	
	I	36- 54	6.7	5.2	0.7	0.08	12.2	8.0	2.1	0.1	85	92	3.0	626	
	II	54- 60	6.7	5.2	0.6	0.08	12.5	10.1	2.3	0.1	102	79	3.0	626	
	III	60- 65	6.8	5.2	0.5	0.08	12.7	8.3	2.4	0.1	87	74	3.0	588	
No 2	IV	65- 76	6.7	5.1	0.5	0.08	13.6	9.1	2.7	0.1	89	88	3.4	679	
	V	76- 91	6.5	5.2	0.6	0.07	14.1	9.4	2.7	0.2	89	88	3.3	667	
	VI	91- 128	6.4	5.2	0.7	0.08	15.2	9.8	3.0	0.1	86	129	3.6	800	

※ 過塩素酸可溶



宮崎大学農学部 農作物管理学研究室				
12トレチ地点 8/28 '84 サンプリング				
層名	植物体乾量 (g/10a. ca)			
	イネ (O.spat.)	イヌク (Rhoz.)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bam.)
1-1	2.138	0.749	0.000	1.658
1-2	1.430	0.501	0.000	1.835
2	2.478	0.688	0.000	1.887
3	0.949	0.333	0.000	0.853
4-1	1.557	0.545	0.000	1.271
4-2	0.658	0.230	0.000	0.430
4-3	2.878	0.938	0.000	1.457
5-1	0.842	0.295	0.000	0.413
5-2	1.032	0.362	0.000	0.590
6	0.419	0.147	0.888	0.988
7	0.000	0.000	1.418	0.687
スナノシタ	0.000	0.000	0.000	0.232

宮崎：保木下遺跡におけるプラントオバール定量分析

## ミヤザキホキシタ 6 / 26 ' 84 (12トレンチ)

層名	深さ (cm)	層厚 (cm)	GB数/g	植物名	PO / GB	PO数 / g	仮比重	PO数 / cc	地上部乾重 (t/10a.cm)	イネ初量 (t/10a.cm)	生産総量 (t/10a)
1-1	0	23	284546	イネ ヨシ タケ	4 /177 0 19	6430 0 30545	1.131	7273 0 34546	2.138 0.000 1.658	0.749	17.229
1-2	23	23	296609	イネ ヨシ タケ	2 /159 0 14	3731 0 26117	1.304	4865 0 34056	1.430 0.000 1.635	0.501	11.526
2	46	10	288152	イネ ヨシ タケ	3 /144 0 14	6003 0 28015	1.403	8422 0 39305	2.476 0.000 1.887	0.868	8.675
3	56	9	289682	イネ ヨシ タケ	2 /249 0 11	2327 0 12797	1.388	3230 0 17763	0.949 0.000 0.853	0.333	2.994
4-1	65	11	290607	イネ ヨシ タケ	2 /144 0 10	4036 0 20181	1.312	5296 0 26478	1.557 0.000 1.271	0.545	6.000
4-2	76	11	306304	イネ ヨシ タケ	1 /188 0 4	1629 0 6517	1.373	2237 0 8948	0.658 0.000 0.430	0.230	2.535
4-3	87	11	288457	イネ ヨシ タケ	3 /127 0 10	6814 0 22713	1.336	9103 0 30345	2.676 0.000 1.457	0.938	10.314
5-1	98	7	297255	イネ ヨシ タケ	1 /138 0 3	2154 0 6462	1.330	2865 0 8595	0.842 0.000 0.413	0.295	2.066
5-2	105	7	298556	イネ ヨシ タケ	2 /214 0 7	2790 0 9766	1.258	3510 0 12285	1.032 0.000 0.590	0.362	2.531
6	112	10	296403	イネ ヨシ タケ	1 /248 1 14	1195 1195 16732	1.193	1426 1426 19962	0.419 0.988 0.958	0.147	1.469
7	122	18	287545	イネ ヨシ タケ	0 /199 1 7	0 1445 10115	1.414	0 2043 14302	0.000 1.416 0.687	0.000	0.000
スナ/ シタ	140	-	287848	イネ ヨシ タケ	0 /179 0 3	0 0 4824	1.000	0 0 4824	0.000 0.000 0.232	0.000	-

## 保木下遺跡における定量分析結果

## 保木下遺跡の花粉分析

中村 純

本調査は保木下地区で発掘された水田遺構を中心とし、当時の堆積環境を明らかにすることを目的としたものである。

調査の機会を与えられた宮崎県教育委員会の方々に感謝する。

### I 試料および分析法

花粉分析用試料は同遺跡内の次の3地点より採取した。

1. B-1地点 表層より-140cmまで10cmごとに採取した。表層から-40cmまでは灰褐色砂質粘土、-50~-60cmは茶褐色砂質粘土、-70cm以下は茶褐色シルト質粘土で酸化鉄の褐色斑紋が多数見られる。-50~-60cmの間および-90cm以下はともに無花粉帯であった。
2. D-1地点 -60cmから-130cmの間を採取した。全層灰褐色の砂質粘土で酸化鉄の斑紋が多数みとめられた。
3. B-3地点 水田遺構と思われる層位のみから採取した。灰褐色砂質粘土

上述のように-60cm以下の層には糸根状の褐色の水酸化鉄の斑紋が多数識別される。これは植物の根、茎に起因する孔隙に、地下水中に溶存する鉄分が、地下水位の低下した時に酸化沈殿して生成したものである。このことから当地区では地下水位の季節的変動がはげしい堆積環境にあったことを示している。このために地中の花粉も酸化分解をうけやすく、花粉量も非常に少ないことが予測された。

花粉の分離は次の方法によった。試料をHF(40%)に12時間浸漬したのち、ZnCl<sub>2</sub>液で花粉を比重選別し、さらにアセトリリス法で濃縮させた。かくして得られた花粉が少ない場合は花粉を全部検鏡することが必要で、この目的には内径8mmの微小速心管を用いた。

分析の結果検出された花粉群はすべて木本花粉の総量を基本数として%で示した。また木本花粉が150個未満の試料では試料20g当たりの花粉個数で示した。イネ花粉のみは位相差像で同定した。これらの結果は表1、2で示した。

### II 分析結果と考察

1. B-1地点：全層を通じて木本花粉29種類、草本花粉36種類が検出された。これらの中でも主要な種類の消長は図1の花粉分布図に示した。さきの表1、2および図1によると-50~-60cmの無花粉層をはさんで上、下両層に大別できる。上層は表層から-40cmの間でマツが表

層に向って急増する。スギも-30cmから突如増加し、マツを上回る勢いである。反対にシイ、カシ、ヤマモモなどの照葉樹は表層に向って急減する。このような樹種の変遷は田野町芳ヶ迫第1遺跡や学園都市遺跡群の表層部の調査でも認められており、照葉樹林がマツやスギの植林地に急速に変わったことを示している。また草本類ではイネ科、とくにイネ花粉が急増して上層部は水田の堆積物であることを示している。またタネツケバナを主とするナタネ科の草本類やミチヤナギが同様に急増する。これらは水田やそれを収穫した畠や路傍に多い植物である。またソバやヨモギなどの細作と関連をもつ種類は表層に向って減少し、水田化が進んだことを物語っている。上層と下層とを分けている約20cmの厚さの土層は上、下両層とは異質のもので花粉も全く含んでいない。おそらくこの地方に植林地が拡大する前に客土されたもので、上層部は客土後に自然堆積したものであろう。客土の年代は1000~1500年前をでない時代と推測される。

-70cm以下の下層部は前述のように水酸化鉄の斑紋が多く、乾湿の変化のはげしい環境下に形成された土層で、これに含まれる花粉の分解もはげしく、上層に比べて種類、量ともに半分以下である。したがって検出された花粉組成は当時の植生を適確には反映せず、多少歪められている恐れもある。そのため環境復元も概略的なものにならざるを得ない。

分析結果によると全層を通じてカシ類が圧倒的に多く、次いでヤマモモが多い。その他の照葉樹としてはヤマモガシ、ミサオノキ、ハイノキ類などが少量検出される。上層で優勢であったマツ、スギはきわめて少ない。これらのことから当時は照葉樹林の優勢な植生下にあったことは確かであろう。草本類ではヨモギ類などのキク科が多く、これに次いでセリ科、イネ科が多い。イネは全イネ科花粉の半分を占め、近くで稲作がおこなわれていたことは確實であるが、上層部に比べてイネの頻度は低く、かつ水田雑草とみなされるものが検出されていないから本地点が当時水田であったと断定はできないであろう。

下層部の堆積年代については花粉量が少ないため断定的なことはいえないが、マツの頻度が低いこと、弥生時代後半から古墳時代にかけてはマツが徐々に増加し、モミ、ツガ、時にスギの一時的増加が一般に認められているが、そのような堆積層を欠いていることから、上層部と下層部との間には少くとも500~1000年のtime gapがあると考えられる。したがって最下層からソバが検出されることなども合せ考えると下層部の時代は弥生中期よりさらに古くはないであろう。

2. D-3 地点：前地点の上層部を除き、下層部に対比される層位のみから採取した。その結果-80、-90cmの2試料を除き他は木本花粉が150個以下で統計的な処理は不可能であった。

しかし全試料とも花粉の消長はB-1地点の下層部に類似しており、同一時代に同一環境下で堆積したものと考えられた。

3. B-3地点：水田址と考えられる部位の3試料を分析した。検出された花粉は木本類23種類、草本類29種類と比較的多く、堆積環境は幾分花粉の保存に良好な地点であったらしい。また木本花粉の消長からみるとB-1地点の下層部の一時代に対比されることは確かである。草本類の消長もB-1地点下層部に類似しているが、イネ花粉は比較的多く、水田雜草のオモダカ、ヘラオモダカ類、タネツケバナ類なども出現して水田堆積物であることを示唆している。

以上のように本遺跡の主体をなす下層部は堆積環境が不良で、十分な花粉情報をうることはできなかったがイネ花粉は各試料で確認され水田そのものである試料も確認された。

#### 引　用　文　獻

- 中村 純（1984）芳ヶ迫第一遺跡の花粉分析的研究 田野町文化財調査報告第1集 田野町教育委員会
- 中村 純（1985）宮崎学園都市遺跡の花粉分析 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会

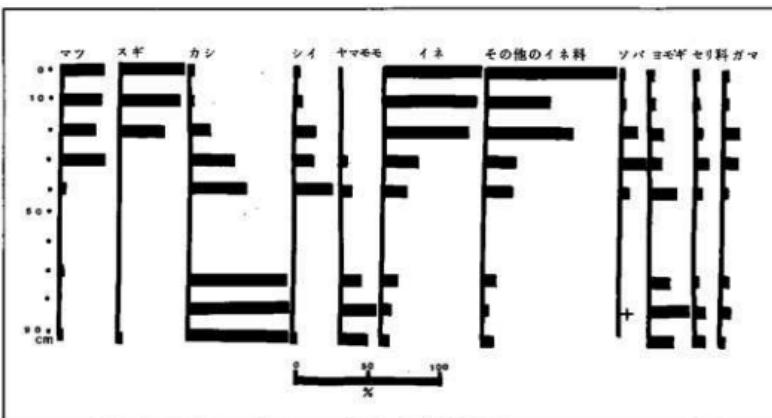


図1. 図1 B-1 地点の花粉分布図

表1 木本花粉分布表 ( ) 内は花粉個数 (試料20g 当り)

種類	B - 1										B - 3					D - 1								
	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	0	10	20	60	70	80	90	100	110				
マツ属	31.5	30.0	26.5	26.5	9.0	9.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0	4.0	(1)	1.0	1.0	1.0	1.0	(1)				
モミ属	0.6	1.4										0.6	1.0	1.0	1.0	1.2								
ツガ	0.2				0.4	0.8			2.6						(1)			0.8						
スギ	46.6	43.0	31.0	5.6	2.5							2.5	8.0							(1)				
ナギ	1.1	0.6	0.7	0.4																				
シイ	2.8	6.4	14.9	11.5	25.4							0.6	4.0	(1)	13.0	7.2	(8)	(8)						
カシ	3.6	2.9	14.8	31.2	36.1							65.2	67.1	66.8	(36)	46.3	(28)	57.2	(40)	(25)	61.6	88.4	(25)	(51)
マテバシイ																0.6								
コナラ	2.7	0.6	2.6	2.6	2.5							1.6	1.2		0.6	(2)	9.0	(1)						
ハンノキ	0.7	1.2		1.3	0.8				1.0	1.2	0.6			1.6		(1)		0.6	1.7					
シデ	0.2				0.9										0.6					0.6				
カバノキ	0.2					2.6						0.6	1.2	0.6		0.8		1.2		2.4				
ブナ						0.9																		
ヤマモモ	2.4	1.8	1.4	5.8	10.3				15.5	24.9	19.9	(5)	7.3	(10)	14.4	(7)	27.2	33.9	(14)	(18)				
メノウームクノキ	2.4	0.6		0.9	1.6					2.2									0.6					
ケヤキニレ	0.2	0.9		0.4												1.2								
ヤマセガシ	2.1	3.6	1.4								0.4			1.6					0.6					
カラヌサンショウ															0.6									
アラカガシショウ	3.5	3.2				0.8					0.4			2.4		(1)								
ツゲ		0.6																						
ハゼ			0.7	0.4											1.2									
イヌフグ	0.4			0.4				0.6																
グミ			0.7																					
シナノキ				0.4	0.8									(1)	1.2		0.6	0.6						
ホルトノキ	2.6				1.9											(2)								
ミズキ	0.2	0.9																0.6						
ハイノキ		3.1	1.3	6.0				5.6	0.6	0.6		0.8		2.4		1.6			(1)					
エゴノキ			0.4												1.6									
ムラサキシキブ									3.8				0.8		3.0									
オオモチ	0.3		0.4									0.8												
ミオノキ		1.4	0.4	0.8				0.6	0.4						1.8	(1)	0.8	3.3	(1)	(1)				
ガマズミ																	0.8	1.7						

表2 草本花粉分布表( )内は花粉量(試料20g当り)

深さcm	B - 1										B - 3					D - 1													
	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	0	10	20	60	70	80	90	100	110	120								
ヤマ属	3.5	3.2	11.3	9.8	5.1			7.1	6.4	3.4	(3)	5.6	(3)	10.2	(6)	(3)		8.6	(3)	(2)									
ヘラゴモガ科属																													
オモダカ属	0.2				0.5							0.8																	
イネ属	64.7	63.9	58.5	27.2	16.6			11.6	6.0	5.3	(2)	25.8	(9)	5.9	(2)	(1)	15.4	19.7	(1)	(1)									
その他のイネ科	86.9	42.6	68.6	22.6	20.0			5.8	2.8	5.8	(4)	28.6	(2)	18.7	(1)	(2)	8.4	8.5											
カヤツリグサ属	4.2	3.5	7.8	11.1	5.9			4.5	2.6	2.8		16.2	(3)	8.4	(1)	6.4	7.2												
ヨナギ属																						1.6							
タヌキモガズラ属																	1.2												
カナムグラ属	0.2	0.2															(1)												
カクムシ属																	(1)				1.6								
ギンジシ属	0.2																												
ミヤナギナガ属	28.2	51.2	50.3	8.5				1.3	2.0	1.2								(1)											
イタドリ属				0.7						0.5																			
サナエタデ属	1.4	1.2	3.6	1.7				0.6	2.0	0.9		1.6		1.2			4.8	1.6	(1)										
ソバ属	2.1	3.2	12.7	19.2	6.8				0.4		(2)	1.6		3.0			0.8	0.8											
アカザ属	1.4		2.8	1.7	1.7					0.8							2.4		0.8	2.4									
イノコヅチ属	1.4	0.2	2.1	0.9	0.8							0.8		0.6															
スペリヒユ属			0.7																										
ナデシコ科	2.8	5.0	2.1	1.3	2.5				0.4	0.9		5.6	(2)	7.2	(1)			0.8											
キンポウゲ属	0.9	0.2	0.7	2.6				2.6		0.3		0.8	(1)	3.0	(1)	(1)	2.4	1.6	(1)										
カラマツソウ属			0.7							0.8				0.8			(1)		1.6										
アブランチ科	21.1	12.1	100.7	18.8	40.0				0.6			20.2		2.4															
ワレモコウ属				0.4					0.3					0.6		(1)		0.8											
キジムシロ属												0.6																	
キンミズヒキ属												0.8																	
ノアズキ属												0.6																	
ゲンノシウコ属	0.4	1.8							0.3			0.8																	
トウダイイグサ属	0.6	2.6						0.3																					
ツリネシキ属																	(1)												
ブドウ属				0.8										0.6		(1)													
フタ属	0.2	0.4																				0.8							
オトギリソウ属							6.2	16.9	1.8		22.7	(6)	13.2	(3)	(1)	26.0	42.4	(2)	(1)										
キカシゲナ属						0.6																							
ヒシ属						0.5																							
チュウジタ属																						0.8							
アリノトウガ属	0.2		1.4	5.1	1.7			3.2	2.8	2.2		3.2	(2)	5.4	(1)	(2)	11.2	7.2	(1)	(3)									
セリ科	2.4	2.1	6.4	10.3	5.8			6.4	9.6	10.2	(6)	8.9	(3)	8.4	(9)	(9)	11.2	12.8	(1)	(1)									
オカトラノオ属	0.4											0.8																	
ティカカズラ属		0.7																											
サカキカズラ属				0.8																									
キツネノマゴ属	0.4	1.2	2.8	1.7	0.8				0.3			2.4																	
アマチャズル属																													
キユウリ属	0.8																												
コモギ属	1.9	3.5	11.3	11.5	18.5			13.5	28.1	18.6	(6)	22.6	(29)	46.8	(41)	(1)	35.2	48.8	(5)	(3)									
その他のキク科	28.0	15.4	28.4	32.0	36.4			6.4	14.9	12.7	(2)	23.4	(5)	21.6	(2)	(9)	21.6	24.0	(9)										
シダ類胞子	46.5	73.7	389.5	296.1	569.1			262.2	104.8	96.7	(184)	168.0	(357)	372.2	(377)	(381)	312.8	309.6	(160)	(187)									

1	Cryptomeria	ス ギ	B - 1 - 10cm
2	Tilia	シ ナ ノ キ	B - 3 - 10
3	Randia	ミ サ オ ノ キ	D - 1 - 90
4	Cyclobalanopsis	カ シ	B - 1 - 0
5	Helicia	ヤ マ モ ガ シ	B - 1 - 0
6	Myrica	ヤ マ モ モ	B - 1 - 0
7	Symplocos	ハ イ ノ キ	B - 1 - 0
8	Oryza	イ ネ	B - 3 - 10
9	Firmiana	ア オ ギ リ	B - 1 - 0
10	Fagopyrum	ソ バ	B - 1 - 90
11	Monochoria	コ ナ ギ	D - 1 - 90
12	Chenopodium	ア カ ザ	B - 1 - 0
13	Thalictrum	マツカゼソウ	D - 1 - 90
14	Sagittaria	オ モ ダ カ	B - 1 - 0
15	Viburnum	ガ マ ヴ ミ	B - 3 - 0
16	Parthenocissus	ツ タ	B - 1 - 0
17	Carex	ス デ	B - 3 - 10
18	Achilanthes	イ ノ コ ズ チ	B - 1 - 0
19	Ambrosia	ブ タ ク サ	B - 1 - 0
20	Euphorbia	トウダイグサ	B - 1 - 0
21	Clematis	センニンソウ	B - 1 - 0
22	Polygonum	ミ チ ャ ナ ギ	B - 1 - 0
23	Typha	ガ マ	B - 1 - 0

いづれも×1000

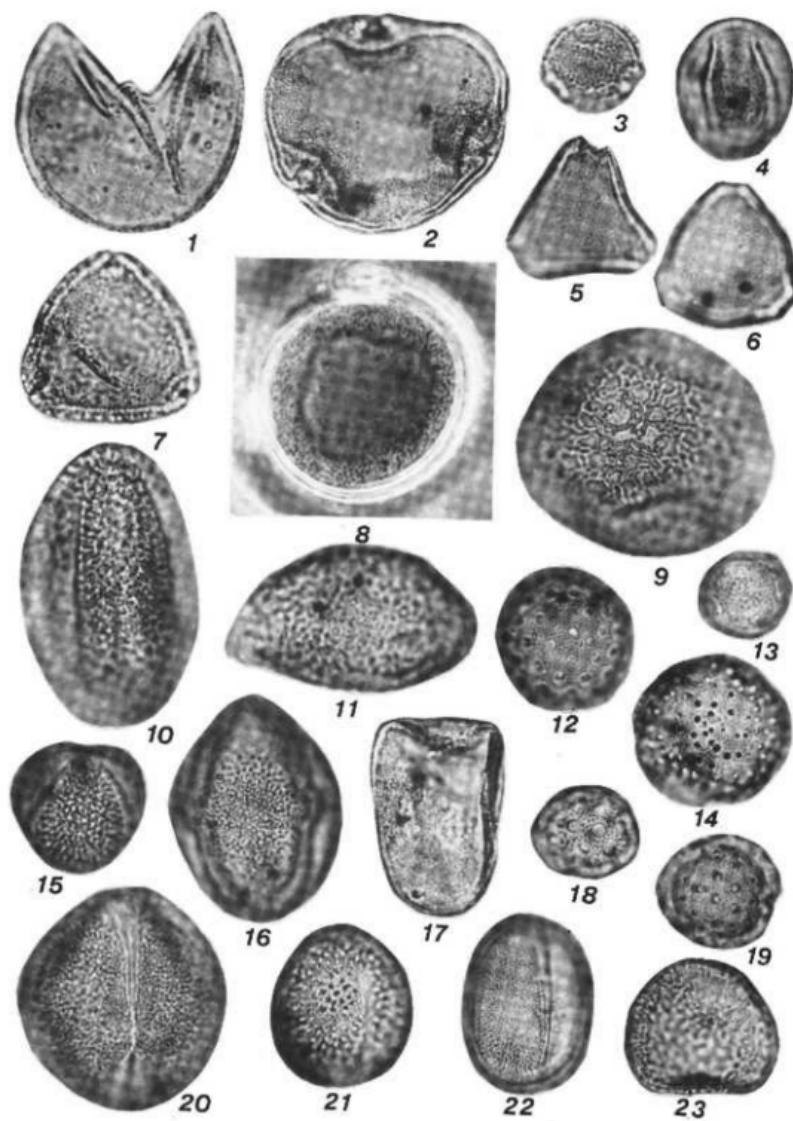
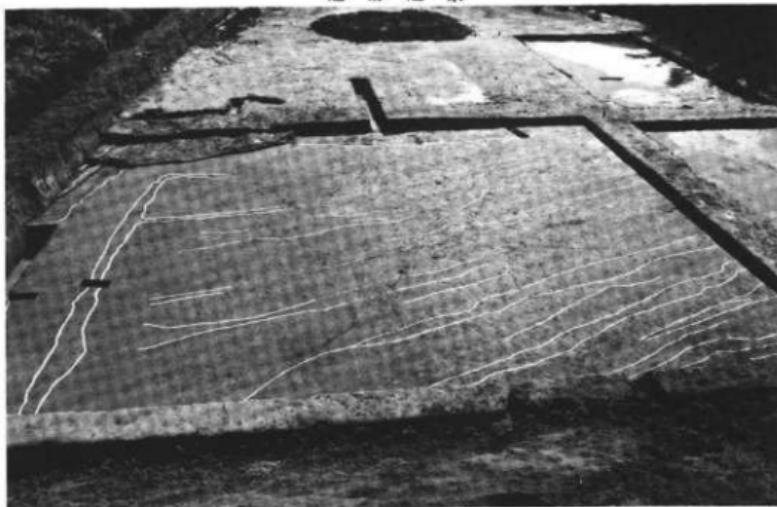


図 版

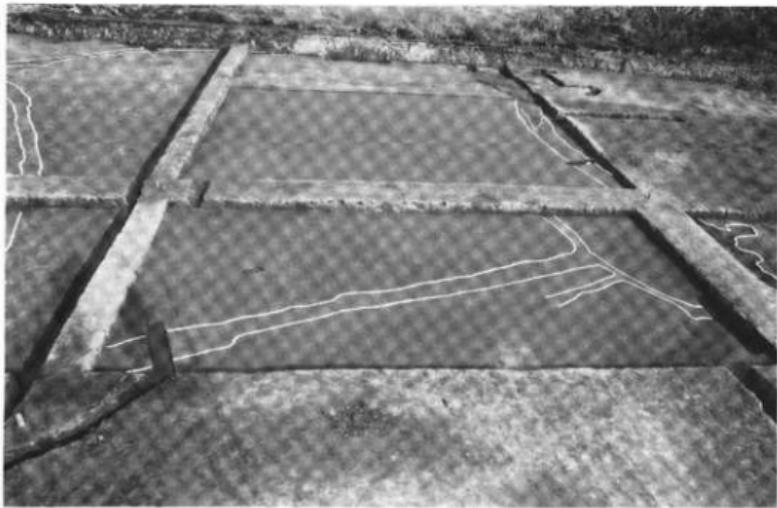


遺跡遠景



畝状遺構

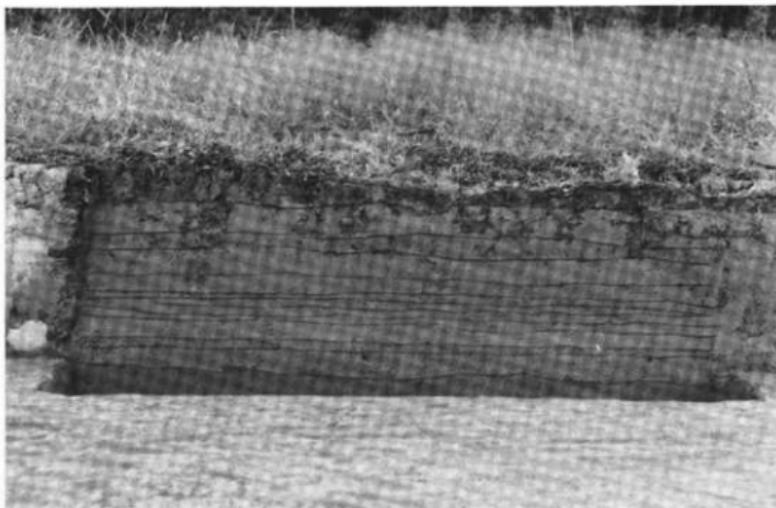
図版  
2



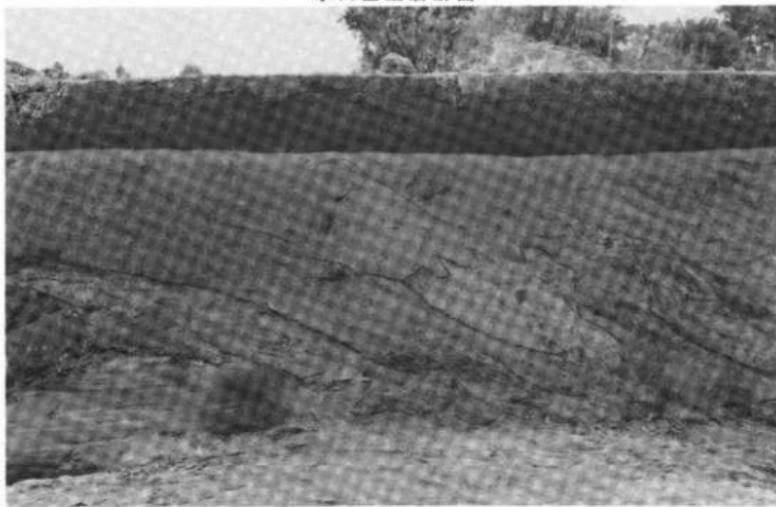
大畦畔と畝状遺構



水路分岐点

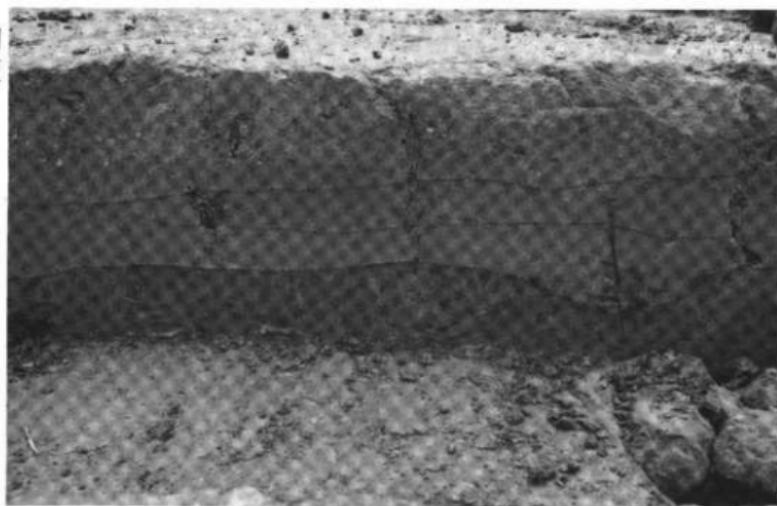


水田面土層断面

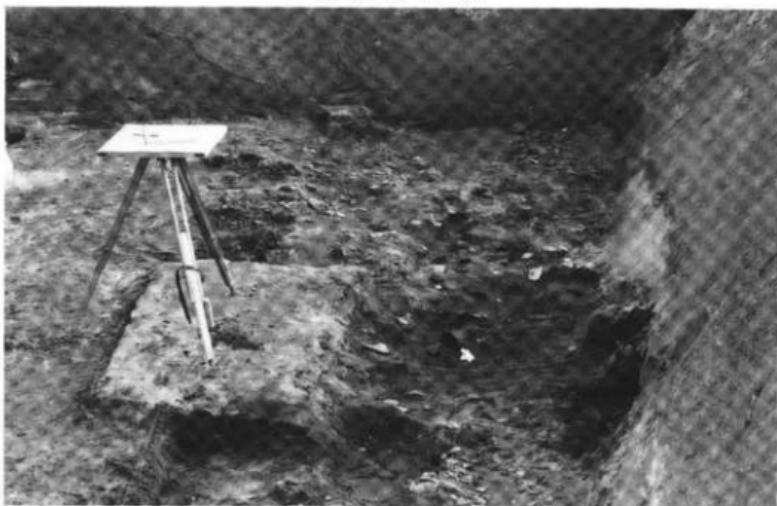


流水堆積層土層断面

圖版  
4

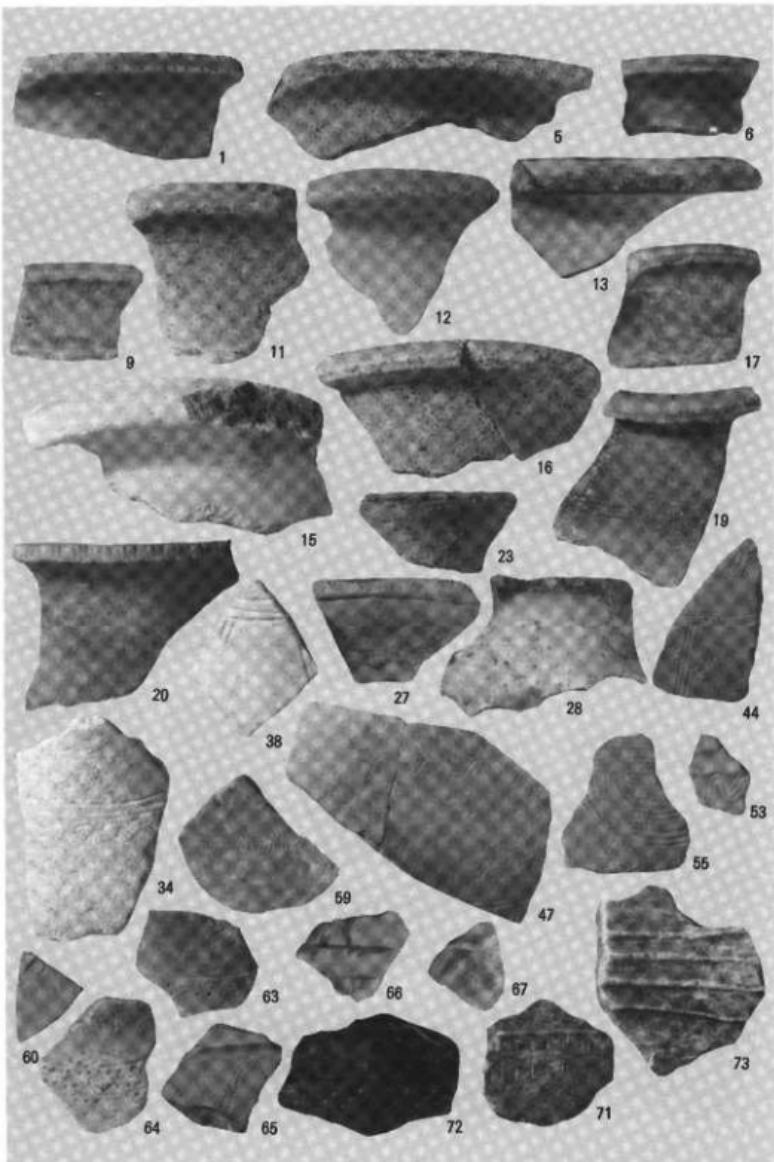


珪 畔 断 面 図



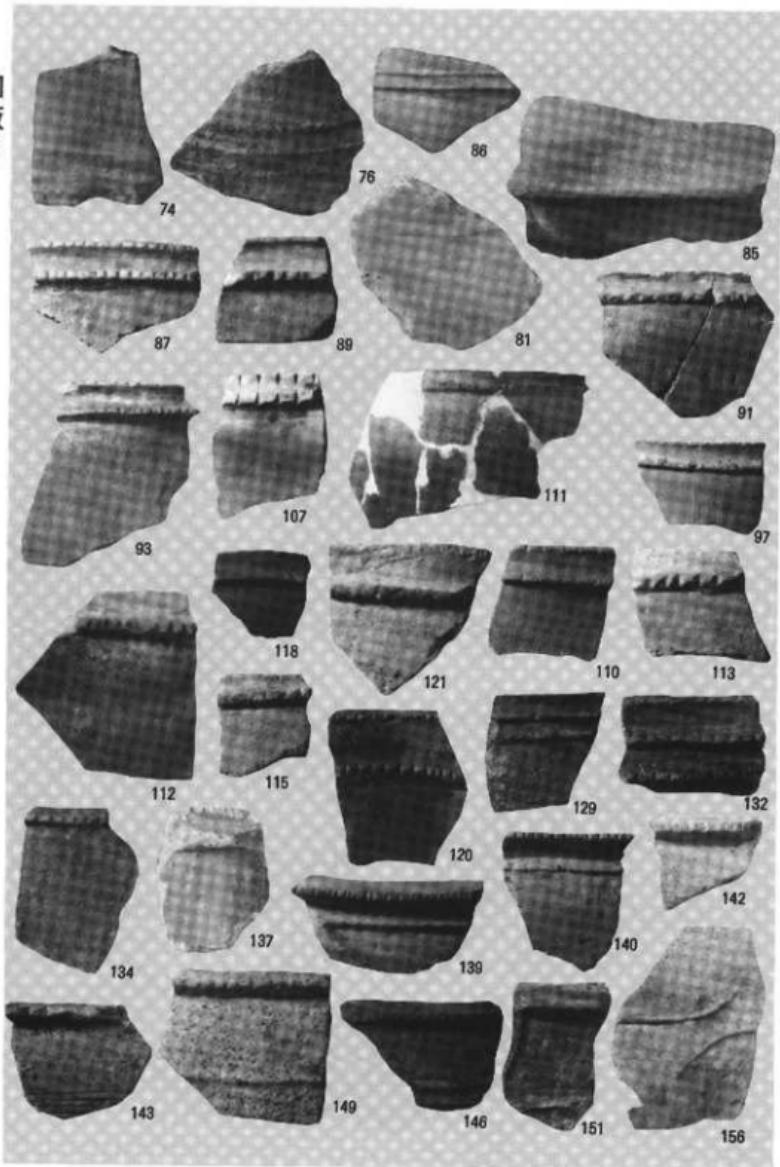
遺 物 出 土 状 況

図版  
5

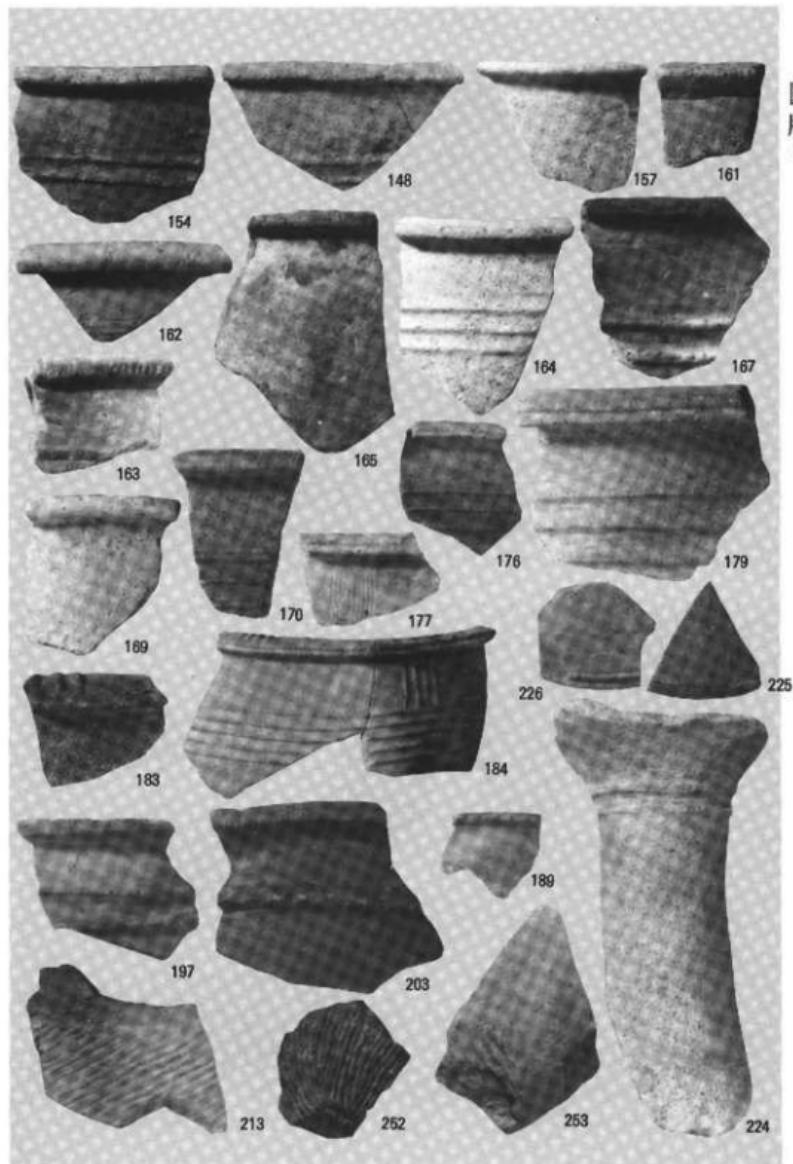


弥生土器（番号は図面遺物番号に同じ）

図版  
6



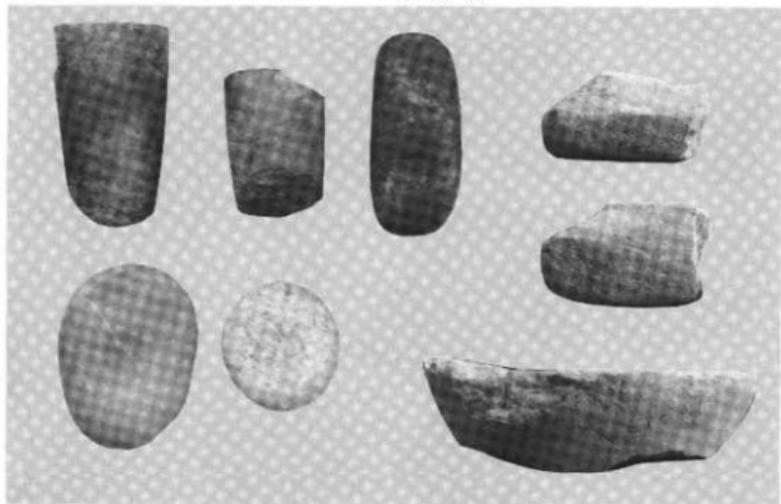
図版  
7



図版  
8



石器・石製品



石斧・凹石・磨石

五輪塔

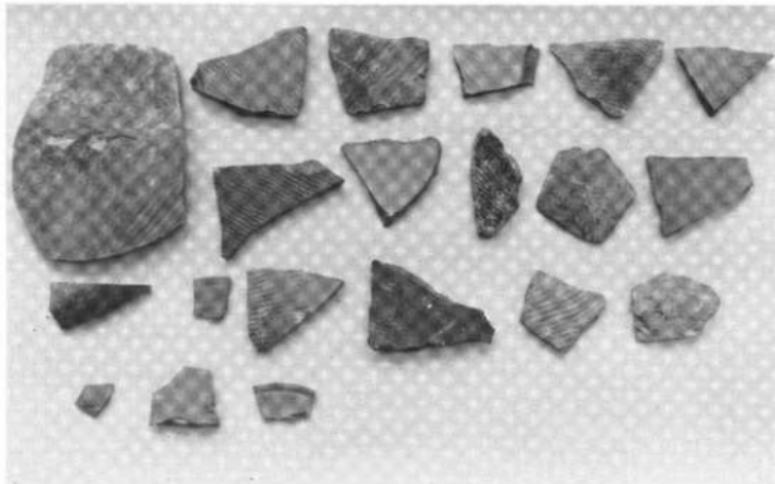


中世陶器



輸入陶磁器・土師皿

図版  
10



保木下遺跡発掘調査報告書

発行年月日 昭和61年3月31日

編 集 宮崎県教育庁文化課

発 行 宮崎県教育委員会